明治三十三年二月五日發兌

女鑑

第百九拾八號

東京國光社

女鑑第百九拾八號

目　録

女鑑臨時發刊豫告

我が神州の淑女をして滔々として輕佻浮薄にのみ趨らしめたりし秋にあたり本社同人衷心深く憂慮する所あり明治廿四年八月本誌を發行し女敎の要專之を萬邦無比なる歴史に徵し之を祖先の遺範に稽へ優麗貞淑なる日本女子固有の特性を啓發することを本旨とし以つて忠良なる日本臣民の賢母良妻婦女子の伴侶たらしめむことを務めてより年を閲すること九年號を重ぬること百九十八號に及びぬ今や世運の推移は海內諸般有形の事物概皆舊觀を改め更に國威の伸張は內外の人雜居して等しく大御稜威に賴るにいたれりまことに前古未曾有の時期に遭際せり是に於いてか吾人同人の益々奮勵盡碎を要する者また多く加はりぬ玆に三月五日發行すべき本誌第二百號を臨時發刊となし女子問題に熱心なる諸家の剴切精覈なる意見を蒐め又厚く賞を懸けて緊切なる問題の解釋を求め汎く歌文を募りて其の精を選び萃を集め以つて大書册となし一は刻下の急に應し一は多年愛讀者諸媛の厚誼に酬いむとす

第一懸賞題

一 地方に於ける婦人會の規則

地方に於いて小學校卒業以上の女子及び一家の主婦たる人々の爲めに徳風を奬め日常必須の知識を得せしむる目的を以て組織する婦人會は如何なる方法によりて組織するを最良とするか之を完全に細示する規則書

規則書中に掲ぐべき要目

▲會則に掲くべき教訓▲會合の場所、時日、刻限▲講師招聘の方法▲講義談話の要目及び其の仕方▲備へ付くべき書籍、雜誌の種類▲會員の心得書要領▲會費の徴否及び其の費額▲會頭及び役員の推擧及事務要領▲會員中に遵守すべき規約の條項(この規約は各人平素専ら家政上に於いて實行すべき事柄たるべし)▲以上の各項は最も切實なるを主とし何れの處にも實施せられ得べきものたることを要す假令其の方法善美を盡すものなりとも今日の地方に於いて實施し難きものと認むる時は採らず▲且つ各地状况各異なるものあるを以つて町と村落とに差別あるものは各項の下に割註にして町にては何々村落にては何々と記すべし

一 男女何人にても應募することを得

一 優等者には賞として訓誡の金言を彫刻せる金側時計 一箇

第二懸賞題

一 自ら戒むる詞

湯の盤の銘のことは今更に之を言ふべきにあらず 明治の御代に生れ遭ひたる日本婦女子が之を座右にして朝に夕に省み戒むるに最も適當なる詞は如何なるものならむ 本社は敢て文字の數を限らず書くべき要項を示さず唯最も簡潔にして最も日本婦女子の戒箴として最も深き意あり最もひろく用ゐらるべき上乘の作を得むことを望む

一 婦女子は何人にても應募することを得

一 等優等者には 鏡 一面

裏に當選の詞を朝野に推重せらるゝ高徳の士に揮毫を乞ひ之を彫刻せしめて美麗なる箱に收れたるを贈呈せむ

第三懸賞題

文 わかつとめ

仝 所感

仝 平和

仝 なつかしきものと羨しからぬものと

歌 慈悲のこゝろをよめる

仝 花を待つ

仝 菅原道眞

一 應募者は女子に限る又一人にて數題を物するも妨げなしと雖も然る場合は一題毎に別紙に記し題の下に住所姓名を記載すべし

一 文にて貳拾篇、歌にて三拾首の秀逸なる者を選拔し更に歌に一首文に一篇優等なるもの並びに本社が特に堪能なる技士に嘱して製らせたる左の賞を呈す

文 優等 文庫一　歌 優等 硯箱一

秀逸 臨時發行の女鑑一部宛

⊕二月十五日を以て〆切期限とす遠隔の地にて應募せむとする人は遲くも二月十三四日迄には本社に到達する様に發送せらるべし⊕應募の文は楷書にて記すべし假字は平假字片假字いづれにても應募者の自由なりといへども最も普通の字體を用ゐて明瞭に記し決して二字以上連續せしめ若しくは異體の假字を用ゐるべからず⊕郵税不足郵税先拂等のものは受取らず⊕女鑑二百號臨時發刊(三月五日發兌)の紙上にて發表すべし⊕各懸賞題の當選者は優等者發表と同時に發表すべし⊕應募者は應募者の姓名又必す住所を記すべし、匿名を用ゐることをゆるさず⊕懸賞問題に關する文書の宛名は國光社女鑑編輯部宛にし表書にて懸賞の二字を記すべし●心得の諸項目に依らずして應募せる者は受賞の[illegible]に加へず

臨時發刊

國光

二月十一日發行

人心の頽廢風俗の淫靡殆底止する所を知らず邦家の將來洵に痛憂に堪へざるものあり冀くは此の册子をして惰民社會に於ける半夜の警鐘たらしめむ。

◎世界に於ける日本の地位及其現勢

英露獨佛伊米列國の海外政策を詳論し、その内面に於ける強弱長短の秘密を發露して、東亞の天地、累卵の狀勢に及び、我が日本國の地位現勢燎然として、掌に指すが如く、一讀悚然、蝸牛角上の小紛爭、小利慾心を蟬脫して、猛然省察、邦家のために奮起するに至らしむる大文章なり

◎日本教育の大本

我が國、今日の教育は、諸國流行の寄せ集めにして、國家本來の特相に基きたる根本的主義精神の、未確立せざることを切論して、歷史上、地理上、倫理上、國家の天職上より、日本教育の基礎たるべき要目を列擧し、以て、世の熱誠なる教育家に質さむことを期せるものなり

◎此の風俗の頽廢を奈何

風俗矯正は、爲政の本源なることを論じ、當今の人心頽廢世風壞亂の原因する所を抉出して、その責の歸する所を痛言し、閣臣、元勳、文武官吏等、在上者の大反省を促し、憂世慨時の識者は此の際大に世道維持に盡瘁せられむことを企望せる苦言なり。

（劍光）拜金主義と道德（東久世通禧）矯世危言（渡邊國武）憲政完美の要訣（今井恒郎）師弟の情誼と現行法律（矢島浦太郎）古今教育主義の難點（黒川邦彥）獨逸海外政策に感あり（宮島中夫）日本の國富と人民の負擔（寺師宗德）農家の有志者に告く（樋田魯一）以上何れも皆沈痛剴切なる濟世の忠言

（サラニツヾク）

紀元節發行

國光

臨時發刊

（瓊德）勅語要義（東久世伯）蒼海先生（偶話）仁と智ともに金玉の教訓

忠本論（大川渉）人世禍福の岐路（樋田魯一）倫理（尚古庵）機言（西三閣主人）

養心論（川崎重陽）以上、何れも、皆、日本思想の本源に遡り、君子國人の本領を發揮せむことを主旨とせるものなり

（鏡影）德川齊昭傳 邦人の元氣日に愈銷沈せんとする現今の頽勢を挽回せむため特にこの巨人の遺影を映出す

（硯海）孝明天皇御逸事（記者）朝倉の大宮社（三橋要也）太古史の研究につきて（庭井尋）琉球語研究資料（田島利三郎）何れも皆國史上の一新光彩

和歌、詩、文、精を抜き粋を蒐め 書簏は珍絶の佳句を以て充たし

八瀨の炭竈（堀内飛泉）日本武士の大節操眞面目を描出せる麗妙の小說

昔時の塾舍と今日の寄宿舍 教育者の最有益なる參考、學生の最趣味ある讀みもの 此の他 人傳

名勝誌、佳話一束

●本誌定價郵税共一冊金拾錢 臨時發刊に限り金參拾錢（紙數凡一百五十餘頁）

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所 國光社

（電話番號新橋八八）

小式部内侍



心がけ

誰彼の事となく、彼、これ、事よく眼とまるは女の性なりとかや。又物となく、事となく、よく心づき、氣づくは、女の質なりとかや。而して、其の眼とまるや、大方はあしき事、さらずば徒事にて、よろしきは、さのみ見えず。心づくも、氣付くも、またしかりとか。故に多くは、人をおとし見、恨み、そねみ、又、その短きを責むる事重き、さながら、冬の夜の長きを云ふ方はあまりなくて、日の短きをかこつ方、多きが如く、夏の日の長きを云ふは、少なくて、まだきに明けぬる夜を惜しむ方の多きが如し。而して燈臺もとくらしと云ふ諺にもれず。己が過ちは、目にも耳にも入らず。心も氣もつかざれど、自は、いみじうのみ覺えて、責むる事もまたうすし。あはれ、之をさかさまに見聞き、心づけなば、いみじううつくしき女とならんぞ。

古語に云ひけらく、耳に人の非をきかず。目に人のみじかきを見ず。口に人のあやまちを云はざるは、君子に近しと。阿波の内侍が曰く、よき人は、人のあやまちをつぶさに問はず。待賢門院堀川が曰く、聞きて益ならぬ事は、大やうは聞かぬがよきものなり。きゝてよきは琵琶、和琴、春のうぐひす、秋の鹿など云へりとか。めでたき心ばえの人々よ。我聞く、馬は眼大なり。故に人など、いみじう大きく見ゆとか。雀のせまき心には鵠の大なる心知られず。又青き眼鏡にて見れど物皆青く見え、赤きにて見れば赤く見え、紫にて見れど、紫に見ゆ。大方、其の眼の見ざまにうつるものにて、人のあしき事のみの見ゆるは、己が心にあしき事の多きにて、人のよろしきにも心づくは、大方、其の心の直き人なり。さればとて、水たまりをよろしき道と見、莠草をも、稲むきのいみじきに見る如き、春の夜のおぼろの心にせよとにはあらず。眼あきたらん限り、心あらん限りは、聰明叡智たるべし。たゞあしきにのみ眼つけ、いたずら事にのみな心づけそとなり。さても、小松の御門の位につかせ給へるや。もと、此の御門の御母は、基經の大臣の御母のはらからにおはしましければ、基經の大臣は、ちごより、したしく小松

の宮を見奉らせ給ひて、ことにふれて、きやうさくにおはしますを、あはれ君かなと見奉らせたまひけるが、良房の大臣の大饗にや、むかしは、親王たち、必ず、大饗につかせ給ふ事にて、わたらせ給へるに、雉の足は、必ず、もる物にて侍りけるを、いかゞしけん尊者の御前にとりおとしてけり。陪膳する人、みこのおまへのをとりて、まどひて尊者のおまへにすうるを、如何おぼしめしけん。おまへにともしたる大となぶらを、やをらかいけたせ給ひける。此の大臣は、そのをりはげらうにて、坐のすゑにて見奉らせ給ふに、いみじくもせさせ給ふ物かなと、いよいよ見めで奉らせ給ひて、陽成院おりさせ給ふべき陣のさだめに侍はせ給ふ。融のおとゞ、やんごとなくて、位につかせ給はん御心ふかくて、近き皇胤をたづねば、とほるらも侍るはと云ひ出でたまへるを、この大臣、皇胤なれど、姓を給はりて、たゞ人にてつかへて位につきたるためしやあると申し出で給へれど、さもある事なれば、この大臣のさだめによりて、小松の御門は位につかせ給へるなり」と大鏡にも侍るめり。つねの御心ばせならんには、いみじき無禮、我をばある甲斐なく見るよと怒りの給はせんも、御道理と見奉るべきを、中〳〵に大となぶら

かいけたせ給ひて、まどひたるさまをかくし奉らせ給へる御心付けのほど、かたじけなく見奉るに、之に眼をとゞめ奉りたる大臣も、またいみじきかな。あはれ姫たち、同じ眼をとゞめんには、かやうのかしこき道に、同じ心をつけんには、かうやうのやんごとなき道にと願ふばかりになむ。



日本女子今後の覺悟（十四）

三輪田　眞佐子

なほ、現今のわが國に行はるゝ國風民習につきて考ふるに、その由來は、歴史上の故實に源するものあり。宗教上の觀念より起るものあり。亦、地方によりて、一種の風習を作るものあり。然るに、苟も、これ等の人々と交際して、いつも非禮の誹を免れんとほりするは容易にあらじ。たとへば、神葬祭を行ふ家風には、靈前に鮮魚を供ふるものなるに反して、佛葬式を行ふ家風にては精進をつとむるなり。故に、若し誤りて、かの佛前に拜しつゝ、死を哀む家に向ひて、鮮魚を贈り、そを靈前にと言はんか、果して、如何なる怒を招かんも知るべからず。亦自ら、その誤を悟らば、必ず、禮を欠きしを悔いて止まざるべし。凡

そ、凶事のときに於いて、贈品に用ふる水引は、結びきるを法式とするものを、若し誤りて、引き返しに結ばんか。これを不吉として忌むものあるは、全く、常例に戻るを以てなり。されどいまだ、その作法を知らざるものもあらん。その他種々の習慣あり。然るに、その習慣を辨へざるがために、禮儀を失ふとせんか。遂には圓滿なる交際を破るに至るらんかし。

然れども各家の宗教を異にし、地方の習慣を別にし、若しくは貧富の度あるは、教育の度に等差あるもの相互に交際するとせんか。必ず、相嘲り、相譏るに至るべし。故に、今後の日本國民たるものは止むべからざるもの丶外は、儀式作法を、一定して、之を學校に普及せしめ、以つて、西海の人と北陸の人と相交るにも、その敬を表し、禮を行ふ道に差異なからしむべし。わきて敬語のごときは、一樣なるを要す。然るに、今日、これらの一定を怠り、國民をして、一致の交際法なからしめんか。すなはち、文明國の體面を汚すのみならず、國民相互の情誼をも濃かならしむること能はざるべし。

蓋し、國民の儀式作法を一定ならしめなば、時勢にも、相應し、以つて外國の人々にも、日本人と交際するにはか丶る作法を守るべきものと適從するところを知らしむるこそ、目下の肝要なれ。おのれは、つねに、わが國の現時は、人事の變遷する際なれどにや。いまだ、一定の社交法なくして、唯、そを各人臆測に委ぬる觀あるを見て、君子國の實を失なはんことを恐る丶なり。

熟、延喜式を始め、種々禮容を記るす書を見るに、往昔のわが國民は、既に社交の禮分定りけり。然るに、文化の進歩せしと誇る。今日にして。官服

などは、一定せんも、民間の常法は、漸々搖動して、殆ど標準を失ふもの丶ごとし。あはれ、如何にすべきか。

女子原勢力（承前）

日本女德會(未來)會員　湊　政子

家庭に於ける女子

家庭の女子は、至誠忠實にして、孝順を要し。學校の女子は、之に謹愼强勉を加ふるのみなれども、初期なる社會の女子は、則ち、女子終生の四分の一を經過したる時にして、成立期なり。既に、成立して、夫家に歸嫁すれど、一面、尙、家庭の女子にして、一面は、社會の女子なれば、女子の責任、始て、重し。如何となれど、舅姑あり。義兄弟姉妹等あり。良人は、外に向ひて掌る所あるが故に、妻は、專ら內政を理して、家庭の圓滿を保たざるべからず。是より妻たり、又、母たるべき義務眼前に在り。良妻賢母の實を舉ぐべき準備、目下に促されん。夫れわが邦の婦妻たる者の責任は、歐米諸洲の「ブライド」及「ワイフ」と同一ならず。又、ドーター、インロー、にも等しからず。渠等は、良人を扶掖して、社交場裡の調理者たるのみなれども、本邦の婦妻は、國體國風の特例なるだけ、別に舅姑に仕へ、義兄弟姉妹等を待遇して、圓滿の基礎を立てざるべからず。是却つて、將來自己の肉體精神に快樂を迎ふる原因にして、人爲の巧妙なる美風なり。次に來れる重大任務は、子女の敎育にして、凡そ、子女の生る丶や、先づ、其の母に乳養せられ、懷を離る丶も、尙膝上に鞠育せられ、既に學齡に達するも、膝下に生長し、進で、中學齡に至り、將た社會に立つも、

父の監督と、母の矯正注意を與へざるを得ざるなり。

されど、母たる者は、家庭の初は、幼稚園に於ける、媬姆の如く、學齡に至れば、猶、教師のごとく、常に、標準模範となりて、人事百般の品性を秩序的に射映し、或は、智能を注入し、又、啓發せしめ、或は、道德を涵養し、健康を保たしめ、之をして、社會の紳士淑女たらしむべき素養を薫陶せざるべからず。約言すれば、母たる者は、家庭學校社會の女子の活標本德體智育の助長者たらずんばあるべからず。是、則ち、女子本能の一分なり。但し男兒は、女兒と異にして、幼より、其の行爲を拘しうすべからず。請ふ、家庭教育時代は、之を保育するに、男傅をして事に從はしめんを。蓋し、往時武門の盛なりし時代に當り、男兒は、必ず、男兒の適當なる傅をして育成せしめたれども、其の子自ら勇敢にして、女々しからざりしなり。而して、女兒も、媬姆をして、成育せしむるには、最、適當順良なるを擇びて然り。之に放任すべからず。要するに、完全なる教育を受けたる女子に非ざれば、子女を教育すること能はず。良人に貞淑なる能はず。舅姑に仕ふる能はず。子孫に慈なる能はず。衆諸を博愛すること能はず。之を約言すれば、猜嫉無能にして、獸蛇的壞散力あるも、全良なる原勢力あらざるなり。

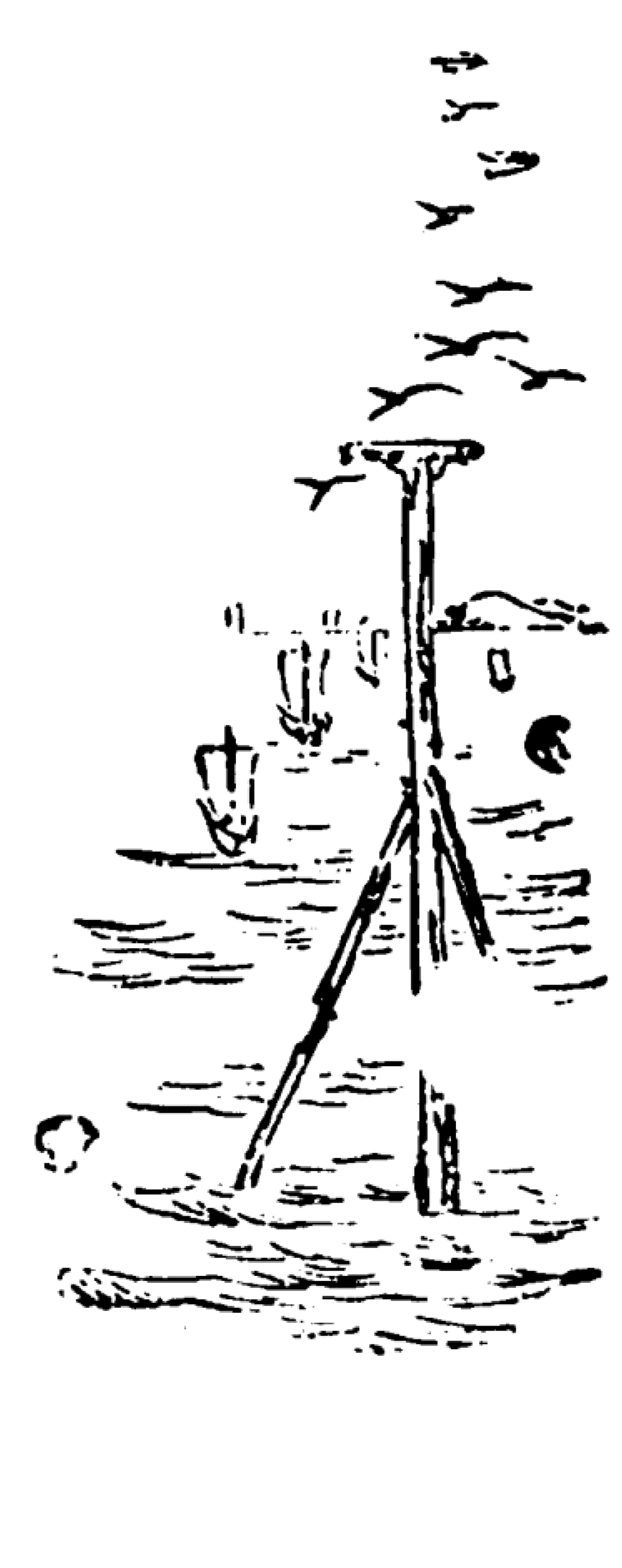
社會に於ける女子

女子は、専ら内政を理めて、家庭の任を全うせば足れり。否終局の目的たりと信ずる者あれども、然らず。將來の女子たる者は、尙更社會に於ける任務あり。則ち、女子終生の四分の三は、既に成立したる社會の一人にして、妻たり、寡たり、母たるに拘らず、社會の風紀を保つべき、一有機物

なり。此の有機物や、社會の風紀を振肅し、維持する力あるだけ、亦、之を紊すべく、之を覆すべき力あり。之を改良し、清掃するも、亦本能の一分たり。世の酒食に耽り、財貨に溺るゝ者、鮮からずと雖、未だ、色慾に迷ふ者に及ばず。且つ、他の情慾は、大概、此に起り、諸の非行も、多くは、之に因せり。そも〳〵、人類の兩性は、有機物なるだけ引力あり。殊に女子は、感情深きだけ、亦、男兒に勝れり。夫の嫉妬の、男子より多きも、他に一因あれど、其の主因は、引力作用の反應なりとす。故に、天は、社會制裁の外、自制の止むを得ざるものを以て戒愼せしむ。さて、其の引力は單なるあり。多なるあり、單なるは、淑女にして、女德を全うすべけれど、多なるは、淫婦にして、之を破るべし。又、能く社會の風紀を振肅し、維持するは淑女にして、淑女は、必ず單引なり。然

るに、今日の形勢として、日本の現象として、此の天則に及したる、一種の人爲的變則あり。則ち醜美に從ひて、引力を異にす。換言すれば、美人と稱せらるゝが多引にして、醜なるが單引なり。依りて美人は淫婦にして、醜婦は淑女なりといふ非論理を立てざるべからず。是固より、天の然らしむるにあらで、美人は男性の引力に伴うて。自ら多引となり、醜婦は、之に反す。故に原勢力の發する所と、壞散力の生ずる所とは、常に、一定の境域を有して、約ね優勢を壞散力に黠ゐらるゝなり。蓋し、醜婦は、男性引力の受動なきより、競に、學藝に從事して、樂天の主義を持し、淑女女學者といへば、醜婦の代票詞の如くなりて、社會に在るも、一の器械たるに過ぎず。自ら、社交上の風紀を振肅し、維持する機會を得ざればなり。抑醜美は、好惡の一感情にして、顔面の一具を缺

かば、美人も醜婦に劣れり。況や、一皮を剝ぐに於てをや。又、況や、山神の不具なる者に於いてをや。若し、將た、顔面の一具を缺きたりと假想せむ、豈、醜美の別あらんや。妾とて先天の醜婦なれども、敢て、美ならんことを欲せず。精神の不具ならざらんことを希ふなり。否、妾は、醜美の標準を知らざるが故に、自ら醜なりとも、又、美なりとも信せず。此のころ、或新聞に醜婦を美人とする藥なりとて、二婦人を對照して、說明して曰へり。此の醜婦にして、斯の如き美人となりぬと、然れども、其の醜婦としたるは、飼面なるに過ぎず。美人としたるも、飼面の治したるまでなれば、何の別あらん。且つ、甲の美といへるもての見る所異なるあり。況や、邦人と外人との見解に於てをや。今、歐米人の好みて妾とせる、わが醜業婦をみるに、邦人は、皆不美人といへり。されば、邦人の外國に遊ぶ者、彼が、國色の秀なりといふを信じて妾とし、歸りて、之を誇示すれども、妾等の見る所、却て、他の數多なる外國婦人に劣れり。彼亦、眞に美人なる所以を知らざるなり。彼の國の評判を知りて、妾としたるのみなり。畢竟感情に屬する好惡にして、固より、標準定義あるにあらず。されども、わが國俗の目して、美人と稱する美人も、奮て受動的反應を制し、能く、天則を守りて、單引なる淑女たらんことを庶幾す。然らば、社會の風紀を維持し、振肅して、日本女流界の一新改造を果さんこと疑ふ、からざるなり。





忠孝

我が國は、純然たる一大家族より成立し、君臣、同じく、天神の血統を受け、國民、總べて、其の祖先を一にせり。而して、皇室は、天祖の御嫡流にれはしまして、天壌無窮に、此の國家を統治し給ひ、臣民は、天祖の支流皇室の分胤にして、開闢の初より、永く、皇室に臣事せり。故に、皇室と臣民とは、宗家と支家との如く、又、親と子との如きなり。是を以て、上は、常に、仁慈を以て、下民を子愛し給ひ、下は、常に、忠誠を以て、其の君上に親事す。而して、臣民の、君に忠なるは、即、其の父母に孝たる所以、父母に孝なるは、即、君に忠なる所以にして、忠孝全く一途なり。是、即、我が國の粹美なる道義にして、世界萬邦に、其の比を見ざる所なり。

夫の海外諸國のごときは、其の成立、全く、我と異りて、王位に在るものも、一旦、權勢を失ふに際しては、忽、他の掠奪を免れず。概、短きは數世、長きは、數十世に過ぎずして滅亡す。而して、之が民たるものも、即、今、戴く所の王者は、己が祖先の戴きたる王家を滅したる仇敵なり。己が父祖、先人は或は、其の爭亂の干戈に斃れ、或は、其の興敗の跡を慨し、憂憤して、世を終りしものなり。故に、王家に忠實なるは、其の祖先の意に協ふものにあらざるなり。其の祖先の意に從ふものは、其の王家の爲には、叛逆者なり、不逞の臣民なり。かくの如く、忠孝、一致結合せずし

て、兩者、自分れて、二途となる、彼にありては、固より、當に已むべからざるなり、我が國にありては然らず、吾人臣民の祖先は、皆、皇祖皇宗に、忠實なりし臣民なり、吾等の祖先は只管、皇運の、長に隆盛ならんことを祈り奉る外、他念なかりしなり。天壤無窮なる寶祚は、大八洲赤子の上に、德澤を垂れさせ給ふこと、古今、嘗、易ることなし。此の君國に忠愛なる子孫は、其の祖先に大孝を申ぶるものなり。其の祖先の忠實なる誠意を承繼するは、子孫たる者の、無上の大孝なり。忠は、則、孝なり。孝は、則、忠なり。此の至美なる皇道は、君臣相和し、億兆協同し、國運を隆昌ならしむる大本にして、宇內無比なる所以なり。

小式部內侍

鹽井ふく子

針は小なれども飮む能はず。小さきものもあなどられぬ例にひかれたる小式部內侍は、和泉式部の女にて、父は藤原道貞なり。小式部、母の才をつぎてや。幼けなきより和歌をよくし、宮中に歌合せある每に、多くは秀逸をとりて、半白の老翁も及ばぬ事多かり。されど、かれは、母のよみてとらするものならんと誰も〳〵思ひ居れり。さるほどに、父世をはやうしければ、母は、まだ丹後守保昌に嫁して、共に、その國に下りけるほどに、京に歌合せあり。此の小式部も歌よみにとられけるが、定賴中納言、小式部、母あらず、嘸や困じて丹後に人やつかはしけん。歸りのほどおぼつかなく待ちもやせんなど思ひてか、內侍が局にありけ

るに、たはぶれて、丹後へつかはしける人は參りたるや。いかに心もとなく覺すらんと云ひつゝ、つぼねの前を過ぎられけるを、内侍みすより半ばかり出で、わづかに直衣の袖をひかへて、

大江山生野の道の遠ければ
　まだふみも見ず天の橋立、

とよみかけたるぞいみじき。中納言あさましく、こは如何にかゝるやうやはありとばかり云ひて、返歌にも及ばず、袖をひきはなちて逃げられけるとか。これより小式部誠の歌よみの名かくれなくなり。其の歌は百人一首の中にさへかぞへあげられけるは、皆人の知る所ならん。而して小式部そのをりやう〳〵九歳なりしとかや。

のち、大二條の關白敎通公、小式部を思ひ人にして給ひける頃、病ありて久しくこもらせ給ひしが、平癒して上東門院の御方にまゐり給ひたり。折りしも、内侍、臺盤所に居けるを、敎通公、其の前を通り退り出んとしつゝ、此のごろ死なんとせしを、何とて問はざりしとの給ひながらすぎさせ給ふを、内侍ひきとゞめて、

しぬばかりなげきにこそはなげきしか
　いきて問ふべき身にしあらねば

とよみ聞えたりしに、敎通いたく感じ、いよ〳〵めで給ひしとなり。とくまでもなく皆人のしろしめさんなれど、之は、死ぬほどに、私もなげきになげきましたわい、いきてとはれやうや、とはれない身でありますから、いよ〳〵死ぬばかりなげきましたとの意にて、いきては往きに生きをかけしにて、心なき身すら、いみじう感ぜらるゝを、ましてやさしき中をや。

のち、内侍、此の世ならずわづらひ、今は限り、人がはなども見知らぬほどになりて臥したりけれ

ば、母の式部、側らにそひて、いたくなげき、子式部が顔をおさへて泣きけるに、今はの目を僅かにひらき、母が顔をつく〴〵とうち守り、いきの下に、

いかにせんいくべき方もおもはえず
親にさきだつ道をしらねば

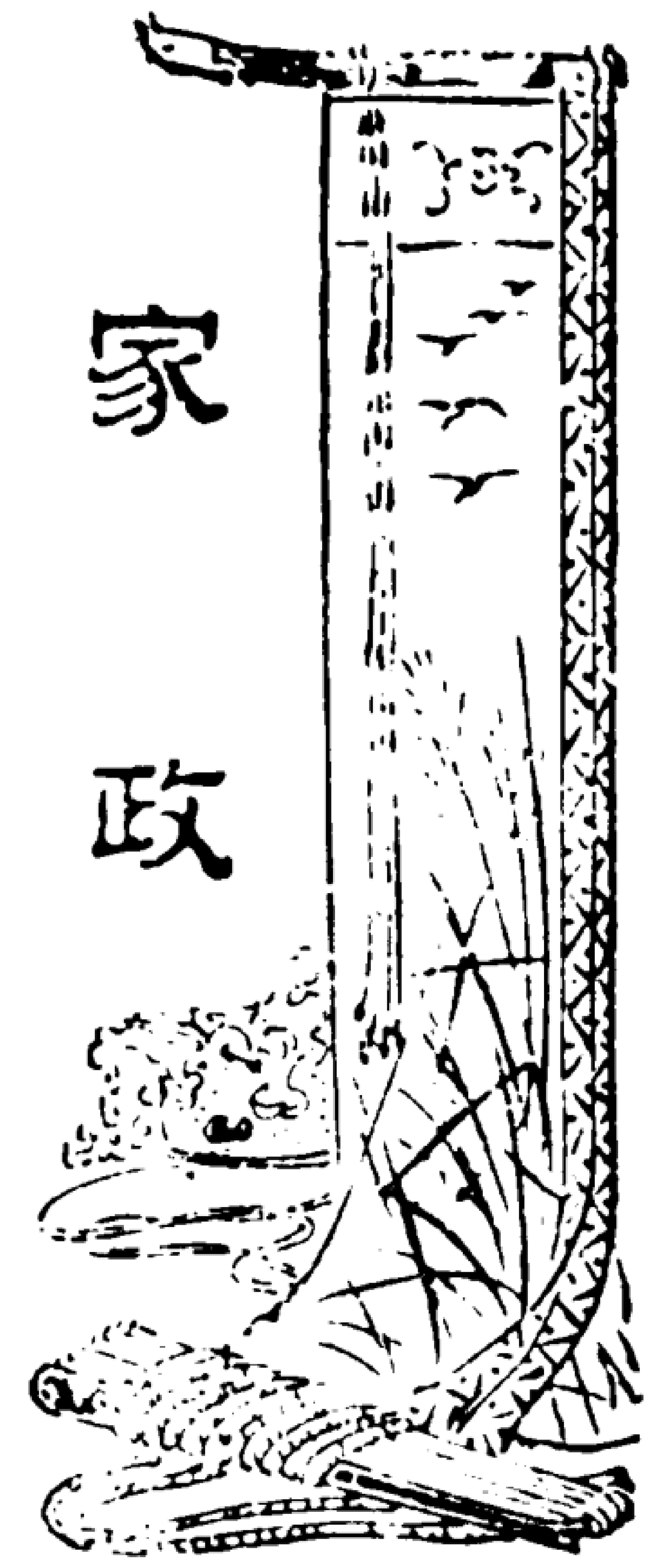
とわなゝぎたる聲にて云ひければ、天井の上にあくびさしてやあらんとおぼゆる聲ありて、あなあはれと云ひてけり。さて、少しく熱もさめてよろしくなりにたりとか。目に見えぬ鬼神をもさこそは感じにけめど、遂に親を殘してやみ路にこそは入りにけれ。如何ばかりまどひけんと思ふもいとあはれなり。

幸田彦右衛門の母、

山本正周

織田信孝の臣に、幸田彦右衛門といふ者ありき。豐臣秀吉、安土に在りける時、信孝の母、幷に彦右衛門の母を人質として、秀吉の許に遣はし置きけるが、後に信孝と、秀吉と不和を生じければ、秀吉は怒りて、人質を殺さんとしけるに、彦右衛門の母は、ひそかに、一封の手紙を彦右衛門に寄せて曰ひけるやう、大義の爲めには、親をも滅すとは、疾くに汝の知れる所なり。且つ親は子に先ちて死するは、是れ、世の常なり。われも武士の妻なれど、決して、命を惜しみて、君の大恩に背きはせじ、されば、そなたも、ゆめ母の身を案じて、君に二心をな懷きたまひそとて、遂に秀吉の爲に礫刑に逢ひけるが、彦右衛門も、之に感激して、

其の節を變ずることなく、信孝の爲めに、花々しく戰ひて、終に討死しけりとなむ。



家政

女禮

肴挾み樣稽古の仕方

有住常子

先、貴人へ、御肴上るには、挾めよとの御ことばなきうちに挾み、進らするは、無禮ゆゑ、先、臺にて、御前へ進むるものなり。挾めよとあらば、其の時すゝみ出で、臺を引出し、側によせて、兩手をふちに掛け、右へまづかに廻し、前へ向かへ、左手をつき、右手にて、箸を、下より取りて、右手をそへて持なをし、肴を挾み、左手をつき、少しすゝみ出で、右手を、手くびの下にそへ、箸先をあげて進らせ、左手をつき、からだを、少し下りながら、右手にて、手の内にて、箸を持ちなはし、兩手を重ねて、一禮なしつる樣にして、臺に向ひ、左手をそへ、箸をもちなをし、臺に置き、兩手にて、一廻り向けかへ、元の所へすゝめおくなり。又同輩に肴を挾み出す時は、箸先を横にして、左手をうでにそへて出すなり。下輩には、箸先を下になして、かた手にて出すべし。

同御肴受け樣

貴人より、御肴たまはる時は、御前ちかくすゝみ出で、右手に、左手をそへ、御肴を、手のうちに受け、大指にて押へ、あとへ下り、兩手にて戴き、少し下座へからだをひねり、左手をつき、右手に

て、懐紙の間にいれ、貴人の方へ向かへ、しづかに、御禮申し上げ、元の座へひかへ居るなり。同膳より挾む肴は、右手に左手をそへ、指中に受け、左手を、右手に重ね、むねの廻りまで上げ、一禮すべし。下膳よりうくる肴は、右のかた手にて、指先に、受け、かるく禮をすべし。

臨時の客の應接（七）

三石直子

主人輿に入り、何がな、もてなさむの心より、勝手方の都合をもわすれ、いざ、何なりと御替下されなどいひ、客人も、亦、辭退なく、然らばとて、何なり差出したる時、主人は固より客人も、亦、麁忽の罪はまぬかれざるべし。斯る際には、給仕の者、かならず不快の面色などせぬ樣こゝろがくべし。唯、然あらぬ躰にて、お平なり何なり、通盆に載せて勝手方へ行き、早速、料理する人に、主人の申されし由を言ひ聞けて、調理せしむべし。若し、扣なしとて、其の事を噂して笑ひのゝしり、又は、主人を勝手へ呼びだして相談し、或は、あわたゞしげに鍋の音などをさする等は、至つて無禮のことにて、ひとり主人を辱しむるのみならず、客人へ對しても恥辱を與ふることとなれば、心して、右樣の麁相なき樣にすべし。

若し、餘程手數のかゝる品にて、扣なき場合などには、俄にこしらへて、至極不味ものを出すも、よからぬことなり。然る場合には、强ち、元の品ならずとも、一段よき品を、たゞ元の器具に盛りて出すをよしとす。

また、急に持ち出てかね、座敷にて不快の感をお



こざるゝほどならば、先づ、何か有合の品を、丼か、皿などへいれ、八寸、盃などに載せ、菜箸を添へ持出で、ゆる／＼と小皿へ取り、客人と主人の膳の脇へ引き、直に勝手方に下るべし。其の内に、料理する人に言ひ置きたる品も出來上るべければ、主人の言付けし品ならば事もなし、別品ならば、珍しからねど勝手方にて斯樣の品をなど、さしでがましうはあらぬ樣に、いひて、主人にも同じ樣に出すべし。

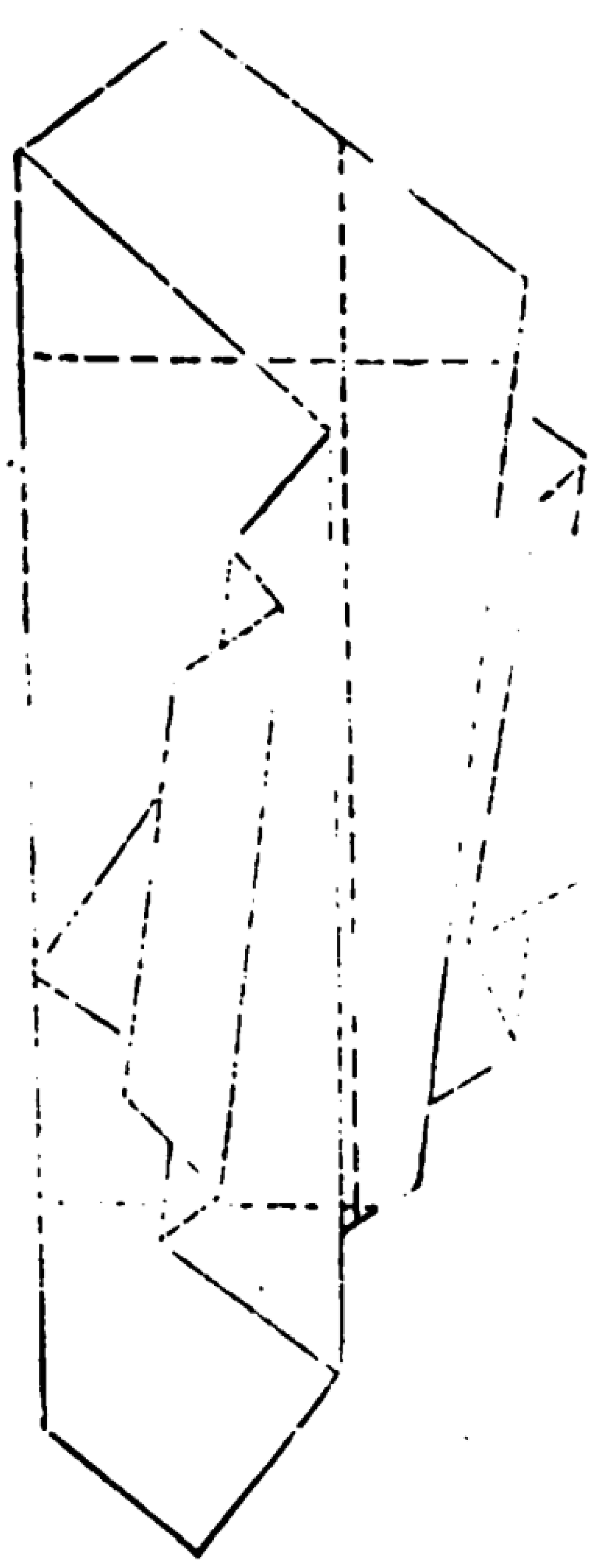
さて主人よりも、よしなに客人へ挨拶などありて、主客膳にむかはゞ、前の通飯鉢通盃を持出で、御飯など言ひて、客人の膳の右の脇へ通盃を出し、飯を替へるべし。

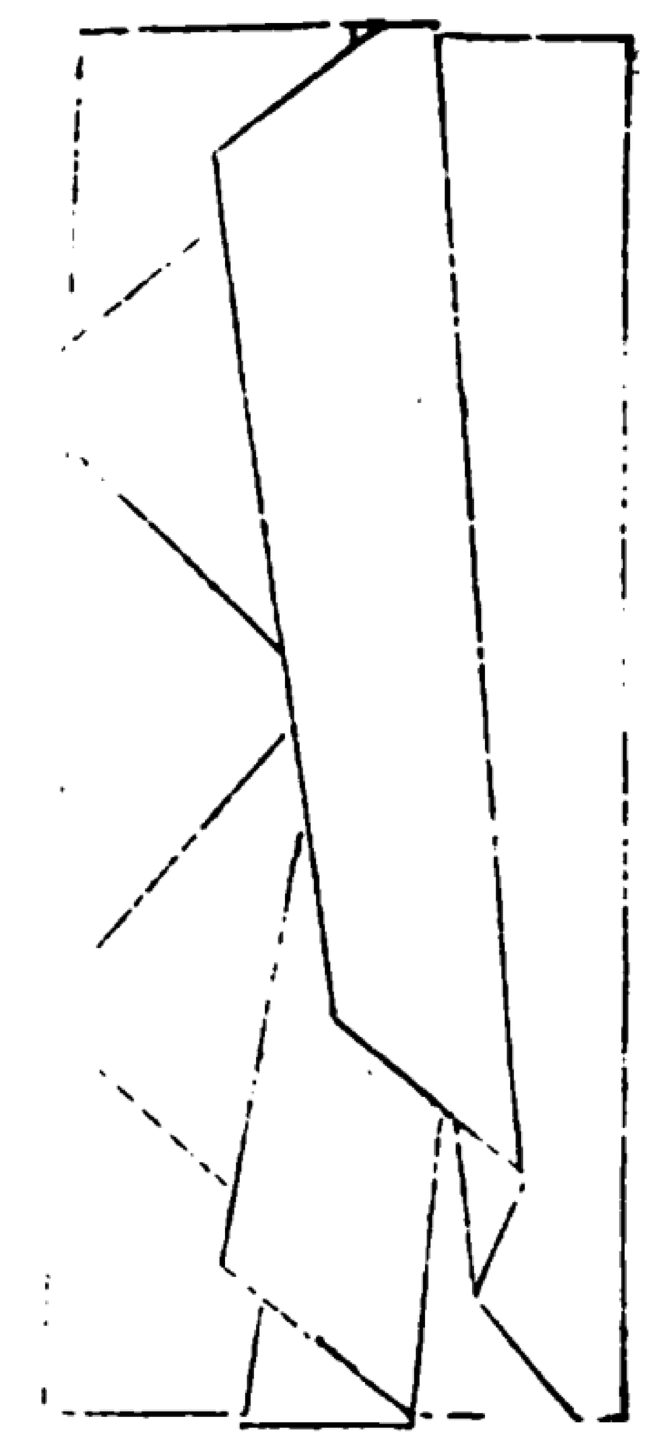
折方

有佳くわう子

眉はき包（眞）

眉はきとは、けしやう道具にて、其の包かた左の圖の如し。





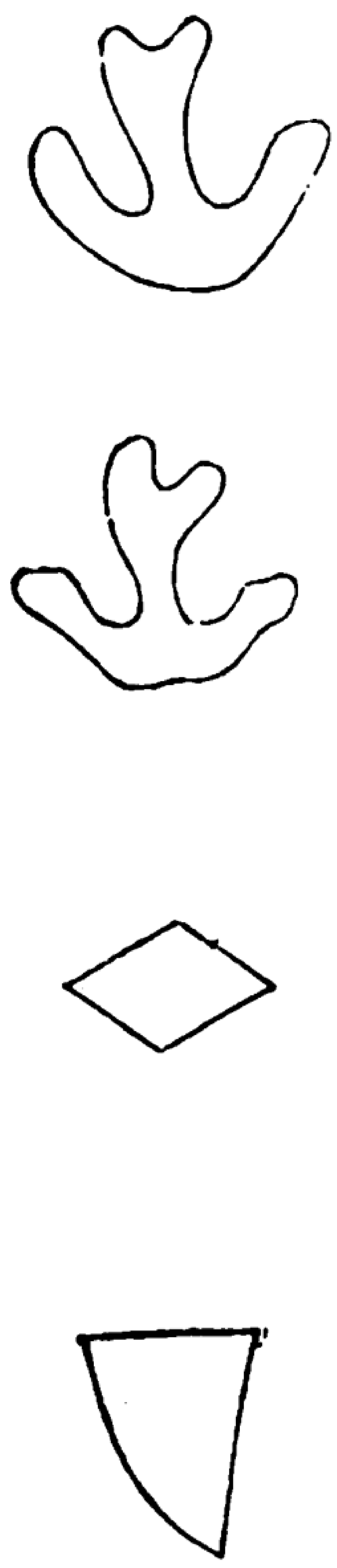
但し水引をかくるなり

たちぬひ

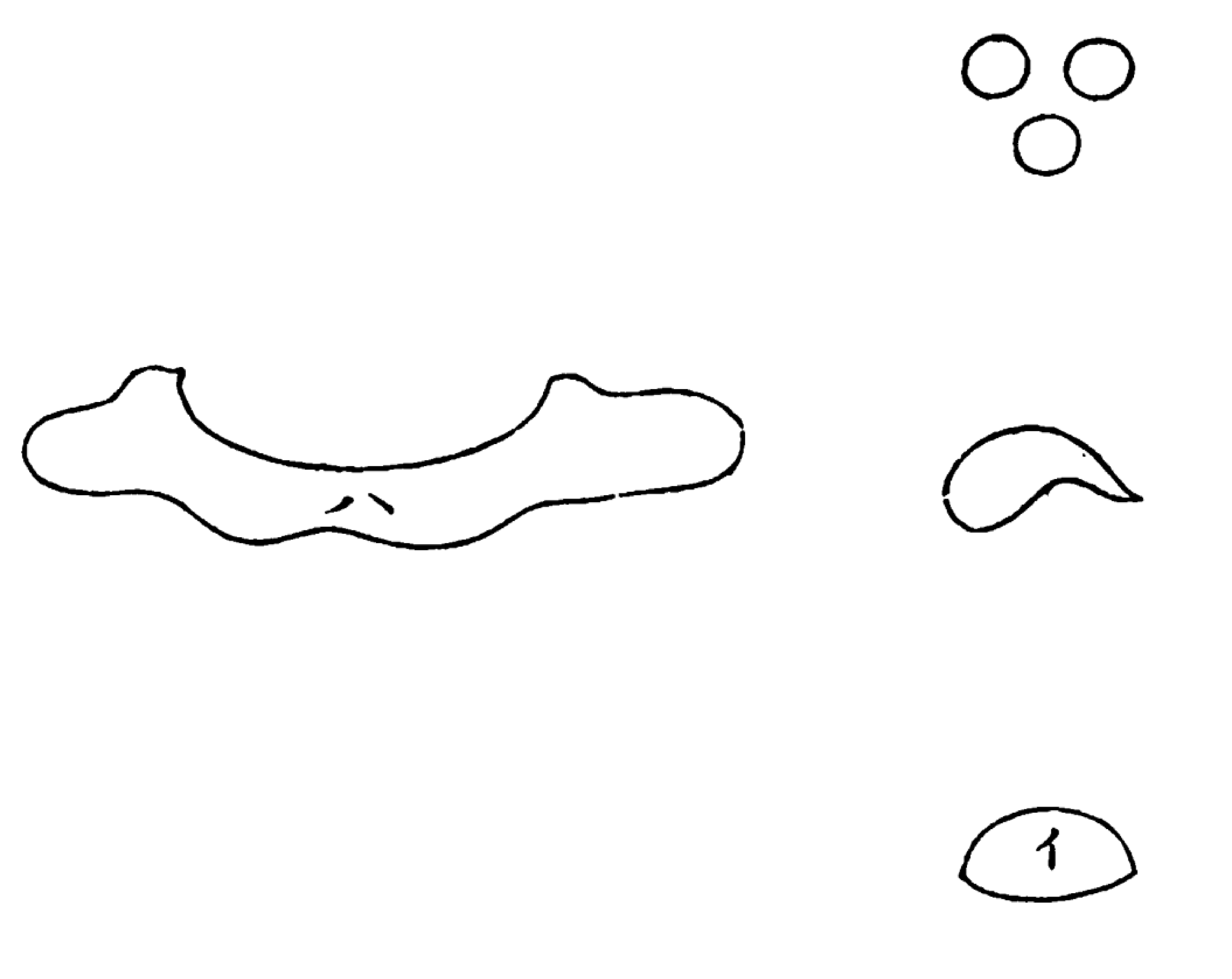
西山たい子

背負守（つゞき）

寶



家紋



右の如き形に、厚紙をきり、イロハのしるしあるものには、綿少許を入れ、又しるしなきものには、綿を入れず、各、切をはりて、左の圖の如くはりつくべし。切は、綾錦縮緬、何にてもよろし

けれど、枝珊瑚珠の形したるもの、又、寶珠の火にかたどりたるものとは、紅きがよろしく、餘は、何にても色どりよきやう見はからふべし。

(その圖)



下の、輪の如くにしたるものは、うち紐なり。裏をつくる時にはさみ入るべし。



だいどころ

鱠の製法

白髪獨活、鏡鯛、赤貝のせん、八嶋海苔、生姜の、せん、合せ酢をかくる。

右製法は、白髪獨活は、能く洗ひ、皮を去り、せんにきり、水に暫く浸し置き笊にあげ、鏡鯛は、鱗を去り、ひと節づゝに卸し、皮を剝ぎ、小口より小作りになし、皿に入れ、美濃紙をかけ、上へ、鹽を散布し、八嶋海苔は、火に炙り、酢にてもどし、能程にきり、生姜のせんは、薄くきり、又、ほそくきるなり、右の、品々盛るには、白髪獨活をしんにして、盛るなり。

同

鰤の作り身、小口切、霰慈姑、水禪寺海苔、錨防

風、御生姜、二杯酢をかくる

右製方は、鰤の鱗を去り、三枚にをろし、皮を剥き、薄く卸し、小口より切り薄鹽を散布す。霰慈姑は、黒姑慈の皮を剥き、小口より、薄くきり、又、せんにきり、それを小口より、霰の如く、細かにきり、水禪寺海苔は、水に浸し置き、ふやけたる時、小口より、能き程にきり、錨防風は、葉を能き程にきり、茎を剖き、水に浸し、暫く置きて、笊にあげ、御生姜は、生姜の皮を剥き、おろしにておろし、右の品々を、皿に盛り、二杯酢をかけ、卸し生姜は、上におくべし。

同

榮螺を、よき程にきり、さよりを、薄くきり、獨活を、短冊にきり、生姜をせんにきり、右品々を器に盛り、二杯酢をかくるなり。

納豆汁

納豆を、こまかにたゝき、擂鉢にてすり、味噌に加へ、擂のぶるなり。取合せ、豆腐、貝むき身。

菜花園

○春の艸木くさぐ

○松は長壽のためしにも、操をかへぬ鑑にもとり出だされ、いとめてたきものゝかぎりにはありけり。歌には

君が代のひさしかるべきためしには
神もうゑけむ住吉のまつ

陸奥の澤田穂國翁といへるは、和氣公をよみて

萬代にあふがさらめやたかを山
峯なるまつのたかきいさをに

など、いとさはなり。されば今年の御歌始めの御題も松上の鶴とてぞきけ。

其の種類に黒松、赤松、朝鮮松五葉の松、姫小松、鹿嶋松、唐松等あり。

○梅　も萬の花にさきだちて雪の下よりにほふものから、か花の中にてもわけて目出度ものとて、松竹とならべて、もてはやさるゝ也。抑、梅は、古くより、人のよろこふものとて、後の世こそあれ。昔は花としいへば、此の花なりとかや。されば、浪速津の歌のこの花といへるも、梅の花のことなりとぞ。たれにてもさる事ながら、とりわけて、菅公のいみじうめでたまへるは、いと〳〵ゆかしき事になむ。

種類には、紅梅、野梅、大梅、行幸梅、鑓梅、豊後梅、軒端梅、鶯宿梅、飛梅、難波梅、等あり。異名、甚だ多く、氷姿、氷肌、玉瑞、瓊枝、玉肌　士潔　逸民　雪魂　清容　木母　花魁　三凝紫　花儒者、などいふ。又、好文木　綸旨梅　香散見草　此花　春告草　匂艸などいふは、皆、故事によりていへるなり。此の花は詩歌文章、連俳等に甚だ多く、出だされたり。

哥　萬葉　坂上郎女

春さればまつさく宿の梅の花
　ひとりみつゝや春日くらさむ

同　夫木　為相卿

なりてみむ軒ばの梅のくれなゐは
　薄くふりなす雪の一はだ

同　萬葉　家持

みそのふのもゝきの梅の散花の
　あめにとひあかり雪とふりけむ

同　家集　西行

梅がかを山ふところにふきためて
　入りこむ人にしめよはる風

同　家集　山邊梅　仲正

よのつれのつま木はこらじ春山の
　梅の匂ひなたきものにせむ

同　夫木　野外梅　光俊

しきたへの手枕の野の梅の花
　れての朝けの袖にほふらし

俳　ト空

闇の夜も匂ひや梅の笠しるし

同　元政

梅ひとつ笄巾といふ字かな

同　其角

なつかしき枝のさけめや梅の花

○草には　節分草　土筆　水菜　薹　鶯菜　蕗薹
田をすく野大根など、色々生ひいで、罌粟なども、
新葉青々たり。

二月手入すべき草木

きさらきとは云ひにくけれども、はや寒明け、立春と爲り、かなたこなたに、霞たなびき、鳴く鳥の音も、ほがらかに、木の芽草葉も、目もはるなり。されば媛たちよ、一年の計は、云々、秋收をのみ欲するも、豈、其得べけんや。しか〳〵などの諺もあれど、自か面の亞紅をのみかざらで、其の暇をもて、家の老人兒を樂ましむる、花の紅顏を競はる、樣、今より心せられよ。

分栽すべきもの。

木蘭　迎春　棣棠　鐵線蓮

移植すべきもの。

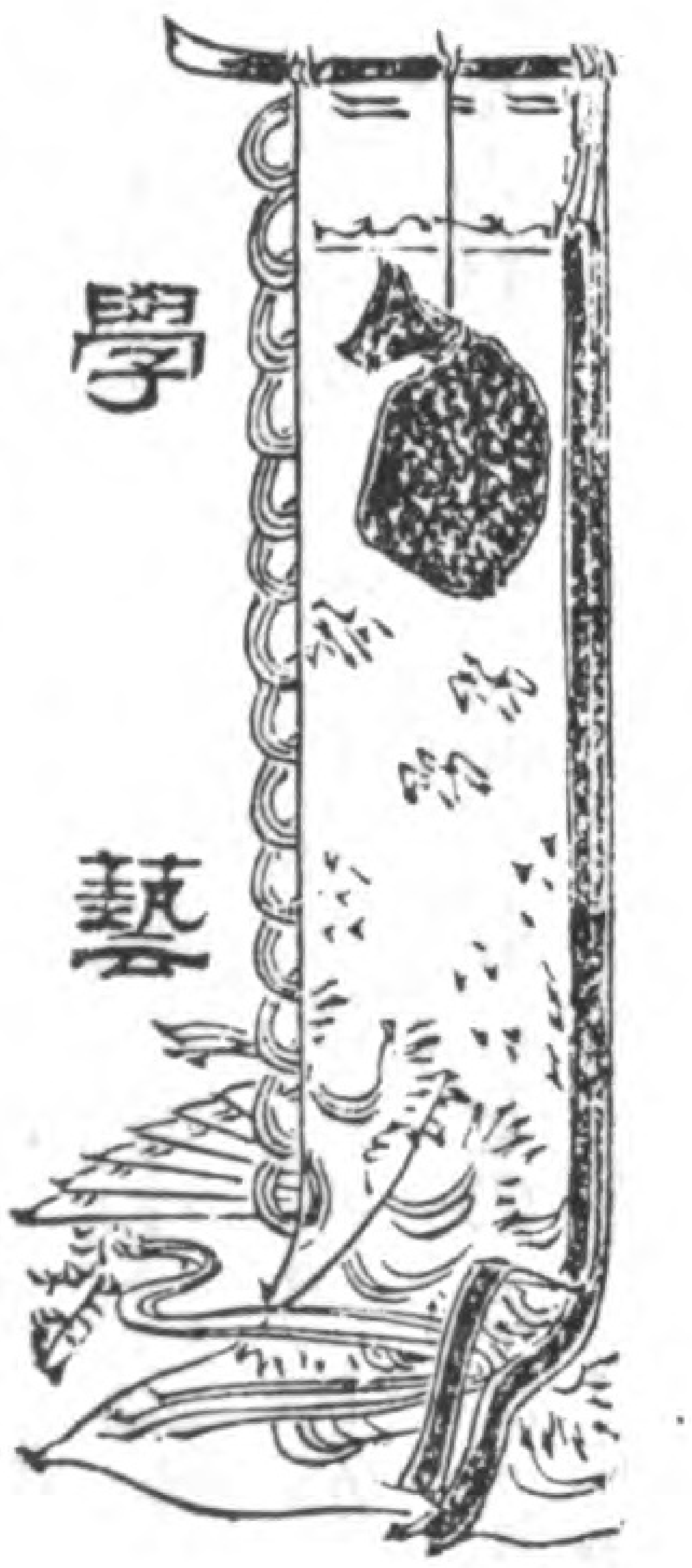
松　柳　迎春　木蘭　牡丹　蜀葵　桃、梅　季
木香、杏　紅花

扦插すべきもの。

薔薇　木爪　葡萄　桑　紫薇白　薇木香　迎春
石榴　佛見笑　梅挑　銀杏　柳　玫瑰

右の木どもは何れも、今枝を截り、半ば土中に埋めて、其の上、藁を布き、雪霜の害を防ぎ、又は、窖の中に貯へ置き、春分の頃を待て、圃に挿せど、よく生くるなり。其のさしかたは、其の時いはむ。





國文學講義

（前回の續）

磯野德文

○天皇つぎ〴〵、天位をしろしめして。テンワウつぎ〴〵、テン井をしろしめして、とよむ。天皇をば、國語にて、また、スメラミコトとよむ。この國を治め給ふ大君を申すなり。スメのこゝろは、さきにもいひしが如く、統ぶる義、ラは意義なきことばなりと、ふるくよりいへど、なほよく〳〵考ふへし。おのれ思ふに、すべらん、または、すぶるなどいへは、ラ行のうごく意義

あるにやとおぼゆれど、かりそめには、さだむべきにもあらず。ミコトは、尊み敬ひていふことばなり。直にそれを指して申[illegible]を、諱み憚りて御事とは申すなり。つぎ〴〵は、御代々、御父皇の御あとを、次第に承け繼ぎ給ふなり。繼々のこゝろなり。天位は、天皇の御位なり。國語にては、アマツヒツギノミクラ井といふ。ことばのこゝろは、天つ日の神、即、天照皇太御神より、皇孫御代々に、天地のあらん限り、永久に傳へ給へる、天業を承け繼ぎ給ふ御位と申すこゝろなり。しろしめしは、こゝにては、天位に即かせ給ふをいふ。シロシは、知ルといふことばを、ゆる〳〵延べて、敬語にいひたるにて、めしも敬語なり。御位におはしませは、萬事を統べ給ふより、何事をも知り給ふからのこゝろなるべし。

○天神をまつり、仁政をしきて。テンジンをまつり、ジンセイをしきて、とよむ。天神は、アマツカミとも申して、即、皇祖の神々なり。まつりは、齋り、心を正しくして、他心なく、神に仕へ奉りて、神慮を慰め奉るをいふ。仁政は、民をあはれみいつくしみ給ふ御おきてなりしくは、天下に、もるゝくまもなく、おし及ぼすをいふ。

○蒼生をなで給ひしかは。蒼生は、サウセイとよむ。又、國語にては、アヲヒトグサとも、タミとも訓むべし。天下に生ひ出でたる數限りもなき多くの人々をいふなり。靑人草とは、日々に、人の數そひて榮え行くを、草のしげるにたとへるなるへし。タミの語意は、說あまたありて今、定めがたし。されど、國中のあらゆる人々をいふには、靑人草と同じ。なでは撫でにて、撫でさするが如く、あはれみ、慈み給ふをいふ。おのれ思ふに、なでは、和ぎ親むこゝろあれはしかいふなるべし。

○臣民は、まごころを以て、朝廷をたふとびしに。臣民は、シンミンとよむ。臣は、ひろく、君に仕へ奉る人をいひ、民はタミなり。まごころは、僞らず、飾らず、ありのまゝにて、直く正しく、明らかなる心をいふ。眞心。誠心。こまたは、赤心とも書く。以ては、モチテとも、モッテとも、モテともよむべし、こゝろは明らかなり。朝廷は、テウテイとよむ。大君をはじめ奉りて、百官の政を行ふ所をいふなり。たふとびは、尊びなり。タは發語にて、フトは太の義なり。心に重んずるをいふ。敬ひは、ウヤマひ、とよむ。心に愼みて崇むるをいふ。ウヤは井ヤと通ひて、禮なり。敬ふは、即、禮を

行ふこゝろなり。

○天神、ます〳〵、幸福をくだして。ます〳〵は、増すといふ言を重ねていへるにて、有るが上にも、いよ〳〵増りゆくをいふ。幸福は、音にては、カウフクとよむ。訓じては、サチとも、サチハヒとも、また、サキとも、サキハヒともよみ、今、サイハヒといふは、キのイと、音便にて、なまれるなり。ヨキをヨイといひ、ハヤキをハヤイといへるか如く、かゝる類は、數多あり。サチは、サキと通ず。おのれ思ふにサキは咲きにて、サカユル(繁榮)こゝろなるべしとおぼゆれと如何にや。とにもかくにも、運命の好きをいふなり。くだしては、こゝには、賜はるこゝろなり。

○皇威、海外にかゞやき。皇威は、クワウ井とよむ。我か國のことにては、ミイツといふ。

天皇の鋭き御勢を申す。海外は、カイグワイとよむ。訓じては、ワタノトとよむべし。ワタは、渡るこゝろにて、即、海をさす。トは、外なり。我か國は、島國にて、四方に海をめぐらしたれば、其の外なる國々をさしていふなり。かゞやきは、著く明かなるこゝろにて、日の、まばゆきむかり照りわたるが如く、皇威の、外國にまで、およべるをいふなり。

○三韓したがひて、秦漢の後人まゐり。三韓は、サンカンとよむ。今の韓國(朝鮮)なり。往古は、新羅、高麗、百濟の三に分れたりしかば、三韓とはいひしなり。我か國にて、カラといひしは、この國なり。したがひは、下につくこゝろにて我が方になびくをいふ。神功皇后の、征伐し給ひしより、我が國につき從ひしなり。秦、漢は、シン、カンとよむ。二つながら、ふるき時代の、

支那の國の號なり。後人は、コウジンとよむ。後裔の人なり。まゐりは、歸化せるなり。參ゐ入りをつゞめていふなり。雄略天皇の御代に、魏の文帝の後なる安貴公といへる人、衆を率て歸化せしこと、姓氏錄といふ書に見え、又、欽明天皇の御代の元年八月といふに、歸化したる秦人漢人、七千五百戸を、諸國に配りおきたりしこと、日本書紀に見えたり。

○百姓ゆたかに、事足りとゝのひて、百姓は、音にては、ヒヤクセイとよみ、訓じては、オホミタカラとよむべし。臣民をいふなり。オホも、ミも、稱へていふことば、タカラは、寶なり。臣民は、大君の大御寶なるよりいへるなり。ゆたかは、ユルヤカなるこゝろにて、衣食住ともに、不足をおぼえぬをいふ。物に不足なければ心も身も、おのづから、裕なれぞいふなるべし。

事は、コトとよむ。萬の事、何事にかぎらず、ひろくいふなり。足りは、タリにて、欠けたる所のなきをいふ。とゝのひは、整備のこゝろにて、全く、備はりて、及ばざる所なきをいふ。

○大日本國の名、いよ／＼あらはれたりき。ダイニホンコクのナ。我が國のよき名なり。いよいよは、あるが上にも、ましてといふこゝろにて、次第々々にといふにひとし。あらはるは、かくれもなく知れわたるをいふ。きは、過去をいひあらはすてにをはなり。

○これ、我が國、上古の大體なり。これとは、以上いひしことをさしていふ。上古は、ジヤウコとよみて、むかしなり。大體は、ダイタイとよみて、アラマシのこゝろなり。大略といはんが如し。

（つゞく）

漢文學講義（廿四）

佐々木天游

書諸葛武侯出師表後　薛敬軒

嘗謂義利二者。不能並立。古之君子。能建大功。立大業。垂大名於萬世者。未嘗不重義而輕利也。「如諸葛武侯。自昭烈枉顧。即以身許馳驅。其所以勞心焦思。謨謀規圖者。曷嘗頃刻。而不以討賊興漢爲義哉。』至其爲子孫衣食之計者。不過成都之桑八百株。薄田十五頃而已。外此則別無絲毫取於人。而益其家也。』其重義輕利如此。故能噓炎光於已燼之日。續漢統於既絶之秋。雖弗克遂其攘除姦兇。興復漢室。還於舊都之志。而大義固已伸於天下。宜其偉烈洪名。垂

諸萬世而不泯也。』切怪後之君子。建功立業者。莫不慨然以古人自期。然其爲義之公。或有不勝其計利之私。故其正大光明之業。有不及古人遠矣。』愚因讀武侯出師表有感。而書此於其後云。

嘗て謂ふ。義利二の者は並び立たず。古の君子、よく大功を建て、大業を立て、大名を萬世に垂るもの、未だ嘗て義を重して、利を輕せずんばあらざるなり。諸葛武侯の如き。昭烈枉顧、即ち身を以て、馳驅を許せしより、其の心を勞し、思を焦し謨謀規圖する所以のもの。曷ぞ嘗て頃刻も、賊を討し、漢を興すを以て、義と爲さらむや。其の子孫衣食の計をなすものに至ては、成都の桑八百株、薄田十五頃に過ざるのみ。此を外にしては、即ち別に絲毫も人にとりて、其の家を益することなきなり。其の義を重じ利を

輕ずるかくのごとし。故に、よく炎光を、既に燼るの日に噓し。漢統を既に絶るの秋に續ぐ。其の姦兇を攘除し、漢室を興復して、舊都に還すの志を。遂るわたはすと雖も、大義固より、已に天下に伸ふ。うべなり、其の偉烈洪名、萬世に垂れて、泯びざること。切に怪む後の君子功を建て、業を立るもの、慨然として、古人を以て、自ら期せざるはなし。然れども、其の義をなすの公、或は、其の利を計るの私にかたざるあり。故に、其の正大光明の業、古人に及ばるざあること遠し。愚、武侯出師の表を讀て。感ずるあるに因りて、此を、其の後に書すと云ふ。

諸葛武侯は、孔明のことで、諸葛は姓、名は亮、字は孔明、忠武侯は、其の諡である。後主の建興五年に、軍を率ゐ、賊を討せむと欲し、漢中を發するに臨むて、表文を後主に上られた。此が、乃ち有名の出師の表で、昔時より出師の表を讀みて、淚を流さざるものは、忠臣義士にあらずと迄、いはれた程の義烈の文字である。其の出師の表を讀みて、感慨にたへずして、薛敬軒と云ふ人か、此の文を、其の表後に題したのである。さて、薛敬軒自分が、嘗てまへかど謂ひ考へてみるに、義(正道によるを義と云ふ。)の正義公道と云ふものと、利(私利なり。)の私慾私利と云ふものとは、二つ並び立つことの出來ぬものである。そこで、義をなさむと欲せば、利をすて、利をなさむと欲せば、義をすてねばならぬ。本が公道と私慾と、まるで反對のものであるから、どうしても兩立並行することの出來ぬものである。それだからして、往古の大人君子にして、みごとに、大なる功績を建て、大なる事業を立てなしとげて、大人君子と云ふ名

譽を、千萬世の末の代までも流し垂るゝと云ふ程の人は、一人も正義公道を重じ貴むで、私利私益を輕し去ぬものはないのである。（玆處の也は、決定の辭なり。）此迄は、文の冒頭で、以下より本題に入るのである。

彼の諸葛武侯の孔明と云ふ人の如きは、昭烈皇帝（後主の父、姓は劉、名は備、字は玄德、昭烈は、其の諡が（枉顧と云うて、三度程昭烈帝が自親に、駕を枉屈られて、諸葛孔明が草廬を顧み訪て、どうか家來になりて、使へてくれと頼まれた。そこで孔明も、其の知遇に感激して、自分の身を以て昭烈帝に使へて、奔走馳驅すると云ふことを許した。（昭烈云々の文字は、もと出師表中の語で、出師表に、先帝、臣が卑鄙なるを以てせず。猥りに、自ら枉屈して、三ひ臣を草廬之中に顧み、臣に諮ふに、當世之事を以てす。由是て感激して、

遂に先帝に許して、以て、驅馳すとあり。）それより以來と云ふものは、其の孔明が心を勞し、思を焦し、辛苦心配して、謨り圖る（謨畫規圖四字ながら、皆な謀り計ると云ふことなり。）ところのものは、何ぞ、嘗て、須臾も、（頃刻は、しばらくと云ふことなり。）曹操曹丕等の逆賊を討滅して、漢の宗室を中興さすと云ふことを以て、巳が爲し行ふべき、正當の筋道となさざらんやで。唯、此の事のみを以て、己が行ふべき、義理となしてをる。（哉は語助と云うて、助字なり。）そうして、少しも、一家の事を經營すると云ふ樣な私利私益は、すてゝ顧みぬ。其の自分の子や孫が、衣たり食たりする、くらしむきの計と慮をなすものは、本々孔明か昭烈帝に使へぬ以前より、自分の鄉里の成都に所有して居た、桑の木八百株と、ろくにものも出來ぬ、下等の薄田、十四五町（一頃は、

百畝に當る)ぞかりのみである。(而已は語終の辭、又、語決するの辭なり、)八百株の桑で、蠶を養ふて、衣、十五頃の田を耕して食ふと云ふより外は、則ち別段に少計りでも、(一蠶の吐く所を、忽と云ひ、十忽を絲と云ひ、十絲を毫と云ふ。又、長き鋭毛を毫と云ふ。そこで、絲毫の二字で、少計りと云ふ、意味なり。)他人より取り立て、さうして、自分の家を益し富して、子孫衣食の富有を計らぬのである。(成都云々の事は、孔明の傳に初亮後主に表して曰く、成都に桑八百株、薄田十五頃あり。子弟の衣食、自ら餘饒あり、臣に至ては。外任に在り。別の調度なし。身に隨ふの衣食、悉く官に仰ぐ。別に生を治めて、以て尺寸を長せず。もし臣死するの日、内に餘帛あり。外に贏財あらしめて、以て陛下に負かしめずと。卒するに及で、其の言ふ所の如しとあるに出づ。)其の孔明が、正義公道を重して、私利私益を輕すること如レ此で、忠義と云ふ精神の外には、塵葉一筋でもとり、巳を利すると云ふ考を持ぬ。さういふ樣なわけであるから、よく炎光と火の光を、巳にはや滅へ燼きたるの日に、(燼とは。火のもえつきることなり。)噓(噓は、口をすぼめてふくことなり。)起して。再びもえしめ、漢家の血統を、既にはや絶滅するの秋に續き興して存せしめたのである。(炎光云々は、譬喩にて、漢室は靈帝獻帝に至りて、絶滅して、ちやうど、火が已にもえつきて、消た樣なものである。それを孔明が、漢の宗室を助け立てたのは、消えたる火を噓き起して、再びもえ起らしめた樣なものであるから、個樣に云うたもので、續二漢統於既絶之秋一 と云ふが、主意である。)其の忠烈と云ふものは、中々一通なものでない。そこで、其の孔明が精神とする所の、姦邪兇惡の逆賊

(曹操曹丕等をさす)を、打攘ひ、打除き、討滅して、漢の宗室を中興復古せしめて、其のもと都せし所の場所に還して、悉く兇賊を平げ、再び漢日を輝さしむると云ふ。これが孔明の滿腔の精神である。しかし、孔明も、終に五丈原と申す所の陣中に死むで、其の志をなしをへることが出來なかつた。とはいふもの丶、(雖は、兩設の詞で、とはいふもの丶と云ふに同じ。)其の孔明の大なる正義と云ふものは、勿論固より、はや天下に伸びて、滿ち渡りてをる。其の忠義と云ふものは、鬼神も感ずるほどのものである。そこで、其の孔明の偉烈洪名。(偉は大なり。烈は業なり。洪は大なり。そこで、偉烈洪名は、大業大名と云ふことと同じ意味なり。)漢統を既に絕るの秋に續ぎたと云ふ大業、忠義と云ふ精神の外には、他念を持ぬと云ふ大名が、千萬世の後の代の今日迄も垂れ流れ傳りて。泯滅となくなりて、しまはぬと云ふことは、尤、至極の事である。前の冒頭に、義と利とは並び立つものでないと云うて、如二諸葛武侯一より以下は、そこで孔明は、利を去て、義を重じたから、偉烈洪名を千萬世に垂る丶ことか出來たので、もし孔明をして、少計りでも、利を重するの心あらしめば、當底業を立て、名を垂る丶ことは、出來なかつたのであると云ふ意を、文字の外に含ませて、冒頭の所に照應(是が文の照應法と云ふものである。)させて、孔明の一段を結び、切怪以下は、一頓挫して、(頓挫法)一段の波瀾をなし、古之君子と後之君子とを映射せしめ、暗に孔明を借りて、後人を警省せしむるので、作者精神の在る所は、返て後段にあるのである。(攘二除姦兇一云々の文字は、出師表中の、姦兇を攘除し、漢室を興復し、舊都に還す。此れ臣か先帝に報い、

陛下に忠なる所以の職分なりとあるにもとづく。)そこで、功業を立むと欲するものは、孔明の如く、義を重じ利を輕じて、正義と云ふ精神の外、一點私利の念慮がありては、とても義名を萬代に遺ことは出來ぬので、義と利とは到底並び行はれぬものである。然るに、どうも切に、甚だ怪み、合點のゆかぬと思ふことには、後世の君子にして、功名事業を立てるものだれでも、皆、慨然と、憤を發して、古人を以て、自ら期して、(期はあて丶するなり。)己も、古人の通りにありたいと、あて丶憤發せぬものはないのである。されば古人の如く、大功を立て、大業を建てさうなるものである。されども、其の後の君子は、正義を爲し行ふの、公道公徳と云ふものが、或は、其の一身の爲とか、一家の爲とか、子孫の爲とかの私利を計り營む所の私情私慾の心に打勝ちまさらず。公義を爲すより、私利を爲す方が多きものがある。そこで、其の正大光明と云うて、赫々の事業功名か、古の君子の人に及ばざる遠きことありで、遙に及はぬが(矣は助辭で、決語。及びぬきつと及びぬと云ふ程の意なり。)誠に合點の行ぬのである。本々義と利とは、並び行はる丶ものでないから、一旦慨然志を立て丶、古人を期したなら、悉く私利を計るの心に打勝て、六尺の肢體、何處を叩いても、正義と云ふ精神のみでなければならぬ。猶諸葛武侯の通りでなければならぬ。然るに、遂に武侯を學ふ不能して、矢張子孫衣食の計を爲して、私利を營むと云ふことは、殘念なことである。愚な拙者、敬軒子自ら謂ふ。)諸葛孔明武侯の作られた出師の表文を讀みて、彼を思ひ、此を思ひ、古の君子を思ひ、後の君子を思ひ、感慨激厲の心にたへぬものであるから、此の言辭を、其の表文のあとに書

き記したのであると云ふ。義利二字が、此の文の骨子にして、義を重じ利を輕すと云ふか、其の主眼である。さうして古の君子と、後の君子とは、其の主客なり。文章の上から云へば、古の君子は、主にして、後の君子は客なり。されど、其の精神の上から云へば、後の君子は返て主にして、古の君子は、返て客なり。面白き結搆と云ふべし。しかし普通の閑文字となさずして、能く作者の感慨のある所を玩味せば、亦以て、大に警省するところのものあらん。有益の文字と云ふべきなり。



漫録



紀元節

二月十一日は、神武天皇、即、神日本磐余彦火火出見天皇、大和國橿原宮に於て、即位の禮を行ひ、其の年を以て、元年と定めさせ給ひし月日に相當せるを以て、之を、大祝日とし、寳祚の無窮を祝はせ給ひ、陛下、皇靈殿に於て、御親祭を行はせ給ひ、神前には、御神樂を奏し、親王、及、群臣にも、祝宴を賜ひ、亦、舞樂を行はしめ給ふ。之を、紀元節と稱す。蓋、我が紀元を立てられたる日なるを以てなり。其の次第、先、當日午前八時、御殿の御裝飾仕へ奉り、御門の左右に、大眞賢

木を立てらるゝこと、常の如くせらる。次に式部職の官員、着床あり。次に、朝の御祭典を仕へ奉らる。其の御儀、元始祭に同じとぞ。午前九時に至りて、宮内省の官員、着床あり。次に、皇靈殿の開扉仕へ奉る。此の間、音樂を奏す。次に、神饌、並に、御幣物を供へ奉らる。此の間も音樂を奏す。同十一時に至りて、親王、各大臣、及、親任官、勅任官、麝香間祗候、金鷄間祗候の人く人、西の幄舎に着床するより、陛下の出御より、入御に至るまでの御次第、又、東宮殿下の御拜禮、及、親王、各大臣以下、諸官員の拜禮畢りて、御幣物、並に、神饌を撤し奉ること、又、十一時に至りて、皇后宮の御拜在らせたまふこと、および、正午十二時より、午後一時まで、有爵者以下、神佛各宗派の管長等に至るまでの參拜、午後一時より、同二時まで、奏任官以下、判任官、准判任官の人々に至るまで、參拜し奉ること等總べて、元始祭にことなること無し。斯くて、午後に至りて、御神前に於て、御神樂をれてなはる。御神樂は、翌十二日の午前一時に畢るとぞ。是より先、陛下には、御親祭を濟ませられ、午前十一時に、豐明殿に出御在らせらる。是に於いて、群臣百官に、酒饌を賜ひ、御宴中、前庭に於て、伶人をして、舞樂を奏せしめ給ひ、御宴畢りて、入御在らせらる。此の日、在京奏任官には、奉務の各廳に於いて、酒饌を賜ひ、有爵者、及、有位華族には、芝離宮に於て賜ひ、又在京の貴衆兩議院の正副議長、及、議員は、各議院に於いて、之を賜ふ。其の儀、整肅にして、上下ともに、歡樂を盡さるとぞ。まことに、國家の大佳節と云ふべし。之を、紀元節の大略とす。

主従心得草（承前）

諏訪忠元寄贈

○蜷川新右衛門尉親当の狂歌に「人の身は仲人頼みつまをよび。子にかゝるのが人の役なり」とよまれければ、一休のいわく、新右衛門そんなよみやうしては、今時の風にわらぬ。狂歌をよむなら、かやうによむべし「仲人は昔しの事よ、今の世はへつついよりもさきに女房」と是は、一休のよまれた歌に相違なし。世間皆、かくのごとし。本道をいへば、先住所を調へ、竈を調へ、飯米小遣ひあるやうにして、夫から何商賣、何役をして。是ならも女房子供あり共随分と養なはれると思ふ所で。仲人を頼み女房のせんさくする筈なるに。今時は誰でも、そんな用意する人なし。今は、誰でもやみくもに先女房を調へ引づりこんだ所が。飯米小遣ひもへつついも寐所もない、サア大こまり、後の貯へは、一ッもない、そしてくひ物がない。人氣か違つて來た。なんのかのといふて。人を恨み、世を恨むるは、大間違ひなり。元ゟ何もなし。たくはへなしじやもの。何がある物じや。元ゟ貧乏の上に、くい口がふへたから。二進も三進も雪隠へもゆけぬ。乞食するか、あみがさかむりて、殘貰ふより外に手段なし。又、金銀を遣ふ事は知て居れ共。金銀をもふける事は少共知らぬ。夫に子供が出來て、くい口はふえる。何で勘定が合ものじや。難儀するはあたりまへなり。爾るに世の中がわるいの。金もふけがないのといふは、根から葉からわたらぬ事なり。世の中はくらせぬはづなり。考へ給へ。

○是は男ばかりかやうな始末にあらず。女も、又

いくじなしばかりなり。男ばかり、女房を早くほしがるにあらず。女も、又、男を早くほしがるなり。親のゆるしもないに忍び男を拵へる。其のしやうこは歌に、

「今時は仲人なしのころび合我手におはぐろつける世の中」と此の歌より見る時は、男ばかり不埒にあらず。女も、甚だ不埒なり。是は、男よりも、大膽不屈にあたる、女は、猶更、たしなむべき事なり。又仲人なしに女房を引ずりこむ男は、元より論なし。又仲人なしにくる女も、いたづら者なり。實は兩方共いくじなし寄合なり。へつゝいよりも、先に女房といふ男と、我手におはぐろ付る女と。寄合て身緒を持たから。飯米も、小遣もない筈なり。よい相談は、出來ぬ筈なりわかい相談ばかりする故に。世の中はくらせぬとしるべし。よい事は少共知らずに、わるい事ばかり知りて居る貧乏なんぎはあたりまへなり。孟子にいわく、丈夫生れて、これが爲に室あらん事を願ふ父母の心皆是なり。然るに、父母の命媒妁の言を待ずして、穴隙を鑽て、相窺ひ牆を踰えて、相從ふ時は、父母、國人皆、これを賤しむとあり。此の心は親達は丈夫が生れると、是によい女房を持せたいと願ふなり。又女子が、生れると、これによい男が持せたいと願ふなり。是はいづれの親も。此の通りなり。誰もわるい女房を持そふ。わるい夫とを持そふと。思ふ親は、一人もない。皆よい女房を持そふ。よい夫とを持そふと思ふ親達ばかりなり。それ故に、親達は、誰がよかろふと考へ、人ゑらみをして居給ふ。是によつて、親達の思召次第にして、福徳安心の道なり。其の道によれば、父母は勿論、一家一門聞くほどな人がほめまする。然るに、父母の仰せを待ず、仲人なしに、

漫録

穴くゝり、垣をこえて、忍び女。忍び男を拵る時は父母は勿論、一家一門國中の者、町内の者迄も、笑ひいやしむといふ事なり。是によつて、親達の思召に從ひ、父母のよんで下される女房を持べし。男子も女子も、福徳安心は、父母の仰せに隨ふにありとしるべし。聖人の仰せなれば、是に少なり共間違なし。深く信じて愼み給ふべし。爾るに、今の若い者共は、父母の仰せに少なり共隨がわず。已がすきな女を引ずりこんで、女房にするから行末のよかろうはづがない。

敎梯抄（二十四回）

拾遺集賀　　源順

老ぬれどおなじことこそせられけれ

きみは千代ませ君は千代ませ

新古今集同

御覽じて

みつぎものゆるされて國とめるを

仁德天皇御歌

高き屋にのぼりて見ればけぶりたつ

民のかまどはにぎはひにけり

續古今集同

題しらず　　源家長朝臣

くりかへしきみをぞ祝ふおいぬれば

同しことのみしづのをたまき

玉葉集同

寄社祝　　前僧正公譽

頼むぞよかみもうけひけみしめなは

ながくと祈るきみが千とせを

同

同　康治元年大嘗會悠紀方御屏風歌に
青柳村柳樹花多

左京太夫　顯輔

きみが世は民のこゝろのひとかたに
なひきて見ゆる青やぎのむら

續千載集同

嘉元百首歌奉りし時祝

一條内大臣

民やすくくにゆたかなる御代なれば
きみを千とせと誰かいのらむ

風雅集同

寄日祝といふことを

大江宗秀

天のしたたれかはもれむ日のごとく

やぶしもわかぬ君がめぐみに

新千載集同

千五百番歌合に

西園寺入道前太政大臣

きみが代をとふ人あらばいづる日の
ひかりをさして空にこたへむ

新拾遺集同

左大臣の佐保の家に　御幸せさ
せたまふけるとき

元正天皇御製

はたすゝき尾花さかふきくろ木もて
つくれる宿はよろづ代までに

同

同　百首歌めされし時祝言

御製後光嚴院

世を治めたみをあはれむまことあらむ

あまつ日つぎの末もかぎらじ

權大納言　義詮

同　同

わかことは人をかゞみとみがくなり

こゝろくもらで千代も仕へむ

新續古今集同

後小松院にて人々題をさぐりて五十首歌つかうまつりけるに祝言を

前大僧正　滿濟

あひにあふ君をつき日とあふくにも

よるひるわかず世を祈るかな

新續古今集同

鹿苑院入道前太政大臣家にて三首歌よみ侍りけるに寄道祝言

四辻入道前左大臣

みな人のこゝろもみがけたまはこの

みちある時とくもりなき世を

延文百首

藤原爲信　朝臣

雨かぜもをりにわすれぬ時にあひて

たみのし業そまことあらはす

同

延文百首歌の中に祝言

釋　空(爲宜卿)

君が世はそらにつき日を見るがごと

あふげど高きかげぞくもらぬ

(完)

辨似抄(承前)

赤　松　景　福

いだす　いづ

土佐日記　あやしく歌めきてもいへる哉とてかき
いだせれば。
同　男文字に様をかきいだして。
伊勢物語　君があたり見つゝを居らむ伊駒山雲な
かくしそ雨はふるともといひて見いだすに。
同　男はたねられざりければとの方を見いだして
此のいだすは佐行四段活にて、他動詞なり。古
今集詞書に宿りはなむ有るといひいだして。源
氏物語は、取出さむ。枕草紙に譽めいひいだし。
又さるべき物の序つくり出して。又貝を俄に吹
きいだしたるこそ懼かるれ。更科日記に。歩み
いでゝ行くを見いだして等同じ。この外猶あり。
此の類は常の言様なり。
萬葉集十　思ひいづる時はすべなみ豐國の木綿山
雪のけぬべくおもほゆ
同　こいまろひ戀はしぬとも著く色にはいでじあ
さ顔の花
古今十一　思ひいづる常磐の山の岩躑躅いはねば
こそあれこひしきものを
同　十四　今こむといひしばかりに長月の有明の
月をまちいでつるかな
枕草紙　其の寺の佛[illegible]を、いと荒々しう高く打ち
いでゝ讀みたるに。
此のいづは多行下二段活にて、自動詞なり。今
日通常の方よりいはゞ。前例の如く、他動にい
ひて。思ひ出す時。色に出さじなどいふ意なれ
ど。かやうに思ひいづる時。色にはいでじとい
へるなり。萬葉に此の例多し。巻十一に。白ま
など三津のはにふの色にでゝいはざるのみぞ我
戀らくは。かやうにいでのいを略きていへるも
同じく、他動詞の意なるべし。又物語日記類に
も多し、源氏物語に懐なる笛取いでゝ、竹取物

語に折々取いでゝ。又さが尻をかきいでゝ。枕草紙に犬はかりいでゝ。又牛の限り引いでゝ。さがしいでたる。官まちいでゝ後。榮華物語に干飯などいふ物めしいでゝ。伊勢物語に女の心合せて盜みいでゝ。又見いでゝ。蜻蛉日記に餌袋なるもの取いでゝ。此の外いと多し。又、古事記傳の訓も。取いでゝ盜みいでゝなどの方多し(追いだし引いだしの方は、其の半に過ぎず)又物語などに。とうでとあるは音便語にて。意はこれに同じ。

總てかやうの所に用ゐるもの。文章には兩方ともあれど。歌には、自動詞の方多くして。自然古によれる樣なり。近き頃、懷舊等の歌に。思ひいだして。或は取いだしてなどいへるもの。間見ゆるやうなれど。猶思ひいでゝ。取いでゝの方勝りざまなり。是單に語格のみを以て論ずべからずして、自ら慣例によるをよしとすべけむ。

萬葉卷二　田子の浦ゆ打でゝ見れば云云　○ではいでの略

同　五　我中の產れいでたる白玉のわが子古日は云云

古事記中卷　こゝにすなはち浮きいでゝ云云

竹取物語　大納言起きいでゝのたまはく。

此等は自動詞にて常の如し。

れの

古今十四　今はとて返す言の葉拾ひ置てれのか物から形見とや見む。

こは自己をいふ。即ち六帖には、此の歌下句を我ものからやかたみと思はむとかけり。歌文ともに例多し。

古今十九　足引の山田のそはつれのれさへ我をはしといふうれはしきこと

神樂歌　蘆原田のいなつき蟹おのれさへ嫁を得ずとてや云云

こは、汝といふが如く、歌文、共に、此の例多し。古事記上卷に意禮爲大國主神とあるも。須佐之男命より、大穴牟遲神をさしてのたまへるにて。汝といふ義なり。宇治拾遺卷十に出納と舍人と爭論の所に。おのが主は、我口によりて、おはするは知らぬかとあるは。舍人より對手をさして云ふなり。いづれも對手をいやしめていふ代名詞なり。（未完）

よしなしごと

白魚女史

偶感

ふらんとしてはかきくもり、くもりてはふらぬが都のつねよ。一層ふりつくさば、かく寒くもあらぬに、雪げの風にや。あらしにや。腹の中までふきすさむよと思ひながら、學びの庭よりかへれど、嘸や寒かりしならん。とく火によりね。何はおき、こたつに入りぬ。火はぬるからずや。かきほりて上げよなどいたはりくる丶姉のあつき志しにも、なほしばしがほどは寒さに身ものびぬ心地、あはれ停車場に客をまつ人の寒さは如何に、衣なき人の心は如何に。はては、むかし、耳のおつるも覺えざりしと聞きぬる、うる山にての武士の艱苦や如何なりけん。馬は仆る丶、煙草は二本、氷をふみし兵士の雪のあしたは如何なりけんなど、むかし今思ひ出づれば、心もそゞろにさえ〳〵て、知らず鷄鳴に及びぬ。少しいねんとあつぶすまひきかつぎ、火をさへそふれば、誠にあた丶かく、人々の起きたるも知らで臥しぬ。小供のたはぶる丶聲におどろけば、わづかの程にあた丶かく、には

かに春になりたらん心地、ふき入る風さへ心地よく覺えぬ。かやうに暖かくては、やがて花も咲きなん。霞はた丶ずやと椽にながむれば、今朝の寒さは、よべにも増れるをとて、人のあきれたるさまなり。やがて衣かへ、顔など清むるほどに、げに寒さ、よべにもまさりたり。さては、ふすまの暖かさに、世の寒さも覺えざりしなり。さればぞ、むかしのかしこき君が、冬の夜さむに御衣ぬがせ給ひて、民の艱苦を思ひやらせ給へるよなど思ふに、はづかしさわりなし。

愚　痴

古歌にいはく、

うきことは世をふるほどのならひぞと
　おもひも知らでなになげくらむ

あならうやまし、〱。庭の村雀、友よびかはす聲の、あはれたのしげなるよ。あならうやまし、〱、親につれだつうぐひすよ。さなうたひそ。此處には涙のつら丶まだとけぬを。あならうやまし、〱、故郷人よ。如何に聞くらん歸雁の聲、思へば戀し、〱、父母よ。なづかし、はらからよ。杉田の梅もよしと云ふ。誰に伴れ立たれん。野邊のすみれ、つばなに誰をか引き行かん。戀しさや父母、共に居ます折りは、はづかしかりし事も、口惜しかりし事も、母に聞えて泣けば、涙も洗ひつくされ、うき雲も去りにしを。はりばかりのうれしき事も語れば無量に覺えしを。只今はうきを散ずる事も遠く、うれしさも消えて、たゞかなしうのみなりまさりぬ。思ふも甲斐なし。思ひ散せんと軒に歌へば、狂へるかと人に笑はる。げに狂ひたりや、〱、狂ひたりとて父母を呼びもどさんか、そもあさまし。とても、かくても家には思ひもはれじ、人がり行きてと立ち出でつ丶も、父母共に

ゐまさば、我もしあやまちあるも辨じもなし給はり、もてなさるれば、禮も聞え給へど、など思へば、いよ／＼忍ばれて、足もとも重くなりてすゝまず、そのまゝ家にとかへしぬ。げに師の許の通路、ふゞきはげしき時も、いみじかりけんと、母になぐさめらるれば、中／＼に春おもしろき心地しけり。小夜深くつとめても、未だいねでかと聲かけらるれば、またあらたなる心地せられしをなど、物つとめながらも思ひつゞくれば、もしやたよりはと、昨日も今日も、おとゝひも、大方は師の許よりもとくもどりぬ。はては休む事もあまた。うれしや雁のこゑ。待つ人よりなり。とる手おそしと開らき見れば、

いざ如何にかへりもすやと若水に
　　うつしておどろく我がかしらかな

あまりに白うなりたるよと父のふみ

出雲には八雲たちたつたえまなく
　　殘せし子らを思ひつゞけて

げにうしろめたさよ。來まさずやと母なる人がながめらるゝかげさへうつりぬ。ものも覺えず、まどひ行かまほしうすれば、汝行かば、此の姉は如何にする。隔てなき人もなくなり、あまつさへ、父母も、はらからも、おのづから歸りのおそうなるはとゑんずるもげにと思へど、なほ心まどひつつ、いつもやみねとの給ふ師の君の許へ行きて、また問ふも愚痴なりや。

大和めぐり

井上賴文

こは、神宮皇學館生徒の、修學旅行の日記なり。歷史に、地理に、文學に、各、好める方につきて、

研究せんとくはだてたる紀行なり。

諺にいはく。百たび聞くも、一たび見るにしかずと。まして、年ごろ、學び得たる力のほどを、實地にのぞみて、試みんとくはだてたれど、其の益する所、大なりといふべし。うべなるかな。鹿島館長、岡部副館長の、此の擧を賛成せられしこと。

今、足引の大和路、ふみわけたまはぬ、姫たちのためにとて、年月のへだゝりしことにはあれど、かくは、とりいでつるなり。

たゞ、うらむらくは、この旅行にさきだちて、あまたの書ども參考する暇なく、飛鳥の、たちのいそぎに、たちいでたれど、心ゆかぬふしの多かることぞ。

はた、短き日數に、長き長路の名所ども、あまねく、行きめぐることにしあれば、神のみやゐのうつろひかはり、ふりし都のあとゝころなど、つばらかに、たづね考ふることあたはず、

かねては、朝目よく見んと思ひし、山川のきよきあたりも、ぬど玉の、やみにさまよひて、よるの錦の、うらみをかさねたる折もありき。

まして、紅葉の匂へる見ても、瀧つせのさやけさ見ても、靜に詩思をねらんいとまではあらざりき。

況や、一行におくれじ、見うしなはじと、足もとに走る時のみ多くて、筆はとりながらも、一字だにしるすことあたはざりしに於いてをや。

いはんや、諸子が、日々をさむべき、科業課目空しげゝれど、學館にかへりての後も、心をひそめて、全力を、この日記にのみそゝぐことあたはざりしに於いてをや。

されど、つねに、下田ぬし、三橋ぬしたちのあつ

きをしへに依りて、筆は、いづれも、たくみに、すこやかなれば、言の葉の句、おのづからふかく、立田の紅葉、みよし野の花にもたぐへつべきふしぶし、はた、すくなからず。見んひめたち、その心してよかし。

さて、この日記のしるしかたは、かねて、抽籤もて、甲乙一組を定め、その甲乙の兩人を、午前と午後とに分ちて、筆とらしめたり。生徒は、すべて、五十人、見めぐりし行程、凡、八十餘里、日數、僅に、五日間。

此の一行の、監督教師は、三橋要也ぬし、宮島茂次郎ぬし、山本家理ぬしと、おのれとなりき。

(神宮皇學館生徒第一回修學旅行日記の序)

國學を修むるは、何の爲ぞ。よくわが國體を知り、國情をあきらめ、以て、大に、君國に報いむとするにあり。その任重し。斯の學を修むるもの、よろしく強健ならざるべからず。強健ならざらむには、いかでか、その重任を全くし得べき。我が皇學館生徒の、體育に重きをおくは、蓋これが爲のみ。今年、十一月、修學旅行の擧あり。靑垣山めぐれる、大和の、山河を跋渉し、以ちて、日頃鍛錬せる身體を、長途に試み、併せて、年來研究せる學術を、實地に質さむとす。行程、八十餘里、よく、その目的を達せり。こは、そのをり、互に記しつけたる、日記なりとぞ。讀みもて行くに、その猛く雄々しきさま、目の前に躍れり。又かりそめなる戯言のはしにも、大和魂の光、ほのめきたるを見る。嗚呼、諸子よ。諸子が、一旦卒業して、社會といへる旅路に出で立たむには、この旅行に勝れる艱難辛苦も、いと〳〵多かるべし。その艱難に處し、辛苦に堪へて、益活潑なること、この旅行の如く、養成せる大和魂を、事業に顯して、

以ちて、大に君國に報いざるべからず。諸子、果して、よく、この任務を全くし得べきか。余は、この紀行を以て、そが左劵となさむとす。

皐學館副館長　岡部　讓　志るす

爐邊獨語

白松園主人

○新聞記事

さて、年も改まりぬれば、市井間の新事實も、續續現はるゝにつけて、新聞雜報記者殿の、喜悅の眉の開かるゝはさる事ながら、甚だ忌むべく嫌ふべきことの相變らず、殆んど全紙を壓するぞかり豐富なるは、少男少女への敎育上有害なるは勿論、中年以上たりとも、無敎育無分別の人をして、極道に密接ならしむる患あり。之止むを得ざる事ならんには、兎に角なれど、記者殿の誠意と熱心との度合ひとつにて、大に之を救濟する事を得るわるに於ては、記者殿責任なしといふべからず。新聞記者としいへば、不品行にても、無節操にても、搆はず、世上之ほど無責任なる者はあらじと、自ら信じ、自ら甘んぜるは、之、我國の新聞記者が自ら品位を失墜せる者にて、此の頃井上哲次郎氏が、新聞の文字を改善し、大に社會敎育を裨補せよと注文せられしも故なきに非ずかし。余此頃轉宿せんとして、ある故舊に語りしに、其の人曰く、方角を見しか、日柄を見しかと例の中古時代に行はれし、方違への寸法をもて、激しく、余に忠告せしかば、余は呆然として大に、之を笑ひしに、其の人怒りて怒りをなし、汝、そを舊夢として嘲けるとも、新知識の木鐸たる、彼の新聞紙を見よ明に方角の吉凶を示せるに非ずやと、即ち中央新

聞を取り出して、余に示しぬ。嗚呼之社會教育に弊害ある一例にして、一方の論説には舊思想を打破せんとして、一方は却りて、之を勸むるに非ずや、商賈主義の者なりとは云へ、撞着も、亦甚しといふべし。

○讀ましむべき小説

人の耳目は掩ふべからず、學校に家庭に小説を禁じぬとも、到底行はれ得べきに非ず。されば小説家を撲滅するか、讀者の志操を改善するかの、二方策に出でざるべからず。撲滅もとより行ふべからず。さてこそ志操改善の必要は出で來にけれ。志操苟しくも高尚なれば、淫猥汚穢の文字は、見るだに厭氣を生ずる事、必然の勢なり。曲亭馬琴の小説は、勸善懲惡を主眼とし、儒者流義の倫理道徳を基礎としたれば、寧ろ小説として見んよりは、修身書とも見るべき趣きあり。故に歴史的小説多くして、必ず寓するに因果應報の意をもてしたれば、市井人情の所謂寫實的に渡らず。編中の人物、常に高尚なれば、例ひ男女の關係をものしたるも、決して卑猥の念を起さしめず、讀者をして、そゞろに英雄崇拜の心を發せしむ。之れ馬琴の馬琴たる所以にして、文章、はた優麗壯大、彼の椿説弓張月、里見八犬傳、俊寛僧都島物語の如き者は、少年子弟をして、讀ましむるとも毫も害なきのみならず、却りて學問の稗補、文章の助けとなる事顯著にして、彼の淫筆小説に親しましめざる、根本的禁令ともなるべからんか。

鴻の嶺の城跡

山口縣廳の右肩に高く聳ゆる山を、鴻の嶺となす。東、姫山と相對せり。四百餘年前永正の昔、大内氏、此の處に城壁を搆へたりしが、陶晴賢叛するに及び、義隆、此の城をすて丶走れり。されば、

今は樹木欝蒼して、嶮路峻阪小暗きまでに、青雲のたなびく日すら、小雨そぼふるが如し。頂には石疊など散亂せれども、今は荊に杜されて、よく見わき難し。古井あり。埋れて深からねど、中に入りて探せるときには、古瓦を得るなり。若し老松の下睟を放つときは、山口市街眼下に見えて、白水帶の如くめぐり、遠く小郡灣を望むべし。後には方便山、雲にそばだち、麓には龜山俯伏して、毛利忠正公以下五個の銅像を背負ひ、仰ぎで笑ふ者の如し。余、今年鴻城に在りて年を迎ふ。即ち、鴻城吟を作る。（鴻城は山口の別名なり）

方便山の雪白く　氷りの明くる年の朝
鴻嶺おろし身にしみて　鴻城街に霜は滿つ
花に戯る春の蝶　露にすがれる夏の虫
我春眠を貪りて　未だ廬生が夢を見ず
邯鄲の歩に習はねど　年ふるさとの活歴史

見よ依然たり舊山河
風飄飜とひるがへす　旗數流は鴻嶺の
櫓の上にうちなびき　城兵千騎儼として
鴻城街の鎭護たり
彈琴吹笛姫山の　月に澄み行く秋の頃
詠歌蹴鞠春の日の　暮るゝを惜む花の影
世はいつまでも長閑しや
嘯風弄月汝を措きて　我芳契の友はあらじ
尊きこと三位たり　我今更に太刀取りて
夷のむれに入らるべき
敵は尼子か大友か　大友尼子はた小貳
遙は足じと思ひしに　禍蕭牆の元に起り

遙に見ゆる陶が嶽　炬火累々絶えざるは
敵軍數萬又數萬　鴻嶺城上旗仆れ
千騎の守兵影消えて　築山の舘皆火なり
愚將一敗流れ行く　末さへ今は絶はてし
永正の昔跡とへば　松柏風に吟じつゝ
荆蕀獨り涙あり

○教室に傍聽席を設けよ

國家の盛衰は、教育の普及にあり。倩々我國現今の狀を見るに、不就學者非常に多く、又好學の士にて、進んで智識を開拓せんとするも、金なきがために、教を聞き書を見る能はず、恨を呑んで止むを得ず朽敗する者、尤も多し。是國家のために慨歎の極にて、學校の圖書室の如き者も、宜しく開きて、一般讀者の繙閲に供すべきなり。しかのみならず、宜しく中學校師範學校女學校より、以上の學校には、各教室に傍聽席を設け、規則を嚴にして、好學者は男女を問はず、其の便益に資せしむべし。若し然らざれば、貧者はいつまでも無學にして、富者のみは學者となりて、國家に大なる偏長不具者を生ずるは、勢の免れざる所なり。さてはいづれの時にか、人文の發達を望むを得んや。

○儒者捨塲

其の名を聞くこと久し。在京の日、一日、之を探りて漸く得たり。處は小石川大塚にて、護國寺のうしろ、豐島が岡の側にあり。頃は秋の最中なりしかも、長けなる薄は處せく茂りあひて、大なる萩の花咲きこぼれたり。漸くひとつの墓を見出でゝ、先づ、その面を見るに、鳩巢室先生之墓と記せり。長け僅に二尺ばかり、回り一尺に足らず、

極めて小さき墓なるに驚かれぬ。薄おし分けつゝ尋ぬるに、處々にいくつも現はれぬ。寛政の三博士たりし、古賀、柴野、尾藤を始め岡田寒泉の墓も、只一基、寒げに。草むらの露の中に立ちぬ。いづれも墓いと小く、古人が質素節儉なりし狀、思ひやられていと床し。儒者捨場の名のおこりしもをかしからずや。野の花うるはしからん頃、折々先輩の墓を弔はんも、今の學生には益なしとはいふべからず。

（以下次號）

亡き友につきて（つゞき）

葛の屋主人

君は、軀幹偉大に、眉目秀で、鼻高く、色白き、一個の丈夫にして、其の心も、また雄々しく、狷介にして小節に拘はらず、一種の氣慨ありて、衆に異なりき。かれ、常に閭里の少年を嘲りて、優柔、共に語るに足らずといへり。いたく、富貴の人を惡み、その子弟と並ぶことを嫌へり。また、諂諛の人を賤しみ、時としては、目のあたり、これを折くことありき。始めて語らふ人の心ばえ、はた、その持てる意見などの、おのが心に染まぬときは、再びとだに、打解けて、語ることなかりき。されば、その友とせし人も、極めて少なかりき。また、器用なるが上にいそしみの心まことに厚く、一たび志せし事は、寢食をも忘れて、これを學びたりしかば、やがて、上達して、その業は習ひし人よりもまさりて見えぬ。今條を分ちて、之を述べん。

○○○○繪畫につきて　こは、君がくさ〲の繪本を見て學びしものなれど、多くは密畫なりしが、纖細なる筆の先きに綿密なる心をこめて書き出したる

は、をさ〳〵、版本にも劣らざりき。嘗て、薩摩守平忠度卿が、藤原俊成卿を訪ひ、おのが歌を撰集に入れんことを願はんとて、數人の郎黨と共に、その門に佇める處を描きて、おのれに與へしが、その繪のあまり妙なりしかば、たゞにも置き得やらで、中の間の障子に貼り付け置きしもの丶長くまで殘りつるが、今は破れ果て丶、影だに失せぬるこそ本意なけれ。されど、この道は、深く究めずて止みにしかば、上達の域には至らざりき。

音樂につきて　君はまたいたく音樂を好めり。一とせの夏、二人相伴ひて、椹野川の橋に納涼に行きて、小郡の町を傳ひて、田町といふへ歸り來けるに、とあるいぶせき家に、大きなる男子の、のけざまになりて、横笛をいみじくふきつるがありけり。君しばしとわれを止めつ丶、さて、そこなる、小さき椽に腰打ちかけて、諸共に聞くに、其の聲喜ぶが如く、憂ふるが如く、或は笑ふが如く、或は怒るが如く、時としては高く、時としては低く、梁上の塵も動きなんばかりなりけり。君え堪えずやありけむ。そゞろ椽よりすべり入りけるに、かの男驚きつ丶起き直りて、いぶかしげなる面もちにて、居たり。君やをら言ひ出でけるは、われの、いま、此處を通りけるに、いましがすさむ笛の音の、いかにもをかしければ、立寄りて聞くに、感に入りて堪へがたくなむ。願はくば、われに、その曲敎へてんや。といふに、かの男、いとも耻らひたるけしきにて、手もて頭なでおろしつ丶、こは畏まりたる御詞かな。おのれたゞ、少き時よりこの業を好みけるま丶に、他人のを聞き覺えて、折々の心やりに物するばかりなれば、人に敎へむなど及びもつかぬ事なり。といへば、わ

はれ、卑下してもいふものかな。よし、さもあらばあれ、いましの知れるのみにて足りなむを。兎も角も授けてよかしと、いなむをせちに乞ひてかへりけるが、夫れよりみづから巧に笛を彫りて、夜な〳〵かの男のせどに通ひて學びつるほどに、やがて、かれの知れるかぎり覺えつくして、いみじくをかしくものするやうになれり。

また、おのが山口のまなびやにて、習ひし唱歌を教へよといひて、夏冬の定りの休業には、必ず、任地より歸り來り、明け暮れ、我が宿を訪ひて、少しも倦むことなく、一曲を覺ゆる毎に、いざ本調子にて、今一度謠はんなど、ざれ言いひて謠ふに、もとより音聲いみじく美しかりしかど、おのれはいつも後に瞠若たりき。

かくて、詩吟は君が、尤も得意とする處にして、これを聞けば感あまりて、覺えず滿身に粟を生ずる程なりき。おのれも、親しく、君につきて學びしが、山口にても、新井節とて、一時書生の間に行はれきとなむ。

我が鄕に三原某といへるがあり。君とわれと共に、あるが中にわけて親しき友として、鼎の足の如く、いとも睦じく交らひけるが、三原といへるは、公の勤する家なれば、一月五日の休日に來れ、餅ふるまはむといふがまゝに、君と共に、その日の午後二時ばかりに行きけるに、さま〴〵のあるじして待ち受けたり。かくて、やう〳〵ゑひ行くまゝに、君、いざ日頃のいそしみの試あらはさんといひつゝ、この家の町並なるをも憚からず、聲高らかに詩を吟じ、唱歌など謠ふに、家の人なども興に入りて、おのも〳〵謠ひのゝしりけり。

かくて、ふけ行くまゝに、家の人も、皆打ーづまり、夜半の月影、窓てらす頃、三人共書齋に入り

て、茶を喫し、菓子など食ひて、くさ〴〵の物語して午前二時ばかりに歸りたりき。

又、一とせの冬季休業に、君より文もて、こたびは、さはるとありて、郷里には之歸りがたければ、我が方に來らずやさま〴〵のつもる話せむなど言ひ起せけれど、かた〴〵赤間關のしるべにもと思ひ立ちて、下りがけ君の任地に立寄りたり。折ふし君は、一の宮のほとりなる、賤が家の奥の間を借りて住ひけるが、おのれの至れるを見て、いたくよろこび、自から肴を調じてわれをもてなしけり。さてのち、あまりうれしくて、心も空になりぬ。何よりか語りいでむなどいひつゝ、ついでなくおもふまに〴〵語らひけるほどに、いとふけて、午前二時にもなりぬ。君、久々に遇ひし事なれば、今宵は語り明さんとおもふ。かれ、今しばし唱歌を謡ひて、心を引立てむやといふ。おのれ、そはよかれど、夜ふけて人しづまりぬ。わけて宿のものにも心置かるゝをといへば、君、いなとよ。さやうの事など露ほども思ひなかけそ。といひつゝはや高らかに謡へり。さらばとおもひて、共に謡ふに、あたり靜かなる上に、程近き向ひの山に響きて、其の聲いと高くなりき。かくて、一時半ばかり謡ひて、またすゞろ語りかはすほどに、やがて窓白くなりもて行きければ、いざといひつゝ、火かきおこして茶を烹、あさげをへて、打連れて、砂子小學校に至り、業終るまで參觀して、又、宿に伴うて歸り、其の夜は君の例の笛の音を聞きて、一泊してのち暇を告げて赤間關に至りしが、そのまたの日、君しるべの家に例の笛を携へてたづね來り、一夜をへてさま〴〵打語らひて歸りけり。

禽獸の言行

大隠

ともすれば人の手足、身体にまといて、よきしるをすはんとする蛭の如き人あり。さやうのものには、腫物の濃血など思ふさま吸はせやるかよし。泥中ならでは住まれざる鰻、鰌の如き人あり。鰾は、性好んで睡る。睡るもの必ず鰌を、其の中に入れて、之を動揺せしむ。しからざれば、往々睡り死すとなり。一生なす事もなくねぶれる如き人は、又此のあぶらこの如きのみ。さやうのものいかにゆすり起するも、何の益かあらん。とく田畠の肥しにだもたゝき入れたる方まさるへし。江豚と云は。海豚の如くにて、少しく小にして、江中に生ずるものなるが、其の中に肉脂あり。人、その脂を燈に點じて樗蒲を照らすにいと明らかなり。これは博奕の賽なり、讀書工作等を照せむ甚だ暗くして、字章もわからずとなり。俗に云ふ懶婦の化する所なりと。懶婦は、また江豚の化したるにや。章魚は芋を好みて、田畑に入り、芋を掘つて食ふ。それは未だ己れあり行き、己れ掘りて盗むなれど、座していたづらに田のものを食ひ、いねていたづらに畠のものを損する章魚坊主にもまさりたる人あり。あな、あはれなるかなや。





はゝその露

はゝそ

明智光秀と云へば、悪むべき不忠の兇漢なれど、妻女はまた捨てがたき人なりき。光秀若くして客を好みけるが、家いと貧しく、朝夕のけぶりさへ、太くはたゝざりしを、一日遠方より客來りたり。はじめての客ながら二つなき思ひに語りわふを、すゝむ茶菓もなし。折角に遠方より來れるをたゞにかへさんずる我が夫の如何ばかりくるしく甲斐なき事にればすらんなど、とつおいつ思ひめぐらせど、たくわんのしつぽだもなきむかりなし。かやうの時我が黒髪そぐも、夫への志と思ひ、臺所に至り、なを切る刀もて、我か黒髪を根



よりふつと切り、かつらにかしらをかくして、そをかもじやに賣り、さて酒肴をとゝのへてあつく

まれ人をもてなしけり。夫は、如何にして酒肴をとゝのへけんと思ふも不思議にうれし。立ちはたらくさま見れど、かつらの下より、髪のみじかくこぼれ出でたるもあやしと思へど、さりとも心づかでありしを、客かへりて、之をたゞし、その志をおどろきよろこべりとなり。かやうの妻女なれど、夫が叛逆、返す〴〵いさめけるを。夫は主を害するほどの人非人なれど、妻女はかばかりやさしかりものゝ、其の女、細川忠興の夫人、よく貞と耻とを知り、節に死したる、此の母の敎へによりしならむ。子は多くは、父よりも母の心に似るものぞといふ。世の母たるもののつゝしまでやは。

ねむけざまし

二世後咲

イヤハヤ飛んでもないツマラヌ者は、

わが祝の宴席へ、是非とおもひし上賓の、遂に來なかつた時と、親しき人々と集りて、今や御馳走を食べむとする時に、毛虫のごとく嫌はるゝ者の、突然入り來れる時。

酒に醉ふたる人にとらへられて、ツマラヌことを言ひかけられる、背なかをたゝかれる、衣服を引ッぱられる、轉かされやうとする、堪へかねて、避けむとさかくすれど、つきまとひて離れぬ時、知らぬ他人の往來ありくにさへ氣兼せらるゝよ。

廉價で便利なものを見つけても、金錢のもちあはせなき時、家を出るとき借金とりにであひたる、讀者には、おぼえもなからむが、イヤハヤ途方もなく、つまらぬものなり。

可笑しげなものは

泣きわめく孫をヨソにして、おちつきはらッて、往來で立ちばなしする老婆サン、時ならぬ麻上下、盲者のつかみあひの喧嘩、イヤ其よりも可笑しげな者は、井戸端で、婦人と婦人

とのけんくわ、どもりの怒る時もだが、人三化七の炊女どんが、奥さまから借着して、風通の三枚がされに、繻珍の帯をむなたかにしめ、黒ちりめんの御紋つきな羽織ッたところは、フメと拝まれたものにはこれなくさふらふ。

たまらぬものは

待ッて居る人の來ぬ間、肴は來たが、酒屋のツカヒのまだ歸らぬ間、噴嚏の出かがッた時、束髮のデコデコまげに結ひたるが眼鏡かけて、遠慮もなくシヤベリちらしありく、ハツクシヨイ（コレハ出かゝッて居たクサメの今やう〳〵出たるなり）

草むら（秋）

白魚女史

病故とは云へ、良雄、他にも世を思ひたつ事あり。また思ひたゝれぬ事あり。そゞろ春の日のかげろふと、もえつ、消えつする後は、いつも覺ゆる腦の煩悶、自からこすり散して、よきや、のう清子、世は如何にもなれ、たゞ己さへ、すゞしきを尋ねて移れど、ひぐらしの如くに、のうとて、清子の肩を叩きて、男子ならば、幼くとも語らんふしも多かるをとて、いつも清子を直きもの、一にかぞへ、誰と爭ふも、いどむも、先生は事の起りも、善惡をもとはれず、たゞ清子を清とし、字するにも、くれ竹よ、ひぐらしよとたはぶるゝは、よくよく直きもの、すゞしきものと思ひくみたるなるべし。

何處か、とり所のあるものか、つる子、貴樣は隨分おはね、隨分おしやべり、おたばこぼん、お茶ぴい、がちや〳〵のやうに、人にいやしまるれど、母親に似て、まだあやまちのかくされぬ所が多ひな。父に似た狡滑よりは、まだおもしろい、しかし、性は性なれど、隨分身の行く末をはかるがよひよ。又母親のやうに財産はとられる、過は申し

たてらる。そして、その人自は、他の思ふ人を入れ、思ふ事をして、何くはぬ顔はさるゝやうではつまらぬぞ。よく〳〵つゝしまねば、馬鹿を見るぞ。マー、もう先生はいつはかなくなるか知れず。此の事、よく耳におさめをきて、行末をはかれよ。たゞ案じらるゝは、貴様ぞ。かくと、よき件はなきかな。清子には彼が、一番あふだらふ。長野一直が、名さへよくあふは。つる、其方は中村を知りをるかと問ふ言半ばに、つる子は答へて、はい、頓男さんですか、あの、先生がのろいからとて、お呼びになる頓男さんですかとの答へ、師はあきれもし、又はゝ笑まれもし、又、己が云ひたる事のわりなき思ひをもして、しばしは言葉もなかりしが、あれよ、あれは、少しにぶくはあれど、實直のもの、我が申す事は、如何にくるしき事とて守る男、貴様あれの妻となつては如何だ、あれならば、貴様が、少し過ちがあるも、見捨てるやうの事もあるまい、どうだ、しかし、中村は、よき迷惑ならんがと、つる子の顔を守れば、流石にしばし答へざりしが、何ば、おろかなる私とてとて、頰ふくらして、立ち去りたり。しからば、どうでもして、目の覺むる時をまつがよいと、先生、あとにひとりつぶやかれぬ。世をすてたるものに用はなしとて、とりもせざりし新聞、弟子より送れるは、何事のあるぞとて、封きりて見るより早く、ならびたるは〳〵、おたいと醫の玄伯れんと、かでもちの雲助れんが、内閣につらなるか、彼如何なるさぢ加減ばどこすや知れず、あやふひ哉〳〵、元雄、元雄、元雄と居らぬと知りつつ呼ぶは狂へるにや。みづから胸に手をあてゝ、天井を守る半時ばかり、又や脳の煩悶をおさへて、松代〳〵と呼びぬ。

呼ぶ聲の急なりしにや。松代返詞より早く、かけて來りたり。よし、松代、度に叶へるは汝ぞ、近うよれ。これは、我が子元雄に遺す言葉なるが、其方は、元雄の妻にと兼ねてゆるせば、元雄と思ひて其方に云ひおくなり。藩伐政府の能がないの、何のと云ふても、今まではとにかくに雲近くならぶものは、忠實の徒が多かつたが、權政にかはるとか、何とかにて、己の知つた狸、むじなのやうなものが多く出でおつた。あはれ、七度生れてと云ひし人に對しても、かうやうに山にすみをりては面目ない。死んだら己は、天にてはたらくつもり。何でも元雄に勉强し、智をみがき、能を發達せしめて、岩崛に入りし徒を再び出し、火に入り、水に入りて、國のため、君のため赤心をつくすやう、汝覺えて言つけよ。呼びて云はんかとも思へど、中々に死したる後に聞えたるが身にしむ物、故に云ひおく、なく〳〵、今死ぬるかのやうに聞ゆるにもあらんが、惱やみはいつ仆るゝか知らず、今一つたのみ聞えおく事あるなり。もろこしの第五倫が、兄の子の病に、夜おきて見舞ふ事一度、かへつては、安く臥しぬ。吾が子の病ありしに、一度見舞はざれど、よもすがらねられざりきと。あはれ情ばかりやる方なきものはあらじな。他の子にまさりて、其方をばあはれに思はゆるも、不思議なる情にこそ。御身の父が、我に其方を託す折り、父にも母にも云ひがたく、しかも君にも云ひがたけれど、妻よりまさりて、やさしく、いとしきものゝ娘、そのいとしきもののみまかりて、いよいよいとしけれど、人にとらするも、家にいるゝもいとしく、たゞ日來の君が心を知りてたのむなれ。何もとはで、いとしうはぐゝみてよ。播磨に田地十五町あり。それを此の子の領となすなり。そし



からずはぐくみてよと、わりなき情、あらはしてのたのみ。折りもをり、我にも同じ話の思ひ入あり。しかも御身に三つとかりまさりたる子さへあり。思へば、其のもの丶いとしさ、随分苦勞をもかけなせら、遂に迎へ入れやせぬを、恨みもせず。たゞ我などはすて丶よ。君が死ぬばかりの思ひ、我が母さへのすゝめに、從ひまゐらしたるも、なは、妾がいたづら、さきの世よりのあまちなるゑにしにこそ。百合子のむかしとも思ひ侍る。たゞ君は名をも、身をもをしみ給へとてのやさしき心ぞえ、ますら男の心にはづるはいつも、此の事のみ。汝が父の心もいたくくまれ、嘸やいとをしからん。傍らにはぐ丶む子等にもまさりて覺えんをと同情が、いつしか、我がいとしき子の如く覺えてなり。我が、そのいとしきものも、今は臺所に、あしあはれやとて涙しど丶、しばしは二人ともすすりなきの聲高かりしが、他に托するものはなきにもあらねど、たゞ汝に托す。同じゆかりのはらからと思ひて、我がなきあともかばひて給はれ。人をも撰びて、出世をもさせて給はれ。他のものにいはづかしくもあり、また眞實なるもの少なく、よしあるも細やかなる情は、汝が一番と思へど托しおくなり。必ず一生を賤子にして終らせて給はるな。松代とて、かたくとり給ふて、いつしかこりて、深草のつゆ、秋に先きだつ事こよなし。

笑ひはなし

○

れ か め

おはゝゝほんにをかしき名、のう娘よ。今度おとなりにこしてこられし人の子の名はおなべと云

ふにて、お母さんはおかまと云ふとぞ、はんにをかしき名ではないか。おはゝ。のうおたらい。大方、世の中は、かやうのもの、己の子のをかしきは目にも耳にも入らで。

○

ある賣卜者の家に、一人來りて、今朝あけがたの夢に、一匹の鼠、ちよろ〳〵と出でゝ、私が足にはく靴を、がり〳〵とかぢりました。覺めて後も、何となく、氣にかゝりてなりません。何事かの凶事のしらせにはありませんか。どうぞおうらない被下とあるに、賣卜者はせいをもおかず、さやうの不思議ならぬ夢を見しにや。さらば、此の次ぎに、もし、靴が鼠をかぢりたる夢を見ば、わしへに來れとて、すましたるもの、迷心は、大方かやうのもの、卜者も卜者、三馬の百馬鹿にあるおたいともちのやうな。



春寺　東久世通禧

しきみつむ山のかけみち雪とけて
鐘の音かすむみねのふるてら

夜話　佐々木高行

たまさかに古さと人のたづね來て
昔かたりに夜ぞふけにける

春朝聞鶯　高崎正風

うくひすの聲をまくらに聞なから
醒ぬははるのねむりなりけり

望遊帆　鍋島直大

あら磯によせ來る波のたかき日も
遠きはかけはうてかさりけり

早春海　前田利嗣

あつさゆみ春きにけらしわたつ海の
波ちほのかにけさはかすめる

引田部赤猪子　津軽承昭

大御言まつとしつきのかさなりて
おいやつれたる身とはなり劍

閑居友　訪諏忠元

をり〳〵は柴かるしつを友として
かたるもたのし山かけのいほ

烟草　宮地厳夫

かりそめにかりし莨の火によりて
親しきともとなりにけるかな

徳川光圀卿　北郷久政

大あらひの濱にあつめししらたまの
ひかりは世々にかゝやきに鳧

垣若草　大口鯛二

昨日けふもえし垣ねのわかくさに
すみれの花もはやましりけり

大原女　千葉胤明

こりためし薪とり〳〵打かつぎ
出るも入るもおほはらのさと

海邊鶴　三輪義方

うちよする浪ものどかに見ゆるかな
たつのむれゐるうらのまつばら

松上鶴　西内成郷

大庭のみどりのどかに見ゆるかな
千歳を松の友鶴のこゑ

ふみのはしに　井上頼文

ことたまのひかりといへる
白がねもこがねもわれど言だまの
ひかりにまさる光なきかな

述懐　亀谷行

年なみのながるゝかたにたゞよひて
　風にまかする捨小舟かな

鎌足公　　大畑弘國

いにし事よにふみかへすあらましも
　さゝけしくつにまつてもりけん

溪梅　　蜂須賀隨子

そことなく梅か香すなりはる風の
　渡りそめたるたにのかけはし

國旗　　鍋島榮子

日のみ旗かゝけしふねはとつ國の
　波のうへさへやすくぞありける

山家春來　　前田朗子

むらさえの雪またのこる山さとも
　うくひすなきて春は來にけり

和布刈　　南郷柳子

浪のはな幣とも見えて布和刈する

　きぬか衣にちりかゝるらん

藤原百川公　　小池道子

ちからありて溢れさりつるもゝ川の
　水こそおみのかゝみなりけれ

以利沙伯　　北島以登子

あらためしいのりの道は西の海の
　此のひめまつそしるへなりける

夜聞水聲　　伊達泰子

なれぬ間は夜こと夜ことに夢覺て
　雨かとまかふたにかはのおと

早春柳　　原田蒼生子

いともまたうすみどりなる青柳に
　春なはあさきいろは見えけり

窓前梅　　鶴久子

いつよりも年あたゝけみきた窓の
　梅もさかりのおくれさりけり

庭若草　服部磯子

霜よけの松のかれ葉をけさとれは
したもえそめぬ庭のわかくさ

新年雪　安東菊子

あら玉の年の始の初花は
木ごとにつもる今朝の白雪

松上鶴　西内久美子

常盤なる色を千歳の友として
田鶴こそたてれ松のこずゑに

硯　丸玉子

文机の島に動かぬ硯石
われは千年のともと契らむ

新年の所感　三石直子

梓弓春さり來れど、山野といはず、草木といはず、よろづ面目もあらたまりて、總べて樂しげならぬはなし。まして、幾數十町となく、門松樹てつらね注連ひきわたしたる、都大路の初春のけしきは今更、書きたてむも、ことさらめきて聞ゆべし。あはれ、いづれの愛子にかあらむ。さても、いみじう裝束きたてつるよ。ふくよかに襲重ねたる衣裳の華美なる、帶は何やらむ、光澤は日のひかりときらめきあひて、見る目もいとまばゆきに、履物の豪奢なる、昔の老人ならましかば床の間にすゑおきけむ、花の畫などまきゑせられたり。人の中にて人々の賤むる人の似顔を押繪にしたる羽子板をば、然も可惜しげにかい懷きて、乳母だつものに伴はれ、親族がりにやあらむ、行くがありき。途の邊にたちて羽子を追ふ、少女子等の彼を見、これをながむるにつけても、我はいみじとこそ思ふらめ。しばし、たちよどみては我が羽子我が衣裳をうちまもり、乳母だつ者に追ひ縋りざま、彼

等を見かへりつゝ、はゝゑみたるいみじうはこらしげなり。

如何に我ひとりは足らはぬことなしとて、世には、あはれなる人の数々あるを。少しは其等の上をも顧みよかし。愛しき子に、人を侮ることを教へ、人に誇ることををしへ、奢侈といふことをならはせてさへ、「子のため衣服調度のはかなき物に心を苦むることかは。程々にあはせて、見苦しからぬばかりにて止めよ。たゞそれ、心には錦繍を着飾らすることをなゆめわすれそ。何事も、めでたしとのみ見いひてすですなる春のはじめに、うたて人にくまれを思ひつゞくるも、世の親々のいとほしさに、例のこゝろの、もだしかたうてなむ。

小田の里の一日　塩井雨江

「今日もまた松ふく風の岡へ行かむ昨日涼みし友にあふやと。」去年の夏、かりそめに立ちよりて語りたる松蔭の、ゆかしく思ひ出でられ、桂月を誘ひて、さして出でぬ。小田の里なる錦織権太郎ぬしのやしきなり。四五里ばかり遠からぬほどなれど、山蔭の路の、しかも、小石しきつめたるを、廻りもよからぬ車に引かれ行くなれば、歩まぬ脚も折れんとおぼゆる苦しさを、さして行く松の木かげを頼みにて、辛くも小車の上にゆられゆく。山の高きもあらず、水の深きもあらず、唯、暑さにむされたる草の野みちをわけては、土づくりとも云ふべき家の、見るかげもなくつゞき、赤瓦の光りのみあやしく目をいる人里に入り、ことなる匂ひの風に送られて出づれば、またも、石に草にもゆる日

影のくるしき野路にかゝるのみ。心も疲れ、身もとけむばかりにおぼゆるを、思ひやる松のわたりの涼しさを身にしめて、やう〳〵に小車の上ながら、あへぎ〳〵行く。旅行なれたる桂月は、苦しきけしきもなし。

空屋とも見えぬわらやに人はあらず
　　尾なき蜥蜴の出でゝまた入る

と車の上よりよばはりて、山家のけしき寫し得たるにあらずやとほこる。げにとのみいらへて、しばし行けば、またも、

裸體にてしばし走りし配達の
　　やがて居眠る松の木かげに

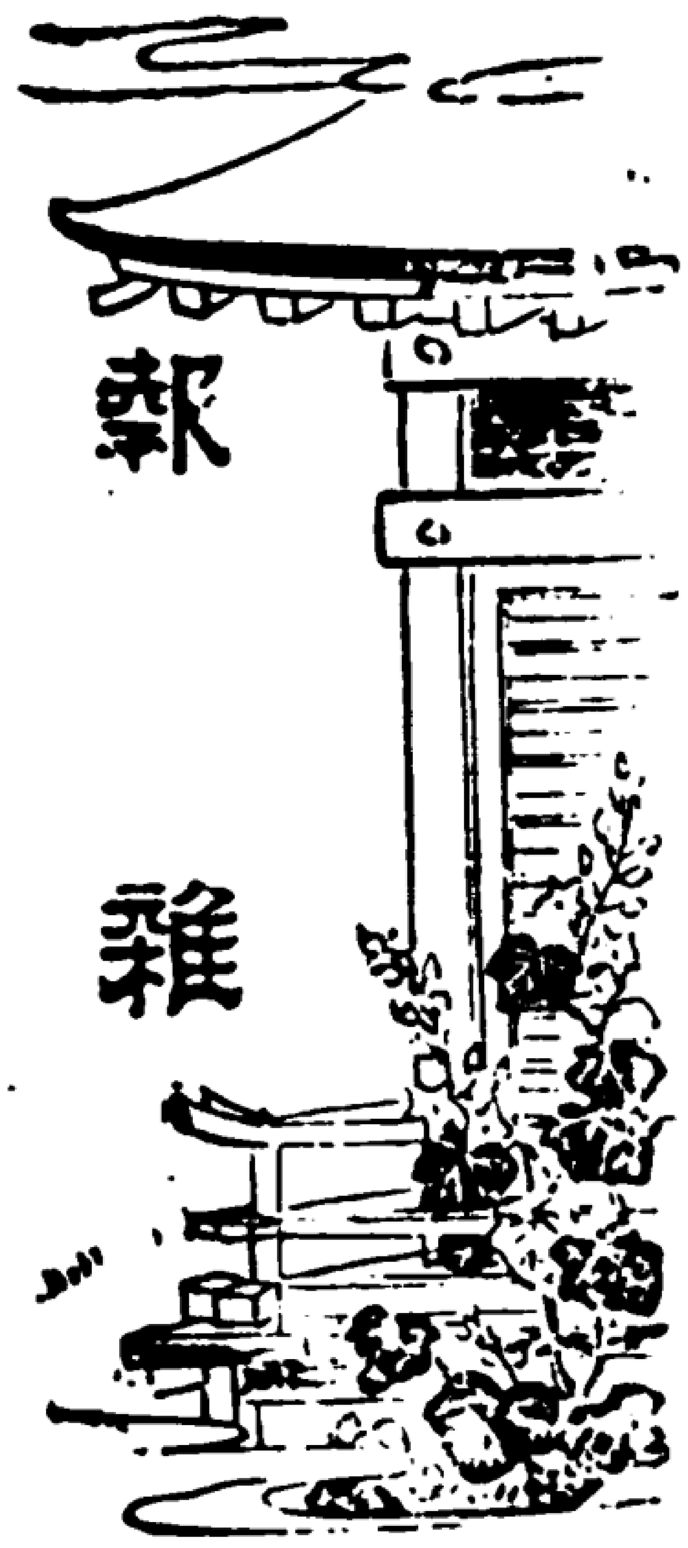
即景の妙いかにとよばはるも評する心だになく、路のべに清水流るゝ柳陰もあらば、しばしやすまんと思ふに、それもあらねば、おのれは、唯、

小車のたゞはやかれと祈りつゝ
　　こゝろにとまるくまもなきかな

多岐と云ふ所をのぼれば、日本海は、右手に蒼々とつゞきて、見え初むるに、夏の野路にしほれたる心も、はじめてのびたりや。志したる木立もまちかになり、一枝二枝しづ枝の風になびくさまは、とく來よと招ぎうながすと見えてうれしく、心ははやく、その門わを叩きけり。岸高く松蔭高き所に、主人の心づくしのさむしろはひかれたり。つらかりし來し方の暑さも、とみに忘られて、心地よくうちむかへば、右いなさの濱、一帶の白沙遠くひきたる末は、北山の青松の裾、日の御崎に至りて、白雲の間になびき、左はつぬさはふ石見の斷崖、遠く雲路のはてにつゞきて、岩橋の近く天の原に通ふとも見え、前は一面の青海原、よせかへす大波の末は、高く大空の岸をうつとも見ゆる壯觀、そともゝ狹く隣りもせま

りたる里に、せまがりくらす身には、此の世のそとに出でたる心地するに、八重の汐路をふきこす風の老松の間をわけて、そよ〳〵と一重の袖を掃ふ涼しさ、つもりたる心の塵も、なごりなく掃はれてか、何となう身も輕くればえ、主人の物語りも、今様の人なみに似ざれば、いつしか身は、これ天上の客となれりやと、あやしまれたりや。

（未完）



●歌御會始　いにし廿六日　兩陛下には、鳳凰の間に出御せさせたまひ、親しく、歌御會始の御式を行はせたまへり。かねても記しゝ如く、御題は、

松上鶴

御製

風のおとはしつまりはてゝ千代よはふ
たつかねたかしみねの松原

皇后宮御歌

さかえゆく御園の松にひなつるの
千代のはしめのこゑをきかはや

東宮御歌

山松のこすゑにすたつひなつるも
おやにならひて千代よはふなり

海軍中將大勳位功四級　威仁　親王

ことしよりまた雛鶴のかすそひて
みそのゝ松に千代よはふらむ

選歌

故大勳位能久親王妃勳一等　富　子

松の上につはさならへてすむたつの
ひなの聲こそきかまほしけれ

内閣總理大臣元帥陸軍大將
正二位勳一等功二級侯爵　臣源朝臣有朋上

くもゐよりおりくるたつの一むらは今さまろらむ濱松の上に
　　　　内大臣兼侍從長從一位勳一等侯爵臣藤原朝臣實則上

幾千代もたちさかゆへき大庭のまつのさきはにすめる鶴かな

選者點者

樞密顧問官兼御歌所長
從三位勳一等男爵　臣藤原朝臣正風上

うちかすむ春のみ山の松の上にひなよふつるの聲そまたるゝ
　　讀師　學習院長兼貴族院議長正三位臣藤原朝臣篤麿上

ゆたかにも鶴は遊へりさきはなる松を千歳のすみかにはして
　　　　　内藏頭從三位勳三等臣源朝臣千秋上

御園生の松にれふれるあしたつの夢にもさはる風やなからむ
　　宮内次官海軍主計總監從四位勳二等男爵臣源朝臣武定上

御園生の松や千年のまどならむひなうちつれてたつの遊へる
　講頌　　　　　　　　正三位伯爵臣源朝臣重朝上

大庭の松にれふれるあしたつはさかゆく御代の夢や見るらむ
　講頌　　　　　　從四位伯爵臣藤原朝臣公大上

ふく風もはたをならさぬ松の上に千代齡かはすあしたつの聲
　發聲　　御歌所參候從從三位勳五等臣源朝臣有良上

ふたはより千代をこめたる松の上たつも齡をかされてそすむ
　講頌　　　　御歌所參候從三位子爵臣菅原朝臣利器上

千代よはふおほうち山の松風にこすゑのたつも聲あはすなり
　講師　　　　　　　從三位臣藤原朝臣功長上

御園生の松に千年のやさしめてこゝろゆたかにたつの鳴らん
　奉行　御歌所樂譜掌典兼雅樂部長
　　　　從四位勳六等子爵　臣藤原朝臣光昭上

九重の雲井のまつにやさしめてよはひかさぬる鶴のけころも
　講頌　　　　　　　正四位男爵臣物部連有廟上

あし立のれくらしめたる山松の木末よりこそしらみそめけれ
　選歌　　　　　　　權掌典從五位藤原敦子上

大庭の松の林のふかけれはむれゐるたつのかつも知られす
　選歌　　　　陸軍騎兵大尉正三位田中國重妻灑子上

富士のれもはこしに見ゆる大庭のまつの梢にたつそなくなる
　選歌　　　　　　女子高等師範學校教授臣三輪義方上

朝日さす高嶺の松はたかけれささやかさに見ゆる鶴のかけ哉
　選歌　　　御歌所參候從七位勳七等日下部宿禰爵雄上

大空のみさりにつゝく山まつのこすゑさやかに立そむれたる
　選歌　　　　　東京帝國大學文科大學々生尾上八郎上

大君の千年をよはふたつかれに松のあらしはしつまりにけり
　選歌　　　　　　　愛知縣平民　原田勇藏上

松の上にたつかね高く聞ゆなり年のはつ日やいまのほるらし

皇族の御詠進幷に臣民の詠進に係る懷紙竪詠草の總數は、一萬二千九百五十五首にて、其の部分は左の如し。

皇族詠進懷紙	六
同竪詠草	一
臣民同	
御前披講華族	二〇
同女官	一七
御歌所	一六
高等官	八
神官	一九
華族女學校生徒	一四

京都向陽會員	一八
計	一三九
臣民詠竪詠草	
華族	四三
高等官	九
華族女學校生徒	八六
東京府	七五〇
京都府	四四〇
大阪府	三九七

神奈川縣	一六八
兵庫縣	二二七
長崎縣	二六六
新潟縣	三七五
埼玉縣	二〇七
群馬縣	一五七
千葉縣	二二五
茨城縣	二二一
栃木縣	九六
奈良縣	九九
三重縣	三〇四
愛知縣	一、〇五八
靜岡縣	三三四
山梨縣	一八四
滋賀縣	二一〇
岐阜縣	三二九
長野縣	六三九
宮城縣	二三四
福島縣	二七七
岩手縣	一四二
青森縣	一六七
山形縣	三三九
秋田縣	二九〇
福井縣	七六
石川縣	一二九
富山縣	一四五
鳥取縣	二八二
島根縣	二三九
岡山縣	二九三
廣島縣	二六二
山口縣	三三四
和歌山縣	六一
德島縣	一四六
香川縣	一〇六
愛媛縣	一九〇
高知縣	六四
福岡縣	二三七
大分縣	一五三
佐賀縣	一二〇
熊本縣	四五二
宮崎縣	七一
鹿兒島縣	一九五
沖繩縣	五八
北海道	一四〇
臺灣	二六
海外	二
計	一二、〇二五
外歌	七
違式	五二五
期日後到着	二五七
計	七八九

例年の歌御會始には、預選歌ありたるも、本年は之れを選歌と改められたり。特に維新以來歌御會ありてより、既に二十八年の日時を經たるも、未だ皇族方の御歌にして選歌に入りたる者あらざりしが、本年は、故北白川宮妃富子殿下の御歌、始めて、其の選に入りたりと云ふ。

●高齢子爵へ恩賜　正二位子爵柳原員光氏は、本年八十才、從二位勳一等子爵仁禮景範氏、正三位勳二等子爵福羽美靜氏、正三位子爵梅溪通治氏は、孰も七十才の高齢に達せしに付き、過日、思召を以つて、おの〳〵、御紋付御盃、並に酒肴料を下賜せさせたまへり。

●救助患者へ恩賜　寒氣の砌りに付き、皇后陛下には、また日本赤十字社病院救助患者の狀況を愍然に思召され、去月十八日、双子縞六十一反、木綿裏地六十一反、裁縫料、金三十圓五拾錢等を、同院患者へ恩賜せさせたまへり。

●故久邇宮御事蹟調査濟　幕末維新の交王事に盡力せられ、却つて、寃罪の爲め、左遷せられたる、故久邇宮朝彥王殿下の御事蹟に付いては、大

に取調を要する事少からざるに付き、豫ねて、内藤耻叟氏等に命じ、調査中なりしが、此の程脱稿せし由にて、近日中に、畏き邊に捧呈し、乙夜の覽に供せらるべしと云ふ。

●敎育勅語廣布の議　　敎育勅語の發布せられてより、こゝに十年を經過すといへども、之を奉誦するは、單に、各學校のみに止まりて、國民全般に渉りては、更に擧々服膺の責なく、吾が國體にとりては、實に金科玉條ともいふべき、此の　鳳語が、さながら高閣に束ね置かるゝ如き觀あるを慨し、一部の有志者は、何卒して、全國一般に、之を廣布せしむべき方法を講究せんとし。所々に會合を開きつゝある由きこえしが、右は、愈々建議案として兩院に提出する事となり、一月下旬星岡茶寮に會合したる由にて、出席者は、安部井磐根、井上頼圀、中田憲信、及び、大日本實行會の金丸俊胤等の諸氏なりしといふ。

●敎育特志　　九州久留米驛九鐵運送店の主人にて、星野フサ(三十)といふあり。二十歳にして、父を亡ひ、此の頃、又、夫に先だゝる。フサ、老母を相手に運送店を營み、數萬の財産を運轉し、家名舊にまさる。妙齢の時より、敎育熱心にて、同地高等女學校の創立に際し、敷地三千坪資金千圓を寄附したる事あり。現に婦人矯風會長たりといふ。

●孝女　　靜岡縣志太郡豊田村福島區菅沼浪藏(六十)妻トヨ(五十四)の間に、二人の娘あり。姉をカツ子(二十四)といひ、妹を某(十七)と云ふ。姉には金藏といふを養子となし、貧しくは暮し居れど、一家、よく和合して、人の鑑とぞなれりける。わけて姉のカツ子は孝心あつく、さらでもたらぬがちなる家計費より、老父の酒をたしめるものから、多少に拘は

らず買ひ求め、父の悦ぶをもて何よりの樂しみとなせしが、あはれにも老父は去年の八月に病をもてみまかりぬ。かれ、人に秀れたるやさしき心には、いかばかりかなしかりけむ。其の後は、ひたすら母に事へしが、母は數年前より僂麻質斯に罹かり、立居の儘ならざれど、及ばむ限りこれを慰めんとて、子供等には飯を與へ置き、外に遊びに出したる後、ゆる〳〵給事なすのみならず、さき頃などは、五六町も隔たる所に浮れ節といふ興行ありければ、毎夜腰の立たぬ老母を脊負ひて、之を聞かしむるなど、多くは得がたき孝行ものなりと、近鄕の人賞めぬものとてはなしとなむ。

●まゝしき人々に　高知縣香美郡韮生野の里に北村竹馬といへる小商ありけり。心直ぐなるより、日頃村内の信用を受けて、去年の秋の頃、近所隣の人々より生糸の買捌を賴まれて高知に到り、それを賣りはらひ、四百餘圓を懷にして、ある旅館にありしが、如何なる惡運にやありけむ。一寸、風呂の留守のまに、其の金はや悉く盗み去られたり。後にて盗人は捕はれたれども、遣ひ果して後なれば、取戻すべきすべもなく、あまりの不面目さに、臺灣へと高飛して、後は音信も不通となり、生死もさだかならず。跡には、後妻の某と、前妻の子義重(十四)カズヘ(十)の三人とはなりぬるより、生路を失ひ、悲嘆の涙に呉れたりしが、此の後妻某と云へるは、同郡にて、小學教員を勤むる吉井某氏の妹にて、世にも義理堅き婦人なれば、それより後は、如何にもして夫が失ひたる金の償をせばやと、心を千々に碎きつゝ、或は日雇賃仕事を爲して、多少の儲を得、そを拂ひ出づるが上に、なほ、二人の子をも學校に通はせつゝ、自が三度の食を二度に減じてまで、後の計らひに心配

り、生さぬ仲とはいへ、之を慈しむこと實の母にも優さるものから、子供等もおのづから親み孝行心も起り、兄は今年高等四年にて、妹は尋常の四年生なるが、ともに成蹟よく他兒に超え、中にも兄の義重は、母の心を察し、幾分にても學資の補に爲さんとて、人の用に使はれ、十錢、あるは二十錢の金を得ては、月々の費用の助けにせんと喜び、過日赤岡といふところへ使に行くをりも、此の月の月謝を得たりとて、勇んで、寒き日に朝まだき、衣は薄きことはなきか、途中にて怪我するなど、母にいたはられて出でたりとぞ。人道よりいはゞ、親となり子となりしもの、繼しき中とて分け隔てのあらるべきやは。然れど、實際はこれと反對にて、繼子としいへば、厭ひ惡みて、死ぬよかしに待遇ふもの丶み多き世の中に、此らは、か丶る人の戒め草ともなりなむかしとて、かくは。

●夫婦十三對皆其の子　宮城縣野尻村の農、添野清右衞門（七十二年）妻今朝松（六十五年）の間に設け得たる男十八、女三人、同胞都合十三人、孰も健全にして、皆それ〴〵の配偶あり。曾て、同胞相議り一の賴母子講を組織し、會毎に十三對の夫婦が打揃ひて相會し、老父母を招待して、厚く老後を稿ふを列とせりと云ふ。いと目出度ことになむ。

●女子の銀行事務　日本勸業銀行にては、勸債券利札整理に女子を使用することゝし、先づ五名だけを去る十五日より、募集使用したる由。女子の職業の、各種の方面にむかつて擴張せらるゝは、いと喜ぶべし。

●江内職業學校教授傭聘　佛領清國東京附近江内職業學校に於いて、日本彫刻工一名、漆器畫工一名、青銅及び銅撥型鑄工一名傭聘したき旨、印度支那總督より本邦佛國公使の手を經て依賴し來

りたるを以つて、農商務省は、相當の人物を選定し、其の依賴に應ずる筈なりと。

●各國に於ける肉食の分量　統計家の研究によれば、國民によりて、食料として肉を消費する分量は各異なれり。其の割合は、平均一年間一人の消費額は、左の如しと云ふ。

合衆國	一二〇「ポンド」
英吉利	一〇五仝
佛蘭西	七四仝
獨逸、荷蘭、ベルギー	六九仝
スカンヂイナビア	六七仝
アウストリア	六四仝
スペイン	四九仝
露西亞	四八仝
以太利	二三仝

●惡まれぬ爲方　世のわさましき輩は、僅しき金錢上の關係より、年來の親交を斷つがごときこと尠からず。然れば、俚言にも借りる時の地藏顏かへす時の閻魔面などいふぞかし。借りて返し澁るは勿論わろきことながら、貸してヤカマシク言ひ思ふも、亦よろしからぬことなり。とかくは、各自の經濟に心を用ゐて、さやうの關係つくらぬが肝要なり。とはいへ、このごろ秋田縣の何某といへる菓子屋の爲し丶借金の言譯こそ可笑しかりしが。如何な閻魔樣にても、これには顏をくづして笑ひけむよ。つれ〳〵の伽にもと左に記さむ。見むも見ざらむも心のまに〳〵。

昨年チウクワマンシヂウ、ぬきさしならぬキンツパ切迫の折柄、御高恩を以つて、金員カシハモチ下され、牛死牛ショクパンの窮厄をまぬかれ、誠に以つてフクガンの外無之、ありカタパンさ奉鳴謝候。右金客臘中御返金可申處、相カワラセンベイの懐中、且つ一年の離關たる關の月に際し、一文駄菓子の貯もなく、シホセンベイの塩からく新年を迎へ候。ありさまにて、大にブツキリの不義理を仕り候、アマナツトウのあまたれた御

願に候へども、咲くサクラモチの頭まで御猶豫下され、モロコシの間、カステラとしてチキナアメと思召し、御ヤウカンの程奉願候。追々、コシノユキもとけ、日脚もノシウメの時節と相成候はゞ、參上御禮可申上、先は、御恩借のキンギヨクタウ、御申譯まで、面をギウヒにして奉申上候。

●ゆかしき心　轢んでも、唯は起きず、粒の大きな砂利を摑んで持歸り、我家の鉢前へ並ぶるといふ狡猾なるものゝみ多き世の中に、聞いても心地よき、正直噺あり。日本橋區本小田原町七番地の魚問屋山崎忠兵衛方雇人鈴木新太郎(二十二)といふ若者は、去四日の夜、同町の往來にて、一個の服紗包を拾ひ取り、其の中を改むれば、金百四圓と、四十四圓の小切手一枚、其の他雜品を入れありしより、落主は新年、早々、嘸ぞ當惑し居るならんと、直ちに日本橋署へ屆け置きし所、右は神田區猿樂町廿四番地河邊すま方同居、森澤吉五郎と云へるが遺失せしものと判然し。翌日双方を召喚して、金品は吉五郎へ下げ渡されしに、同人の喜び譬へん方なく、偖、禮金は何程贈りて可からんと警官の指定を乞へば、五圓以上二十圓以下との事に、吉五郎は最早手に戻らぬ金と諦らめしもの故、些少ながら三十圓の禮金を呈せんと云ふを、新太郎は、イエ、左樣な、大金を戴だく譯はありません、併し折角の思召なれば、半金も戴きませうと答へ、イヤ、夫では困ると、双方押問答に、果しなく警官も見兼れて、仲裁し、然らば二十圓を與へよと云はれしも、吉五郎は承知せず、是非三十圓を受取つて貰ひたいと、押付けるやうに渡されて、新太郎も劣けては居ず、是も叩き付けるやうに突き戻し、果は爭論ともなるべき所警官は、新太郎に説諭を加へ、漸やく該金を受取らしめしとは、近頃殊勝なる人共かな。

▲祝盃　身に錦繍を着飾りて、得意がる藝妓は數多あれど、心に羅綾を纏ろは稀なり。其の中に、京都祇園新地の老妓、田中オエンといふは、十數年來左褄を取りて、已に五十に垂んとすれど、若き頃より客を欺して、金を取るなどいふ事はせず、貪らず、吝ますといふ主義を立通して、こゝ藝妓の本分と心得たる洒落の氣風なれば、追々顏は賣れて、姉さん株の一人に數へられては居れど、懷中常に空しく、いつも貧乏神と中のよい女なるが、其の樣な事は少しも苦にせず、金あれば、惜まず使ひて、至極切離れのよきは、吝嗇家の多き京都藝妓には珍しと、客は、勿論茶屋朋輩の氣受よく、オエン〳〵と持囃されて居りしに、客臘の押詰突然下京區役所より召喚狀來りて、實印携帶即刻出頭すべしとの事に、さては何か叱られるのであらうと、悸々ものにて行て見れば、巖手宮城青森の三縣知事連署の褒狀に、木盃を添へて下賜せられしにぞ、本人、更に合點行かず、何した譯かと、其の仔細を尋ぬれば、先年東北地方に海嘯ありしとき、貧民救助の内へ、寄附金をしたるお褒美ぢやと云れ、成ほど左樣仰有れば四年前に、十圓寄附した事がありましたといふ。左るにても不審なるは、常から貧乏藝妓の銘打たるオエンが十圓といふ金、寄附したるは、何した譯

ぞと聞質せば、其の仔細、外でもございませぬ。忘れもせぬ明治二十九年の六月二十五日、京都紡績會社の萩野芳藏といふお方が、神戸にて宴會をお開きなされたとき、　大勢の藝妓と共に、お周旋に招かれ、骨を惜ます勤めた爲に、十四の祝儀を下されたは、身に餘りたる過分の下賜物、此の金むさ〳〵飲食やなどに使ひ棄るは、勿體なしと京都に歸る途次、つく〴〵と思案するに、此の頃新聞に書てあるのを見れば、奥州の方で、恐しい海嘯が起り、家も人も押流されて、多分の人死があり、運よく命助かつた人も、着のみ着のまゝにて、路頭に迷うて居るとの事なれば、察、此の金は無い物と思ひ、救助義の内に寄附せんものと、歸ると直に、此の區役所へ差出したのでございますと、左りとは殊勝なる心掛、區役所の吏員も感服したりしが、オエンは思ひ寄ぬ御褒美に預りて、喜ぶこと限りなく、　早速、其盃を御幸町三條下る萩野の許に持參して、吹聽し、今祇園新地には、美しい藝妓、金のある藝妓は、澤山あれど、お政府より頂戴した木盃のある者は、恐らく自分一人ならんと、暮の間は、神棚に上げて、神酒を備へ、新年來、廻禮に來る人ごとに、吹聽して、其の盃にて祝を進めたりとぞ。





歌の庭



二月五日兼題　梅中雪

天　長野縣長野市問御所町　松野澤子

おくれぬをみよのならひと雪ながら
うめもはつ日ににほひ出にけり

地　常陸國大貫町百二十四番地　田山芳子

ふる雪にはなのありかはわかねども
吹きくるかせにうめか香ぞする

地　鹿兒島市山下町　丹下花子

ゆきふかきいつこを春のこえつらん
みやまのうめはさきそめにけり

人　三河國寶飯郡下地町　永井さい子

うめか香に庭のあさかせかをらすば
たゞゆきのみとおもひはてまし

秀逸五首

何ごともすゝみゆく世におくれしさ
みゆきのなかにうめは咲きけむ　岩代　小林千代子

すゝみゆくよにおくれしさ梅のはな
ゆきのうちよりさきそめにけり　永井貞子

たゞ雪のつもるのみなるわがまさに
こゝろのさもさにほふうめが香　岩代　宇藤友子

またふかくつもれる雪のなかゝきに
ひさねだにほふうめのはつはな　信濃　齋藤よし子

ふる雪にうめのかをりもまじりつゝ
なかめつきせぬそのゝゆふぐれ　東京　河村まつ子

（以下原稿到着順）

いろまがふ雪かそれかとよりて見ん
おのがかき根のうめのはつはな　南部さだ子

しらゆきはふりつもれどゝ梅のはな
にほひはかりはうもれざりけり　長澤いゑ子

うぐひすの聲さへそひてをりをりに
ふゝきにゝほふをちのうめか香　財田富子

ふる雪にうもれながらもはるまちて
ほゝゑむうめのこゝろゆかしも　德永そう子

けさみれは雪のふりつむそのゝ内に
ほころひにほふうめのはつはな　木村國子

まさゝして雪眺めをれはゆかしくも
かせかをるなりうめさきぬらむ　岡部英子

みゆきふるさむさにさきぬ梅のはな
いかにたふときみさをなるらむ　井上千代子

すきまもる雪のあさかせかをるなり
かきれのうめのはなさきぬらし　立神宮子

ゆきのあさ友かりゆけはなつかしき
ひさあらすしてうめかかそする　浅山雪子

わか庭にふりつもりたるしらゆきも
うめかかのみはうつめさりけり　安原くに子

雪みんさつま戸をあくるたちまちに
あさかせさむくうめかをるなり　粥田直子

白ゆきのうちににほひぬなきちゝが
うゑおきまゝしうめのひさもさ　立山涙子

進むよにならふかなれもうめのはな
ゆきのうちよりにほひそめしは　小笠原元子

ふりつもる雪のなかより咲きいてゝ
はるを知らするうめのはなかな　齋藤すわ子

きけやらぬ雪のなかにもさきいでゝ
かなりゆかしきうめのはつはな　内海順子

ふる雪のなかにも咲きてうめのはな
なべてのはなのさきがけそする　川島さく子

この朝けむめのこすゑにふりつもる
ゆきもたへなる香にそ染みける　都水猪子

むつの花にしばし盛りをゆつりつゝ
香のみぞしるきにはのむめがね　目黒佐宮子

うくひすの來啼かさりせはいかにして
みゆきのなかのうめを知らまし　鮫内都宮子

ふるゆきに野山の木すゑかならすは
むめさきけりさたれかしろへき　井田操子

冬こもるねしにつけはやしらゆきの　山方春子

うちににほへるうめのひさはな

ふる雪にいろはまじりてみねれども
ふきくろかぜにうめが香ぞする　根田よし子

こそふりし川のしらゆききぬまに
かすみこめてそさけるうゝな　大塚小松子

梅が枝のはなもろさもにしらゆきの
にほひもふかきのきのしたかげ　山田香川子

白たへにゆきのふれゝばうめのはな
かなりしろべにならんさぞ思ふ　坂本遊多歌子

白ゆきのたわゝながらにさくうめの
にほふあたりはふゆなかりけり　武田いよ子

ゆきは花はなはゆきかさ見ゆれこも
うめはにほひにしられけるかな　山田宮代子

白妙にふりつむゆきににほひあひて
かぜにほころぶうめのはなかな　稲津千子

さきそめし梅やあるらんふりつもる
ゆきのしたかせ香ににほふなり　友永章子

雪ふれはにはの木すゑもわかれさも
うめか香のみはうもれざりけり　徳永篤子

ふりつもる雪の下枝にかなりあひて
はるにさきたつうめのはつはな　吉富彦子

年ふかくゆきのふる枝にいつしかさ
はるまちかれてうめのはなさく　那須昌子

ふりしきる雪にはもののうづもるに
きぬはうめのかなりなりけり　中山嵐子

ふる雪にいろはいづれさわかれさも
香やはかくるゝうめのはつはな　村上昌子

ゆかしくもなすのこなたにかなる也　村崎包子
ゆきのした枝のうめやさきけん
ゆたかなる邪もしられてしらゆきの　黒田明子
なかににほへるうめのはつはな
梅がねにゆきのつもりてさくはなは　黒田美津子
ありさもみねずかなりけるかな
ふる雪もかなりけるかなうめのはな　松永信子
ひと重も八重にさくここちして
にほはずばそれさもわかじ梅のはな　佐々木忍子
ゆきふりつもるつきが瀬のさと
雪のうちにいよく白くにほひあひて　佐々小琴子
かきれのうめのはなさきにけり
かならずば雪もろさもにはらはまし　佐々有鄰子
みつよつににほふうめのはつはな
ふりつもる雪のうちよりめづらしく　受樂院圓子
さきこさににほへうめのはつはな
ふりつもるみ雪のなかにさきてこそ　平山政子
うめのみさをはあらはれにけれ
ふる雪もはなもひさつにうぐひすは　筑紫春子
うめの木すゑになきわたるらん
ふりつもる雪ふきはらふあさかぜに　高宮謙子
さきそめぬらしうめが香ぞする
梅のはなかなりばかりはかよへども　濱口貞子
ふるしらゆきにみわかざりけり
うくひすはまださひもせぬゆきの中に　高やす子
たれをさもさかうめのさくらむ
ふりかゝるこすゑのゆきも匂ふなり　椎野ぬき子

はるにさきたつうめのはつはな
ゆきまには梅のはつはなさきぬらし　林琅子
そら吹くかせも香ににほひつゝ
にほはずはなにを知るべにたならまし　清河照子
ゆきまにさけるそののうめが枝
よの人のかゝみなりけりしらゆきに　三木壽子
うつもれはてぬうめのにほひは
ふりつもる雪はたかれをうつむれさ　道家しつの子
うめのににほひはかくれさりけり
雪ふりてくさ木うもるゝやまざさに　深尾千代子
いろ香ゆかしきうめのはつはな
庭のおもはまたしらゆきのきぬまゝに　高砂菊代子
しはのかき根のうめさきにけり
ふりつもる雪のうちより咲きいてゝ　高砂きよ子
ひさりのさかににほふうめかな
雪のうちにさきににほひつゝたぐひなき　安孫子悦子
こゝろをみするうめのはなかな
にほひのみふりつむ雪にのこりけり　早川信恵子
いつこかむめのありかなるらん
きねやらてふるしら雪をながむれば　早川千代子
こゝろにかゝるむめのはつはな
ふる雪もはらはておかんふたつみつ　玉井隆子
うめさくねたのはなやこほれん
梅のはないさゞにほひのふかければ　岡田柳子
つもるゆきにも香をうつすらん
ふる雪にかけは見ねれさうめのはな　岡田はる子
にほひはかりはかくれさりけり

梅か枝はゆきにうもれて見ゐれさも
　香をしたひ來てうくひすのなく　道戻やゑ子

うくひすもまだ音づれぬゆきの中に
　まつこそゑめれうめのはつはな　三宅いくよ子

ふるゆきに花は見ゐれさわかやさの
　のきはにちかくうめか香ぞする　鵜澤千代子

雪のまなかならさりせばうぐひすも
　いかでしらましうめのはつはな　南部佐多子

ふりつもるゆきにこすゑは埋れても
　かをりにしるきうめのはつはな　西磯江子

しらゆきのふるゐにたにもうめの花
　さくへきさきさきにほふらん　丹下枝子

まさちかく雪のふゞきのかほるなり
　にはのいつれのうめやさきけん　丹下重子

降りつもる雪にすがたは見ゐれさも
　かをりゆかしきうめのはつはな　細谷たみ子

ふりしきる雪のなかにもにほひ出ぬ
　うめも御世にや咲きゝそふらん　山田璋子

ふる雪につゝめさあまるにほひかな
　そのゝいく木のうめのはつはな　横山柳子

春はまたいく日へぬさもうめさきて
　はなの上さむくあわゆきのふる　横山寸賀子

白ゆきのたわゝにつもるうめか枝の
　たかきにほひをひさやめつらん　林文子

ふるゆきにいづれ花さもわかぬまで
　うもれながらににほふしらむめ　大橋節子

ゑみそめしのきはの梅にふりつもる　遠山たゞ子

春きぬささむさもさらにしらゆきの
　ゆきのきせわたおもしろきかな　遠山よしゐ子

ふる雪にうめのすがたはうづもれて
　うちにゑかほのにはのうめかゐ　徳永萬壽子

梅のはなひさにみせじさつもるさも
　そこさもわかぬかをりゆかしき　徳永欣子

ふりつもるゆきもいさはす梅のはな
　かをりばかりはゆきにうもれず　堤彬子

にほはずば梅をいづれさまごはまし
　はるまちかれてはやさきにけり　小森田輝子

ふたつみつさけるㇸれのうめのはな
　ふりつもりたるにはのみゆきに　小森田初子

ふる雪にはなのすがたはみゐれごも
　さかりさみする今朝のしらゆき　澤田春子

梅のはなすがたはゆきにうつもれて
　うめの香にこそさくさしられ　澤田十萬里子

うくひすはかをりさめつゝふり積る
　うもれぬものは香のみなりけり　本庄小なみ子

ふるゆきに花はそれさもわかれさも
　ゆきにもきなくうめのはなが枝　高橋かね子

雪のうちに梅のかをりのゆかしきは
　かをりゆかしきにはのうめかな　草野さめ子

小ふかみかぜさへさむきたにかげの
　さきたるはなにはるをしれさや　清原周子

ふりつもるこすゑの雪をかをらせて
　ゆきまににほふうめのはつはな　白石梅

さきいてにけりうめのはつはな

あわゆきのかつきねてふる夕にはの
まがきにしろしうめやさくらむ　藤野聰子

匂はずばいづれなうめとわかたまし
降りつもりたるにはのしらゆき　吉田まさゑ子

はらはんとわか立ちよれは嬉しくも
そでにこぼるゝゆきのうめかな　馬場梅尾子

うつもれぬはなのに匂ひはしら雪の
ふりつもりたるうめにこそしれ　鈴木秀子

うめか枝につもらはつもれふる雪も
にほひはかりはいかてうつめん　鈴木浪子

拂ひなばさきにしはなのちりやせん
つもりとつもるうめか枝のゆき　石井しげ子

ふる雪にいろこそ見ねれうめのはな
たかきかをりにそれとしらるゝ　濱野時子

しろたへの雪はつもれと咲くうめの
にほふあたりはのとけかりけれ　深谷せい子

かきくらし雪は降れともしかすかに
ほころびそめぬうめのはつはな　蕪木林子

かきくらしふりつむ雪のなか〳〵に
あまりてにほふのきのうめか香　青木たま子

降る雪にすかた見ねれとうめのはな
かぜのまにまに香にぞにほへる　加藤たま子

白ゆきにはなはまかひて見ねれとも
しろくそにほふまとのむめかな　磯野こと子

しら雪のまたきねやらぬまかきにそ
さきそ出てぬるうめのひともと　坂田彌代子

うめのはないろはみ雪にまかへとも　八木沼里子

たかきかをりはかくれさりけり

しかすかにかほる心見れはふる雪も
うめのにほひはうづめさりけり　福原菫子

朝まだきおきいてて見ればふりつもる
ゆきのなかにそうめはかをれる　石川美野子

ふる雪になくうくひすもうめか枝の
しろきかをりをとめてきぬらん　石川たな子

うつもれてかをらざりせば梅のはな
つむれるゆきとひとや見るらん　石川よし子

降りつもるゆきをはらふと立よれは
はやくもさきてうめそにほへる　石川多喜子

ふるゆきは梅のこすゑにつもれとも
はなのにほひはうもれさりけり　關原つれ子

しらゆきの中にもはなや咲きつらん
ねやの戸もれてにほふうめが香　小川初野子

降るゆきをなかしてにほふうめの花
おのがすがたを見せずもある哉　布能なを子

比ひなき香をなつかしみとめくれは
ゆきのしたよりにほふうめか枝　岩川まち子

雪ふりて木ことにはなは咲きぬれと
香のゆかしきはうめのひとねだ　岩波のち子

たをる手に雪はみだれて散りぬれと
香こそはのこれうめのはつはな　岩波后子

さきましゝ花とこそみめくれなゐの
うめのこすゑにふれるしらゆき　萩原章子

しら雪もまたらにふりて咲きそめし
うめにましるもうれしかりけり　柴田けい子

ふる雪にはなは見ねれさうめか香の
かをろにつけてそれさしらるゝ　諸井久匡子

あわ雪のふる枝のうめもむら〳〵に
咲きてに匂ひをそふるなりけり　吾妻ちか子

うす雪はふりかくせさもうめのはな
まかはぬものはに匂ひなりけり　舘脇ます子

ふりつもる雪のまかへはうめのはな
たかくもかをれわけて折るべく　宮川さし子

ふる雪にいろはまかへさうめのはな
こぬひささそふかこそしろけれ　片山あや子

庭の面もたゝしろたへにうつもれし
深ゆきのなかにに匂ふうめかな　宮田けい子

香をりきてそれさはしれさふる雪に
いろを見まかふにはのしらうめ　戸塚鐵子

ふりかゝる雪のうちにもうめのはな
かくれぬものはに匂ひなりけり　内田さく子

ふる雪にみなしろたへになりぬれさ
香やはかくるゝにはのうめか枝　前田ひさの子

うもれてもうもれぬものはふる雪の
なかにもしろきのきのうめが香　池江榮子

ふりつもるゆきの中にも香そしるき
うめのこゝろにならひてしかな　池江もさ子

降る雪にまさの月あけてなかむれは
そこさもわかすうめかをるなり　伊東鶴子

ふる雪をおのかあたさもしらうめの
にはもせきまてはなのかそする　伊東蓉子

ふりかゝる雪をはらへはなつかしき
名取よし子

しろだへのそれかあらぬか梅のはな
うめのに匂ひにそてかをるなり　坂田喜美子

立ちかへる春のひかりにさそはれて
ゆきうちはらふそてかをるなり　名取正代子

ふりつもる雪のなかにもふたつみつ
ゆきのふる木のうめさきにけり　田代喜利子

ふりつもる雪のなかより笑みそめて
香をはなちてもさけるうめかな　田代艶子

ふく風は身にしみ〳〵さふるゆきに
ひさり香はなつうめのはつはな　田代綾子

乙女らもひさへにならへ庭のうめ
うかれてもな匂かをるうめかな　木村菊子

こささらにきよけかりけり白たへの
ゆきのしたにもしろくかをるに　日高かず子

ますらをの猛きすがたに似たるかな
ゆきよりに匂ふうめのはつはな　中村かち子

うつもれぬかをりそしろきふり積る
ゆきにもかをるうめのひさもさ　山本はる子

花の色はゆきにまかひてみねれさも
ゆきにもまかふしらうめのはな　吹田たけ子

ふりつもる雪のしたにもさきにけん
たちよるそてにに匂ふうめが香　淀朝子

雪なからうめや咲くらんたまはゝき
あはれやうめのかこそたかけれ　伏脇米子

降る雪をながしてうめはさきにけり
さるそてかをるまさのあさかせ　屋鋪すゞゑ子
のさけきはるをまちやかれけん

いつれをか花さはみまし降りつもる
　ゆきのいろにもにほふうめか枝　梯　たけ子

さく梅のいろはかくれて見ねれさも
　こすゑぞかをるゆきのつもりて　田原春子

白雪のきよきすがたにうつりあひて
　ひさしほゆかしうめのはつはな　林　やす子

花のいろは雪にまかひてみねすさも
　香をだににほへにはのうめかね　敷島ふみ子

すゝみ行く世にをくれしさうめの花
　ゆきのふる枝に咲きや出つらん　牧　乘　子

しら雪はふりかくせさもうめのはな
　かこそいよいよあらはれにけれ　河野みち子

なつかしきにほひを送るうめか枝の
　ふゝきのまさはさゝれさりけり　乘常りゑ子

雪なからなりてかざさんゆかしくも
　にほひいやそふにはのうめか枝　神田秀子

降りつもる雪間ににほふくれなゐの
　うめのかをりのなつかしきかな　臼井みや子

なつかしきかをりに夫さ知られけり
　みゆきかなかのうめのはつはな　菊地よし子

ふる雪にまかひてはなはわかれども
　かくれざりけりそのゝうめか香　外川益子

なつかしきかをりやいつこふり積る
　ゆきにうもるゝうめのはつはな　日吉あさ子

ふる雪にうつもれなから香ににほふ
　うめのみさをそをゝしかりける　尾倉益子

ふる雪にたゆまてさけるむめのはな　酒井れい子

　ひさのこゝろもかゝらましかは　村山てる子

梅がねはしらゆきのみさおもひしに
　かをりゆかしきはなもさきけり　根津禮子

かをらずばしらでやすぎん梅のはな
　ねたもたわゝにゆきのつもれば　根津禮子

降るゆきにしほれやせんさ思ひしに
　いよいよかほるにはのうめかね　千代田たき子

こちふきて梅につもれるしらゆきの
　さくるさきもににほふはつはな　河田いし子

にほふ香はいつれの枝さしらゆきの
　ふりかくしたるうめのはつはな　田村なか子

雪のうちにさきいてしよりさきかけの
　なにはおひけんうめのはつはな　金森さし子

しらゆきにうもれなからも梅のはな
　たかきかをりはにはにみちけり　山本まそ子

ふりつもる雪のなかにもうめのはな
　咲けるはひさのかゞみなりけり　鵜濃喜代子

ふる雪のつもるこすゑのひまごさに
　かをるもゆかしうめのはつはな　中崎あくろ子

降る雪はねたにつもれさうめのはな
　たかきかをりはうもれさりけり　龜井玉子

しろたへの雪にまかひてうめさきぬ
　たにのうくひす今日や來なかん　井上津佐尾子

ふるゆきはいさきむけれさ梅かかの
　かをれるまさはさされさりけり　上田綠子

さしたちてまたきねやらぬ雪なから
　さきかけたりやうめのはつはな

さく花はそれとしられてふくかせに
　ちりくるゆきもうめか香そする　永山登子

ふりつもる雪にこすゑはわかれとも
　かやはかりるゝしらうめのはな　青柳つれ子

ふりつもる雪ににほひてわかやどの
　うめのはつはなさきそめにけり　山崎ちか子

ふる雪にうめのかをりのにほへれは
　あさけのまどのさしもやられぬ　青島しげ子

ふりつもる雪にみさをぞ知られける
　まなびのそのゝうめのはつはな　岡くす子

いやか上にけさの白雪はつもれとも
　香はうつもれじのきの梅か枝　石川たつ子

梅のはなふたつ三つ四つさくえたに
　こゝろなけにもつもるしらゆき　石川類子

こゝろなくはらはゝちらむ梅のはな
　むもひもふかくつもるしらゆき　石川らく子

なかなかにかをりそたかき降り積る
　ゆきのなかより咲けるうめかえ　石川久子

かをとめて見出てたるこそ嬉しけれ
　ゆきのしたなるうめのはつはな　石川なゑ子

ふりつもる雪もたわゝに咲き出てゝ
　にほひにけりなにはのうめか枝　仁保しま子

いつの間にほころひそめてうめの花
　ゆきにかをりをゆるしたりけむ　田村直子

うくひすもまたおとつれぬ梅か枝に
　しらゆきなからはなそさきける　鈴浦よさ子

夜のうちに雪間のうめや咲きぬらむ　山村隆子

　けさふくかせもかをりそめけり　江尻千代子

しろたへの雪ははやくもとけよかし
　したにうもれてうめのさけれは　江尻喜志子

夜のまにしろたへのきぬきてけりな
　さきそにほへるにはのうめか枝　小川政子

幾重にもうづもれたれとゆきのうめ
　かをるみさをはかはらざりけり　三村久子

ふりつみし雪は水すゑにありながら
　ゆかしくにほふうめのはつはな　宇高まつ子

ふりつもる雪にそれとは見えねとも
　かをるにしるきうめのはつはな　野中朝子

つむ雪にうもれて見えぬうめのはな
　かくれぬかにそしるへかりける　境野愛子

さく梅のすかたはゆきにみえねとも
　にほひはかりはうもれざりけり　國枝すゞ子

うめの花さきしこすゑにゆきふりて
　かをりもさゆるにはのおもかな　阿保松子

うめの花れたしとかくすあはゆきも
　かほりはかりはつゝまさりけり　阪本榮子

ふる雪にうもれてはなは見えねとも
　うめのにほひはかくれざりけり　鈴木けい子

雪ふりてにほへるまどのうめのはな
　またたくひなきものとこそ思へ　小高しげ子

ふりつもるゆきもいとはぬうめの花
　にほひはいとゞゆかしかりけり　太田けん子

ふりつもるゆきのなかにも梅のはな
　うれしくにほふにはのおもかな

ふるゆきに庭のうめか枝はなさきて
なかめもあかぬきのふけふかな　上田とめ子

きのふけふふりつむ雪にうつもれて
にほひもたかきうめのひとゑた　北村なを子

ふる雪のなかにありてもさく花の
かをりもたかしにはのうめか枝　相川こう子

ふる雪におもはぬはなの咲きそひて
うめはいよいよにほひゆかしき　横手たつ子

ふる雪もいとはでにはにおりたちぬ
いづれかうめとしらまほしさに　横手こう子

山さとはまたゆきなからあつさゆみ
はるをしりてもにほふうめかな　新井とよ子

鶯もしらすやあるらんゆきのうちに
うめのはつはなさきにほふとは　新井松子

うくひすもいまたきなかぬ雪の中に
にほひをもらすうめのはつはな　新泉翠子

かをるかせにそれとも知られけり
ゆきにうもるゝうめのはつはな　黒子玉枝子

ふりつもる雪もいつしかに匂ふなり
けささきそむるにはのうめか枝　粟田口のぶ子

ふる雪をものともせすてかをるかな
みさをもたかきうめのはつはな　大谷沚峰子

ゑみそめし梅のこすゑにゆきふりて
さかぬゑたさへましろなりけり　山本龍子

うめの花かをるあたりにたゝすめは
小かさにゆきもやゝつもりけり　熊谷文子

うめのはな雪のしたよりさきぬらし　藤村鐵子
けさたゝならぬかをりこそすれ

我かやとの梅さきにけりふりつもる
ゆきのはなさへかをるはかりに　戸倉信子

しら雪のつもるまかきをこゑてふく
かせこそかをれうめやさくらむ　服部篤子

うくひすのまた冬こもるゆきのうちに
さきてもうめははるをまつらむ　服部正子

いつのまに花はさきけむうめかゑの
ゆきのしつくそかにゝほふなる　加藤數子

さきみてる花とこそみれしらゆきは
うめのかをりはうつみはてれは　伊東いと子

木々はみなうもれし雪にうもれぬは
そのかにゝほふうめのひとゑた　伊東千代子

朝日かけさすかにはなのしたひもの
とけてそにほふゆきのうめかゑ　村田多豆子

日かすへてつもりし雪もきゑなくに
はるまちかねてうめはさくらむ　三宅中枝子

さむけれと風のかをりをやめてこそ
ゆきのなかなるうめはをりつれ　河合縫子

をりされは雪はこほれて咲くうめの
はなはかりこそゑたにのこれゝ　村上操子

めつらしく三つ四つ咲ける梅のはな
をしくもゆきのふりうつめけり　田村多豆子

ふりしきて花をはゆきのおほへとも
うめか香のみはうもれさりけり　永田うめ子

梅か香はこちふくかせにしられけり
はなはふゝきにうもれはつれと　富田都子

ふりつもるゆきのうちより二つ三つ
　にほひそめたるうめぞゆかしき　松島きみ子
枝ごとにゆきふりつもるまどのうめ
　てるつきかげにかをりこぼるゝ　城垣しか子
梅が枝にゆきはつもれどにほふ香に
　はるをしりてかうぐひすのなく　土居しげよ子
かをとめてきなけうぐひすしら雪の
　ふるゐのうめははなさきにけり　角　龍子
やまざとはまたふる雪も消ゐなくに
　しづのかき根にうめかをるなり　海島伊登子

二月五日兼題　歌文の添削を乞ふ文

天　富山縣氷見郡氷見南上町八五ノ一　伏脇米子

久方の天にしては、下照姫に始まり、殿根の地にしては、素盞雄尊より起りて、時移り、事去り、樂しび、悲しび、往きかふとも、青柳の糸絶えず、松の葉の散り盡きずして、柾の葛長く傳はり來ぬる、敷島の道の、いや榮えに榮え行くことの床しうて、淺香山なる山の井の淺き心、難波津の難波のこともわきまへぬ身ながら、月雪のながめ、或は花鳥の色音につけて、折節のすさび書い續くれど、姿も調もみだりなれば、まばゆく耻かしうて、人にもえ示さでのみ、あたらこの年月を經ぬる身の、かくては、いつの世にかは、斯道に入り立つべき。いでや畏こきの極みなれど、大人の高き尊き添削を仰がむやと思ひなりぬるを、若　許させ給ひて、教子のはしに加へんと、玉の言葉の露だにかけ給はらば、有難き限り嬉しき極みにこそ。かく聞え上げ願ぎまつるは、ふみ教子なる俊子君の玉あひの友、同じさとなる、米子になん。あなかしこ。

地　信濃國東筑摩郡鹽尻村　高砂きよ子

春立ちしとは名のみにて、空かき暮らし降る雪に、のこんの寒さいときびしう、火桶を守るつれ〴〵の折柄、いさゝか心やりにもとて、腰折二三首、つたなき文など、ものし侍れど、元より淺きいさら川、あさき學びのおろかさに、とるべき言の葉もいで侍らず。申しきこえんもをこがましうなめなれど、御事しげうおはさんをり、かへりみず、乞ひ侍る。御ひま〳〵に、點さし加へ給はらば、此の身にとりて、こよなき幸になん。次に、この若菜一籠は、雪間を分けて摘みとりたる物にて、いと少しき程には侍れど、まだ珍らかなれば、御ともに、進め侍る。受けさせ給はゞ、いとうれし

うほいになん。かしこ。

人

富山縣氷見郡窪村字柳田　屋舗鈴枝子

海山かへ難き、み情を蒙りながら、年頃消息のみ聞え上げて、参らざるは、なめなれど、母なる人の、せちに仰すれば、年立つ即てど、日をさへ擇りて、今いくかど、去年の末より、二歳かけて、指かゝなへ待ち樂しみにしものを、此の三日といふ日の夕つ方より、心地惱れて打ち伏しぬれば、何も心に任せずなん。去年たまはりしかいなでのみ評めよ、の給ひかけたる言の葉の露の光、いとまばゆく、暫し夢路を辿る心地し侍りぬ。さるは、嬉しさ身にあまりての心驕になん。今度、添削仰がんとて奉る、文は例なれど、歌は、伊勢、源氏のを本歌にてよみ侍りつるなり。虎を猫に、龍を蛇にとりなしつれは、中將の大人、式部の刀自達、いかばかり苔の下に、笑ひたまふらんと、いといとはづかしうなん。昨夜かも、君がみ庭の梅の、むかしの面影床しと見侍るに、やがて、雪中梅よめとのたまはすれば、御令孃清子刀自と、御前にかしこまり、互に、まけじと、詠み侍りしを、現心に返りて、扨は、夢なりきよ。あはれ、手足こそかなはね、心は疾くみそばに通ひやしぬらん。み庭の梅よむ頃は、はや心爽やぐてふ、神のしらせかと、偶ろうれしう床しさまさりて、飛び立つばかりになん。聞え上げまほしきこと、澤に侍れど、ものうけれど、かしこけれど、筆はぶきて、添削仰かん歌文に、添へぬ。かしこ。

秀逸五篇

三重　河原芳子

賤が垣根の梅の花、匂ひなづかしう、霞がくれに、春たつぐるなる鳥の音も、なにさなう長閑なるに、いづれのくまにかひそみけむ。猶ほかへる餘寒の風の身にしみておぼほはべる此の頃、わが師の君には、いよいよすこやかにましまして、ゆかしきふしなどもらしたまふらん。數ならぬ姿、いさつゝがなう、めぐみあたゝかき父母の膝下にありて、花に向ひ、鳥の音をきゝ、あるは、霞をわけなどして、其の折々にものしはべりしつたなき詠草、心なき花鳥も、いかに思ふらん。われながら、なこのわざなりやと思ひつゞけはへれど、かれて、師のすゝめたまひしこさのまにまに、かくはものしつ。み机の下にきこゐまゐらす。いかやうにさも、たゞしたまひ、つたなきふしぶし、あやまれる言の葉など、數へみちびきたまひなは、いかにかうれしからむを。あはれ、つたなき才をもすてたまはで、めぐみみそなはしたまひてよ。かくばかりには、いさなめげなるわざにはへれど、ゆるしたまひてよ。日ならずまうでゝ、くさぐさきこゐまゐらすへくなむ。あなかしこ。

山口　村上操子

世はなへて春のけしきになりぬとおもふにも、こゝろうかれて、なにくれとつたなきうたに、文章に、ものし侍るを、さすがにかいもねやらず。されど、わが心に、よきあしきを、わきまふべきにも侍られば、例の二ひらみひら、たゝう紙にうつし出てゝ、御さだめをこひまつるへきふしもあらば、御心のまゝに、御筆を加へたまひて、かすめる月の、おぼろげならず、咲く花の匂ひふかくとりなしたまひてよ。猶、きこゆまほしきことは、おほかれど、またのたよりにとなむ。あなかしこ。

松山　宇高まつ子

いまだ春のたち侍らぬ頃にや。ふる年よりも、寒さいみじう身にしみ侍るを、師の君には、いかゞすぐさせ給ふらん。扨とや、先日の御會のおもしろかりしこと、今に忘られず、いかで、御會毎にとおもふから、葦わけ舟の障り多き身の、心にまかせれば、せめては、兼題の歌文のみはと、朝夕のいさま〳〵に、からうしてひねりいてたれど、例のあやしう、詞もつゞかず、歌とも見ねぬに。我ながらあさましう、かゝるもの、人に見せはべらんも、はづかしければ、直にもかいやり捨つべしとおもひ侍れど、さすがに、惜しきこゝちせられて、そのまゝに、手箱のそこに投け入れ置き侍りぬ。さておもへは、かくては、初學の、いつ悟るなりあるへき。おほけなけれど、皇后の宮の金剛石も磨かずば、玉も光はそはらじと、宣ひしこともおもひいでられて、愈の朋さへ、いと苦しくかゞやかしさを、忍びて、御覧にさゝけ侍るを、いかで、御こゝろのまゝに、加へも削りもしたまひてよと。日比の御恩にあまへて、たれぎまつるになん。あなかしこ。

大分　本庄小なみ子

遠ざかれば、うとくなるとのたとへにて、其の後は、御左右も御伺ひ申さで、すぐし候段、御ゆるし下され度候、この度突然かゝること申上候て恐入候。私事、かれて、國文をたしなむとは、申すもをこの至りなれど、御承知の如く、在校中も、國語に、重きを置きて、勉強致し、田舎にひきこもり候ても、ひとり、國語の國文にのみ心をいれ、文法、韻語などは、折々復習致居候とも、只文章のみは、かきつゝるはかりにて、よしあしも分けかれ候へは、御迷惑とは存候とも、以後、何くれと綴り合せて、御送り申候に付、御閑暇の節、御添削御願申度候。御うけがひ下さべきや、御伺申上候。眞に、文章思想なきものは、如何に、時日を費し候ても、思想をこらし候ても、さらに、やさしきことはも、浮び申さず候。さりながら、うしの歩のぬろくとも、絶ね間なく試み申考に候まゝ、何分にも御願ひ申度先は御願まで、如斯に御座候以上。

(以下原稿到着順)

岐阜　國枝すゞ子

寒中とは申ながら、殊の外、ひね〳〵敷、おはしまし候處、如何御暮し遊ばし給ふらん。伺ひ上參らせ候。扨、明後日は、花月社、月並歌會これあり、兼題は、江上霞にて候。とくより、いろ〳〵趣向相考へ申居候へ共、未熟の身にては、思はしき考へも出て申さず。ふかく考ふるにつれて、歌のあやめわけがたく相成候間、今日迄、如何せばやと困じはて居候。されど、いよ〳〵日並もさしせまり候間、徒手にて參るも、口惜しと存じ、日頃思ふよしかきつけ申候へど、たゞ三十一文字を、かきならべ申候のみにて、趣も法も相かなはず、人樣の御前は出され申さず、いと〳〵おもはづかしく候。毎度にて、誠に恐れ入候へ共、別紙にかきつけ候間、一筆御添削なし下され度、御多忙中、至急の事申出、さぞかし御迷惑には御座候はん。されど、何事も、あまきを慕ふ、稚子の習ひと、おほしめし給はり、このねがひ、よしなに、御きゝ納れ給

はり度、くれ〳〵も、御願ひ申参らせ候。あなかしこ。

長澤いゑ子

いさしづかなる山里に、家居をうつし侍りしより、腐つれ〳〵なるまゝに、山川のけしきなど、折にふれつゝ、文に作り、鶯の聲を耳にせし時なそは、拙きながら、腰折歌に詠み侍れど、音の葉のさゝのはぬふしなどわきがたくはへれば、御目に掛け奉るも、げに耻かしうは侍れど、此のまゝに捨て置かんも、口惜うはべれば、御暇の折、よきに、御訂を加へさせ給ひてよ、あなかしこ。

齊藤すわ子

寒さ漸く立ち去り、四方の木のめははるの砌、御許様には、益々すこやかに御勤學あらせられ、いさめでたく存じ奉り候、次に、妾が身も、かはりなく日々勉め居り候間、乍餘事御安意下され度候。さて、歌文などのことは、これまで、心にもかけず、打ち過し候に、年たつるまゝに日々の日誌は勿論、春秋の月花に思ひを寄せ、或は、名所舊蹟を見て、これを記しさゝめんと存候へども、こゝろは充ちながら、筆は進み不申、今更、いさ口惜しく存候。此頃おもいおこし候て、獨習相始め候へども、かくては疵瑕謬誤なもさころによしなく、進歩も見ぬ不申候。つきては、甚だ憚かれ候へども、御ひまに御斧正の程願上度候。すなはち、歌十五首、文二篇、御送り申上候間、何卒御加筆下され度くれ〳〵も御願申上候。あなかしこ。

佐々有鄰子

さなしかいのちけの筆を、硯の海にさしぬらして、師の君の、御もとに、かしこみいやまひ奉る状は、かれて、御教をうけし有鄰はこのごろ、友達二人三人うちつれて、樂浪の平島の温泉にものし侍りしに、温泉勝景の歌をさ、すゝむる人の侍れば、詠み出てたり、しもの七八首、また、此の文は、新玉の年のはじめに、父母にさもなはれて、楷梯の熊本市にゆきかひの紀行に侍れば、そりさへて捧げ侍りぬ。あはれ、朱點をあはせたまはらば幸甚。あなかしこ。

小野かつ子

此の程より雪げの空にて、さむさも、一入たへがたきこゝちせられ候處、昨夜より降り出し雪に、冬枯れて見にくかりし庭も、今朝は、俄に、銀のうてな、玉の林を布き列へたるやうにて、まことに妙なるさまさなり申候。さて風流の遊も、久敷行ちたね候折柄、今朝程は、余りことゞしう降り積り候故、さむさも烈しく候へば、火桶一ッを友さして、いとはしたなき文書き綴け候。まことに、盲蛇に畏ぢずさか申すやうには候へさも、御許まで差上候まゝ何さぞ〳〵、御閑暇の折、厳しく御斧正下され度、伏してねきまつり候。かしこ。

三木蕗子

この頃の、日短き空、如何にくらさせ給ふらん。寒さのいやましてより、晴み曇み定まらであるは彼のふりみだれあるは吹雪のすさましげなる、なか〳〵におもしろしさいはんよりは、いぶせくなん侍れば、つれ〳〵なるまゝに、ふみうたども、いさゝかのし侍れるを、たゞしたまへや。されど、ことしげくおはすなも、しらぬがほに、きこねまつるも、いさかしこう侍れど、いそぐべきものにもあらねば御いさまのなり〳〵にさ、ねききこゆるになんかしこ。

安孫子悦子

寒さいや加はりゆく此の頃、師の君には、いかゞおはしますらん。定めて、御いさひなく、敷島の道に分け入らせ給ふさ察し侍るになむ。さて、此の程の會には、折あしくて、ねさむらはず、いさ悔しさ思ふなりふし、御許よりの御玉章にて、探題をたまはりい

と仕らむとて、燈かゝげつゝ、思ひつゞくるまゝ、書き出ではべれど、いとあやしう拙々しくて、御目にかけむも、いとなこながら、今は、拙きをもかへりみずてなん。あやしの業と、あはれみ給ひて、御ひま〳〵に、御筆加へさせ給へや。あなかしこ。

岡田春子

つたなき筆して、願ひあぐる文も、君にはいかに見給はんといと、いとはづかしうなん。さても學びの庭をいでゝよりは、師とたのむ方も候はねば、朝な夕なに、かきつゞくる言の葉も、いとたどたどしきふしのみ多きに、歌はましてになん。さて、あまたかいつゞけ侍りぬるを、是非に御添削をねぎまつるになん。拙しささかめ給はで、よきにみふでを加へ給はゝ、いともうれしきかぎりにこそ。かしこ。

岡田柳子

寒に入り候てより、一きは寒さはげしふて、只埋火のもとにのみかゞまり居り候を、又も夜べより、白雪のふり候て、けさおきいでて、庭もを見やれば、木々の梢は、一時に花の綻びたる如く、常は家にのみとぢこもれる我が身も、うかれ出てはべりぬ。枝おもげにふりつもる白雪の中に、かほりゆかしく、にほひいでたる梅の花の、一入けだかくて、心なき身にも、其操の、思ひやられて、いとゞ感にたへがたく侍れば、腰をれ二三首、さては、雪の題にて、わづかに、文をかきつけ侍りぬ。拙なさは、いふまでも候はねど、もし御暇もおはさば、よきに御筆を加へさせ給ひてよと、切にきこえまつるになん。をこがましと、な笑ひ給ひそ。かしこ。

三宅いくよ子

はしりがきにて、いとなめげなから申上候。妾事、いとけなきより、歌の道は、さる人につきて學ひはへれども、文章は、近頃習ひ初め候のみにて候。さるに、田舍に住ふ親族の老人にて、いたく風雅を好める人より、都の新年の有樣など、詳しうものしておくれよと、せちにいひおこせ候へど、いまだ、かたなりなればと、ことはりはへれるに、又しも申し越せ候故、さまではいなび難うて、書き試み候處、なれぬ事とて、殊に劣なく候まゝ、御心のままに、御筆加へ給ひて、ことばつかひ、てにをはは更なり。あやまれるをば、ためたまはらんやう、くれ〳〵も願ひ上候。あなかしこ。

林文子

この頃の寒には、年若きものも、ともすればかゞまりがちなるに、まして、よはひ高くましましては、と陰ながら、御あんじ侍れ〆に、昨日花子様より、すこやかにおはし給ふよし承り、心もやすまり侍りぬ。さて、公の御事業げくおはしますに、いと願ひかねれど、先つ頃より、奥ぶかきみ山の谷に引きうつりて、外に語らん友もなきまゝに、いで、敷島の道にわけ入らんと思ひたち、四五首つゞり侍りぬれば、いつにても、御氣に召させ給ふ折、よきに引き直し給へかし。殊に、此の道には、至りてうとく、言葉の花などは、よその梢と、眺めすくしゝ怠りのつもりて、たゞ〳〵しく、まことに、恥づかしく侍れど、さてのみはさてなん。

徳永廣子

幼のころより、歌のみちに、心をよせ侍れど、わけいるべき、山口のしをりだになく、心くるしくおもひ侍るなりから、幸ひに、師の君のおはすことをうけたまはり侍れば、よろこびて、をりにふれて、思ひ出せる歌に文に、とりあはせて、はぢをもしのび侍りて、御添削を、うちつけにねがはまほしく侍れば、師の君も、行末ながく、敎へみちびきたまへかしと、一言願ひ奉るになん。あなかしこ。

福原藍子

きさらぎとかや、月の名もしるき、此の頃の寒そら、師の君には、いつも／＼、御すくよかにあらせられ、いとま出度なん。さても、此の程、親族なる狭山の叔父の年賀に付きて、老のたのしみにとて、人々に、歌文を乞ひ集むる序に、妾にもせちにものせよとそのかさるゝに、否まん様も侍らぬものから、やう／＼腰折一首と、此のあやしき一綴りの文とを、書き付け侍りしかど、言の葉の、あるは、あまり、あるは、足らはぬところなどありて、われながら、いかゝとおもへど、今更、やまんも口惜しく侍れば、冷ね／＼しき折柄、心くるしくは侍れど、よきに御筆加へさせ給ひてよ。まづは、ねぎまつるになん。かしこ。

吉田政榮子

これのみは人の國より傳はらで
　神代をうけし敷島のみち

げにや、昔よりいひ傳へし如く、今にいたるまで、賤の眞砂のつくる時なき言の葉かな。さて、雲の上人は、いはず、賤が伏屋にすむ身も、御國の生れしかひには、腰折にても、よみ出ではやと、かれて思ひ侍りながら、なりはひのいそがはしさに、さるなりとても、なかりしに、昨夜よりの雪に、野も山も、見渡すかぎり、銀世界となり、殊に、庭の紅梅の、二ツ三ツさきたるも、いとうれしく、ふと、心にうかびし三十一文字、おも恥かしくははべれども、御許にさゝげ侍れば、御ひま／＼に、御添削たまはらまほしく、なほ、外に、和文一章、これも、よきに正し給はれと、伏してねぎ奉るになん。あなかしこ。

坂田彌代子

昨日今日は寒さも、一しほにて侍るを、いかにすくさせ給ふにか。さためて、大人には、御障もあらせられず、しき島の言の葉草を、御あつめ給ふらんと、おしはかり侍り、折にふれては、よみ出て、また、感じたることども、文にかきこゝろみぬ。もとより、初學の事とて、三十一文字の數あるはかりにて、文も、幼子のいひならべし如く言葉もしらべも、とゝのはで拙きは、我ながらあさましうなん。されど、かくてやまんも、口をしく、ければ、大人の御筆もて、加へもし、削りもし給はらんには、枯木に花を見ん事もと、別紙に記して參らせ侍りぬ。御いとまの折、御なほし給ひねかし。なめけなれど、さりねぬことの出來ぬれば、人してねぎつるをゆるし給へや。何れ、ちか／＼さふらひて、御教うけたまはらまほしうなん。

八木沼里子

けさほど目さめて、まどうちひらき候へば、かのたまだらにふる雪に、木々のこずゑは、時ならぬ花を咲かせ候て、げにねもいはれぬながめなるまゝ、おもほえずも、口すさみ候は、左の三十一文字にて候。もとよりしろしめすが如く、いさかひ／＼しき口にて、おもふかぎりをいはれ侍らず、さるべきふしもなきことなれながら、御目にかけ候まゝ、何とぞ御添削下され度ねぎ上けまゐらせ候。いにしへ人のことのはに、歌は鬼神をも泣かすとかまなし候へ共、こはいかに、鬼神もいふかしさに堪へざらましとおもひてなん。あなかしこ。

中田はる子

みやまかくれのしづがふせやも、何となう、新年といへば、あらたまりて、昨日今日のさむさも、一としほに侍るを、師の君には、いよ／＼、御榮の由、かめのをの末ながう、黄金のよはひを保たせ給はんことを、偏にねぎまつるにこそ。こなた、皆々も、かはりなく、暮し侍れば、御心安う思ほしたまはらはや。さて、明けくるをさまる御代の、新年につけての感、及ひ、日記、つたなき歌など、もしほくさかきあつめ侍れど、かなはぬふしもわきまへぬ事

に侍れば、あはれ、御手すさの折、御てんさく給はり度、風の心地に、打ちふし居り侍ることさせて、失禮ながら、手紙を以て、れき侍るを、悪からず思召したまへ。いづれ、近きに、さふらひて、御教をうけたまはり侍らまほしくなん。つけて申す。こなた手植の室のうめ、今をさかりとさき出で、人まちがほに侍るを、御ひまのなり、み車をまげさせ給はらば、ありがたきしあはせになん。先は、御ねがひのみ。あなかしこ。

雄倉つる子

降りみふらずみ、中々に、五月雨よりもいぶせき折から、師の君には、いかゞ暮させ給ふにか。定めて、御こと繁く、渡らせ給ふ御事と、やま〳〵察し上げまゐらすになん。さて、今日此の頃の物うさに、何にくれと、心にうかびつるまゝを、せめては、心やりにとて、腰折いさゝか、並に、學の道と題して、文、物し侍れば、御いとまなき御様、いとかしこう侍れど、御心向かせ給ふをり、點し給はらば、こよなう幸になん。あなかしこ。

中村かち子

春立ちかへるのどけさは、わきて、都の空こそゆかしう侍らめ。今は、山の奥なる住居とて、谷の鶯、岡べの下もえこそ、袖にもあまりはべれど、心なみいかんたよりとてもなく、心の玉の、いよよくもり行く心地せられてなん。あはれ、去年の秋、師の君と、盛田のほとりにて、別れ参りし、朝顔のまよひは、いまだに、かきくらす心地して、昨日今日とのみ覺え侍るを。心つくしの、旅路にも、はや、五月、六月にもなり侍へれば、學びの業さへ、しぞきがちにて、いとほ意なうなむ。いつまでかくてやはと、近きほとりに、よき師もがなと、求めはべれど、斯る山里に、いかでおはすべき。かぢを絶えたる沖の小舟にも似たる今の身を、あはれともおぼしめして、御事多き中に、恐れ入り侍れど、月々に、送り侍らむ歌文に、御筆加へ給はらば、こよなき幸にこそ。

林やす子

先つ頃より、いと心のどかにて、させる家の業も侍らねば、ふと思ひいでゝ、歌といふものよみてましと、見もし、聞きもしつることども、覺束なくも、三十一文字に書きつられしが、やうやう、二十首あまりにもなり侍りしを、このまゝすてんも、本意なき心地のせらるれば、御目にふれんも、面はゆき業に侍れど、師の君のみをしへ乞はんとて、無禮をもかへりみず、切にねぎ奉るになん。あなかしこ。

西村[illegible]子

御寫眞、いとゞく送らせ給ふるを、忝く納め候。開けたる大御代に逢ひながら、上る雲雀となりてしがなと、願ひし古のうべなはるるも、そこがましけれど、父母に仕ふる身は、諸共ならでは、興國の狀たにも伺ひ難きに、まして、都わたりの狀は、夢ならではと、思ひ侍りしに、文の便を得て、まみえまつらずながら、深き御教を蒙りて、見ぬ友の心の句をも知らるゝは、此上なき幸になん。僕も、此度の御寫眞、こなたにも、分ち惠ませ給ひしまゝに、美しき御氣色を伺ひ奉り、たいめ給はりし心地せられ、いと〳〵嬉しく侍り、このたびの誌上に、ものせさせ給ひし、なげうてば石にも響のある物をの御詠、日比打ちたゆみてありし身の、深く身にしみ侍りてなん。末頃の竹ならねど、何時かめでたき節もがなと、願ひ侍り、例の腰なれ歌し上げ侍れば、御暇のひまに、御筆加へさせ給へ。かしこ。

村山てる子

いまだ、ひとたびも、御目にかゝらず、そつじに候へども、實に、たよる邊もなき我が身、浮木を失ひしめしひのかめとあはれみを垂れ給へかし。おのれ、常にしきしまの道に志し、あるは、梅が

なる窓により、あるは、月清らなる川邊に心をすまし、四時なり〳〵、つれ〳〵なるまゝ、目にふるゝものども、筆のまに〳〵、つたなきをもかへりみで、そこはかとなく、くさ〳〵のふみうたども、書いいづるに、添削をあふがむ師もなし。さりとて、いたづらに、箱の底に、むめ置かむも、心行かぬまゝ、つひに、日頃慕ひまつることゝて、かくはねぎまつるにこそ。あはれ、ねがはくは朱筆取りてたへ。拙き書ざまとなとかめ給ひそ。御筆加へられ給はゞ、わらはが、一生の面目になむ。あなかしこ。

中崎あくる子

年は改り候へども、いまだ春のたち侍らぬ故にや、寒さいとゞ堪へがたくて、とかく埋火のもとはなれかね居候に、隙もる風の、なつかしく打ちかをり候を、あやしみて、窓おしあけ見出候に、軒端の梅の、雪のなかにも咲きそめたるなり。嬉しさもうれしうて、例の拙きながらも、二三首詠みこゝろみ候間、御手すきのをり〳〵、何とぞ、御添削給はり度、ねぎ奉るになむかしこ。

阪本榮子

春たち候とは、名のみにて、雪さへいたく降りしきり、今朝ほどなどは、筆の先きさへ、こほるばかりに覺え候。御地は、當地にくらべては、あつさもさむさもおだやかの由、承り候へば、今日頃は、はやあたゝかに、吹く風も、春めかしう、谷の戸いづる鶯の初音も、いつよりか、御まくらを、おどろかしはべらめと、いと〳〵ゆかしう思ひやり奉り候。時節柄、いかにすごさせ給ふらむ。定めて、御けしきうるはしく、渡らせられ候御事と、はるかに、御祝ひ申上まゐらせ候。さて、うちつけながら、御願申上度事御座候。したしき友より、さる歌會に、是非入會せよとすゝめられ候へども、歌など申す事は、名こそきゝつれ、いまだ、一首だに、試みしる事なく、殊に、つたなく候まゝ、ひかへ居り候へども、折角のすゝめをあだにいたすし候も、如何かと思ひかへして、一首試み候、御存じの通り、かゝる事は、始めてにて、語格てにをはは申に及ずば、筆のはこびさへ、まはらぬものに候まゝ、何卒御直したまはるやう御願ひ上まゐらせ候。又、ほかに、拙き文をもかきしるしさし上候まゝ、これまた、御正したまはり度伏して御願申上參らせ候。あなかしこ。

横手こう子

過ぎつる歳。鎌倉にあそびしをり、あたりの名所舊蹟を見ありきて、見聞のまゝをかきあつめたる歌文數十首はべり。之をそのまゝ、筐底にうづみおかんも、口をしければ、とり出てゝ、御もとにさゝげ侍り、もとより迂作にははべれど、御筆加へ給はれかしとねぎ奉るにこそ。

新井さ代子

昨日の氷、今日の雪と、日に〳〵寒く相成候へども、師の君には、いつも御機嫌よく入らせられ、御目出度き極みに御座候。偖、毎度、御用多の處に、御手數を煩はし、甚恐入候へども、昨日の雪の景色を、たゞに見過さんも、口惜しくして、辛うして、文一篇、歌十首、書き認め候まゝ、御手隙の折に、御筆加へ給はり度、御願申上候。只今も、學校より、弟歸り來て、あまり拙しなど、したゝかに、わらひ居申候。御迷惑とは存じ候へども、外によるべもこれなく候まゝ、何卒御直し下され候様、祈り上候。かしこ。

大谷津峰子

寒に入りてより、わけて寒さもはげしう相成候。さて、未、御目もじ仕らず候へ共、日頃したひまゐらせ候まゝたのしみ上まゐらせ候。牛の歩のよし遲くとも、絶ゐせず學びたらんには、など思ひ立ちて、このころこしをれ數首よみいで候初めてのことにて、此の上なく拙なく候へば、如何様にも御筆加へさせ給はり度、尚此の後

とし、御添削下され候様、なめげなるをもかへり見ず、ねぎ奉り候元より、かゝるわびしき山家に生立ちし身の、師とたのみまゐらすべき方もなく、殊に、さねにぶく、よろづにたど／＼しく候へは、あはれと思召し、まげても、このことはゆるさせ給はり度、尚近きにさぶらひてよろづたのみ上申べく候あなかしこ。

永田うめ子

梅咲ひ、鶯うたふ此の頃の空のけしき、師の君には、いかに眺めさせ給ふにか。さてわらはこそ、一日友がり訪づれ侍りし折しも、歌合のむしろ開かれたりしに、いとおもしろきものから、学びたることなき身のかなしさは、詠みいづることかなはで、いとうらやましく、はづかしく覚ねしに、その後、歌のふみ、これかれ、くりひろげ、おぼつかなくも、ひねりいで侍りぬ。もとより、初学のことゝて、言葉も心も、いとたど／＼しく、我ながら、あさましうおぼゆれど、富士の高峰も、ふもとよりこそと、つゝましさも、打ち措きて、日ごろこひまつる文にかきそへて、御もとに送りまゐらせ侍るを、あはれと　思ぼしたまひて、御いとま の折／＼、よきに取りなほさせ給はんことを、ひたぶるに、ねぎまつるになん。あなかしこ。

宮武文子

言葉は花にして、わざは実なりとは、兼て聞きつることなれども、妾の如きは、もとよりわざごとのいたらぬ故にや、とかく、其の花なる言葉の出でやられば、ひたすらに苦しうのみ思ひ侍り。さるに、こたび歌にまれ、文にまれ、かいつけて見せよとの、懇なる御教により、たゞ思ひうかべ候まゝ、物し侍りぬ。素より、厳鶯の音を習ふけふにしあれば、とおぼしめして、歌よむすべ、文つゞるさまなど、つばらに教へたまはらんことれかはしうなん。今日しも、よきたよりのあるに、拙き詠草と文稿とをもたらせて、みもとに進め侍りぬるになん。あなかしこ。

松上鶴

小森田輝子

千代かけてこゑもゆたかにあし鶴の
まつの木すゑにあそぶのどけさ

佐々小琴子

あしひきの岩ねのまつのねだしげみ
千代すみなるゝともつるのこゑ

佐々有鄰子

霜やたびおけどときはのまつが枝に
つがひはなれぬつるのもろこゑ

澤田存子

大きみのよはひをまつになぞらへて
よろづ代いはふあしたづのこゑ

木川里子

大きみの御代を八千代とよばふなる
たづがれたかし老まつのうへに

右田藤子

雲ゐるまでみどりにみゆるまつが枝に
よろづ代よばふつるのはつこゑ

高砂き代子

あかねさす朝日のとけみ大庭の
松に千代よふ友鶴のこゑ

晴天鶴

同人

くもりなき御代をうたひて朝日影
まはゆき空に鶴なき渡る

社告

○代價は通貨又郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送の事
○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價			廣告料
一冊 拾錢	六冊前金（三ヶ月分）五十五錢	十二冊前金（半年分）壹圓四	五號活字廿三字詰一行金二十錢
全國無遞送料			

明治三十三年二月四日印刷
明治三十三年二月五日發行

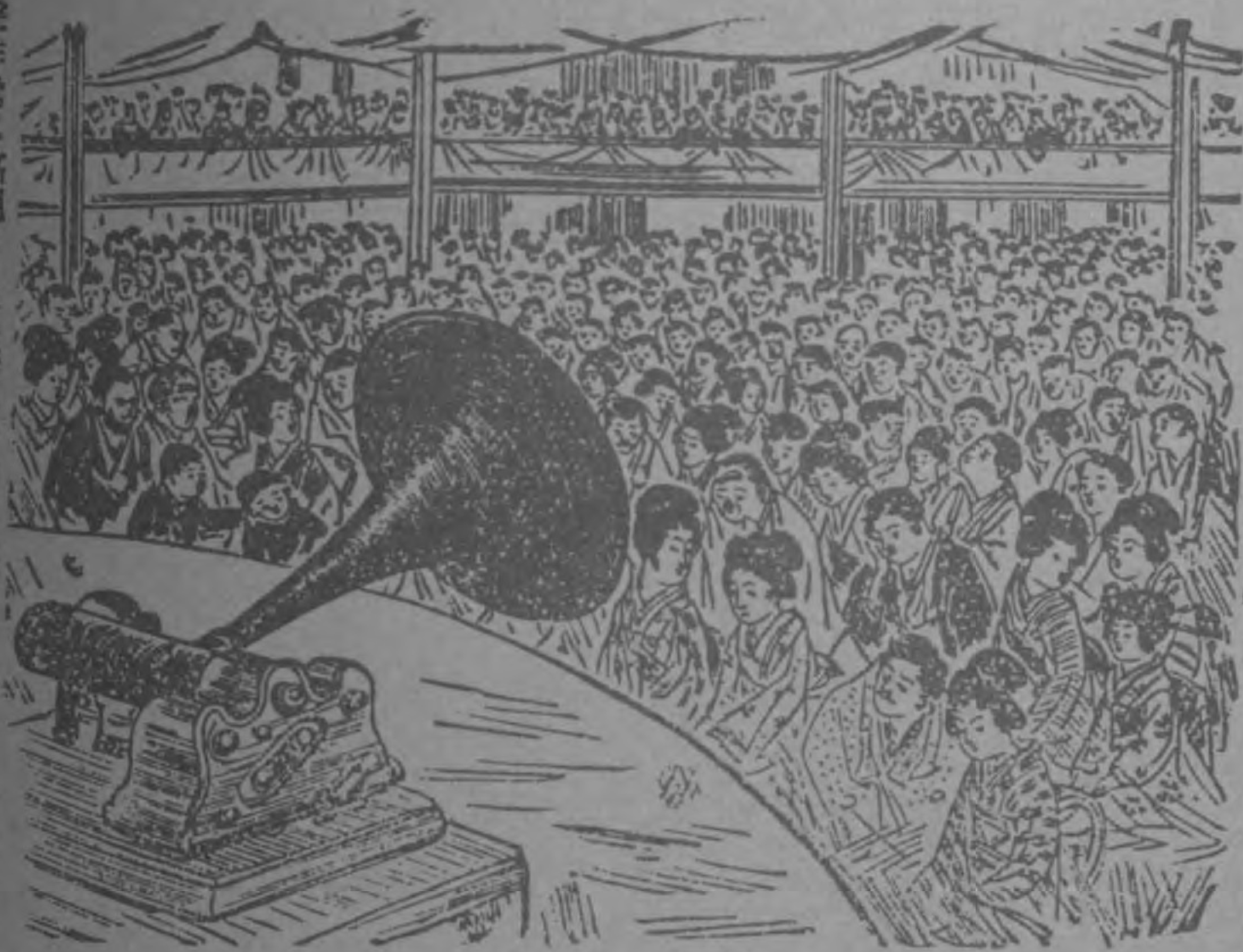
編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衛

印刷人　東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地　並木良雄

發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地（電話番號新橋八八）　國光社

蓄音器 新工夫一大進歩の 至急廣告

蓄音器は更に新工夫を加へて一大進歩を爲し目下其品漸く本堂に着荷したり●從來の蓄音器に比ぶれば其**特色**●●●●●●の要點は左の如し



●音聲非常に高朗にして從前の如き低聲にあらず●喇叭はニツケル鍍なれば少しも音聲を紊す事なし●器械の要部に塵除を附けたれば塵埃の入る憂なし●蠟管の製造は從前に比ぶれば堅硬にして肉厚し故に如何なる炎暑にても熔解する事なくしかも永遠に保存して變調する事なし

價格は

甲種	金六拾圓
乙種	金四拾八圓
丙種	金三拾八圓

●市外遞送料金五十錢

此新工夫一大進歩の蓄音器第一着荷は員數に限りあるを以て御望の紳士閨秀早く御來需あそばされよ後れては人手に渡るべく候早々頓首

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九番地
（電話番號新橋三百三十三）
（長距離電話番號新橋三百三十三大阪東七百卅三）

時計及寶玉類
貴金屬美術品商



妙技一等賞牌

天賞堂

東京神田小川町（電話本局一一六〇）
天賞堂小川町出張所

横濱尾上町五丁目（電話八七六）
天賞堂横濱出張所

大坂心斎橋北詰（電話東七三三）
天賞堂大阪出張所

名古屋市玉屋町二丁目
天賞堂名古屋出張所

廣島市大手町三丁目六十五番地
天賞堂廣島出張所

熊本市上鍛冶屋町十番地
天賞堂熊本出張所

長崎市鍛冶屋町四十番地
天賞堂長崎出張所

福岡市橋口町榮屋方臨時
天賞堂福岡出張所

北海道小樽色内町越中屋方臨時
天賞堂小樽出張所

（印刷所　東京順光社印刷所）